

平成 29 年度特定課題研究成果報告書

デイヴィッド・マルフ作品研究—翻訳と注釈付文献制作

中澤 幾

目次

研究概要iii (3)

デイヴィッド・マルーフ作 『ある人生の想像』

(*An Imaginary Life* by David Malouf).....-1- (8)

An Annotated Bibliography: David Malouf's *An Imaginary Life*.....-1- (82)

研究概要

本研究の目的は、オーストラリア作家デイヴィッド・マルーフの代表作の一つである *An Imaginary Life* (1978) を、文学的解釈を踏まえた上で翻訳して発表することで、日本におけるマルーフ研究、ひいてはオーストラリア文学の研究に貢献することにある。

デイヴィッド・マルーフ (David Malouf, 1934-) は、オーストラリアの作家、詩人である。今回扱う *An Imaginary Life* と、*Remembering Babylon* (1993) (『異境』という邦題で現代企画室から出版されている) の二作が彼の代表作として取り上げられることが多い。特に後者では国際 IMPAC ダブリン文学賞を受賞し、ブッカー賞にもノミネートされたことで、マルーフへの国際的な関心を集めた重要な作品といえる。一方前者は自伝的であった処女小説 *Johnno* (1975) に次ぐ二作目の小説で、オーストラリア文学のキャンノンに位置づける見方もあり、彼をオーストラリアを代表する現代作家の一人にした作品である。

以下、両作の概要を述べる。*An Imaginary Life* は、*Metamorphoses* (『変身物語』) など知られるローマ詩人オウィディウスの物語である。とある理由で (歴史的にも、本作のプロット上も不明なままである) ローマ帝国から追放されたオウィディウスが、野生の少年との出会いを通じて自然との調和を獲得する姿を描いている。*Remembering Babylon* は、19 世紀半ばのオーストラリア、クイーンズランド州を舞台に白人入植者とアボリジニの関係を扱った作品である。長年アボリジニと生活を共にした白人の若者が入植地に現れることで、物語は人種間の軋轢に留まらず、「人種」とは何かという問題に迫っている。

ローマ帝国とオーストラリア、一人称と三人称の語り、詩人と入植者。

一見したところ、作者以外の共通点はないようにも思えるが、この二作品は文学研究上とても関係が深いという考えが主流である。主な点を二つ挙げるとすれば、異国の地に飛ばされた人々と、彼らの世界観を一変させてしまう超自然的な存在である。*An Imaginary Life* のオウィディウスは帝国から追放されており、*Remembering Babylon* の入植者たちは喜んでオーストラリアにやってきたわけではない。両者は共通して植民地主義的・帝国主義的な枠組みで辺境の地を捉えようとする。自らの言葉や文化を通してのみ新たな地を理解しようとし、この「劣った環境」をつくり変えようとするのだ。だが、そこへ現れるのが野生の子ども **the Child** であり、アボリジニと白人の境界を自由に越えてしまう **Gemmy** である。彼らの存在はオウィディウスや入植者の子どもたちに全く別次元の世界観を与える。

現在までにマルーフ作品に関する多くの研究がなされ、この二作を一对として扱う論文も多数存在する。それが成功したか失敗したかは議論が分かれるところではあるが、マルーフが **the Child** や **Gemmy** を通して行っているのはポスト植民地主義的な捉え方でオーストラリアを再認識しようという試みである、というのが主流な説となっている。だがこれらの作品が植民地主義を正当化する試みにも、それによる被害を受けた側からの批判にもなっていないのは、主人公たちが「他者」との出会いで変化を経験していくことにある。特にオウィディウスが **the Child** に見ているのはそこに映る自分の姿であり、彼は自ら新たな地の自然を受け入れて、言語や植生の違いによって暗示される様々な境界を越え、そして境界そのものを無意味にしてしまうのだ。*Remembering Babylon* においても先住民の象徴となる **Gemmy** 自身が白人であるという事実が、その境界線を曖昧にしてしまっている。非先住民であるマルーフ（実際にはかなり込み入った民族的背景を持っている）が、非先住民をして変化を経験せしめる。そして抑圧的な事

実（オウイディウスによる辺境の住民への優越感や、入植者によるアボリジニや Gemmy への敵意）を隠すことなく描いた上で彼らを自然や先住民と同化させることは、植民地主義の批判でも正当化でもなく、過去を受け入れて未来を変える姿勢の表れである。マルーフはポスト植民地主義的な作家として受け取られがちであるが、厳密には両者の間に立ち、オーストラリアの明るい未来を描き続けているのである。

他にも、ラカンやハイデガーの哲学、言語学的なテキスト比較、(*An Imaginary Life* におけるオウイディウスの) 自伝小説という側面を捉えた研究など、1978 年からの 40 年の間に様々な説が唱えられている。これらのマルーフ研究はオーストラリア国内はもちろんのこと、英語圏に留まらずヨーロッパやアフリカの国々などを含む様々な地域で行われており、同時に上記の二作品だけではなくマルーフによる他の小説や詩、脚本なども多数扱われている。

だが、日本では「デイヴィッド・マルーフ」という名は依然として知られておらず、無名であるといっても過言ではない。それは一般の読者においても、研究者たちにおいても同様である。前述の通り、*Remembering Babylon* は『異境』として 2012 年に邦訳され、他に「キョーグル線」という短編が 2003 年に同じく現代企画室から出版されているものの、一般的にマルーフの知名度は低く、文学研究の場においてすらあまり注目されていないと言わざるをえない。同じことはオーストラリア文学全体についても言える。英米文学という言葉がもはやイギリスやアメリカのみでなく世界中の（時には非英語圏の）英語作品を指すようになった今日でさえ、オーストラリア文学という領域は日本人にとっては身近ではない。多くの日本人にとって、オーストラリアの著名な作家や作品の名前を挙げるのは、イギリスやアメリカのそれらを挙げるよりも難しいだろう。こうした経緯を

踏まえ、マルフ研究、オーストラリア文学研究を盛り上げるためにも、今回の特定課題研究において *An Imaginary Life* の翻訳を中心に据えたマルフ研究を行うこととした。

まず、これまでに発表された様々な論文や、拙論ながらも 27 年度に北海道大学文学部に卒業論文として提出した *Remembering Babylon* に関する自論を踏まえて *An Imaginary Life* を翻訳した。また、29 年度に自身が制作した *An Imaginary Life* と *Remembering Babylon* の注釈付き文献目録をもとに、前者に焦点を絞って新たに制作した文献目録を資料として加えている。

二作品間の関係性を踏まえた上での研究ということで、今回の研究過程では特定の解釈的立場に立つことは避けられないと判断した。しかし、小説翻訳の基本的なスタンスとしては、自らの解釈を押し付けることなく一方の文化をもう一方の文化にうまく移行させることが最善であると考えている。そのため、必ずしも特定の解釈を翻訳に反映させるという意味ではなく、この概要説明や添付する注釈付き文献目録内の解説などをも通して、その解釈の余地を可能な限り残すことにある。中立的なスタンスを取る上ではできるだけ多くの解釈の余地を保つことが前提となるのは当然であるが、今回目指したのは特にこの解釈が排除されないように注意を払って翻訳することである。

注釈付き文献目録については、目録自体にも解説を付してあるが、以下のような流れで制作した。まず、二作品を対象として 28 年度に制作した目録をもとにして *An Imaginary Life* を中心的に扱っている文献を集めた。ただしこの研究の性質上、*Remembering Babylon* にもふれているものや、二つを比較しているものなどについては両作品について注釈を付している場合がある。1978 年以降に発表された論文や書籍全てを対象としているが、マルフへのインタビューや単なる書評は含まれていない。また、この目録

の質を確保するために、個人のウェブサイトで発表されている文章や匿名の文章は除外している。同時に、作品には言及しているが内容としての価値が低いもの（たとえば複数の作品や別作品を扱った論文の中で論旨を補強するために数行だけふれられているものなど）は確認した上で目録からは除外している。これらを年代順に並べて番号を付し、それぞれに英文で5行から7行程度の注釈を載せている。末尾には著者名をアルファベット順で並べ、それぞれ後ろに論文の番号を続けることで必要な文献を特定しやすくし、同時に文献数でマルーフ研究（特に *An Imaginary Life* 研究）における第一人者が誰なのかをわかりやすくしている。今回の目録の中では Bill Ashcroft の論文・書籍が三本含まれており、最多である。

マルーフはこれまでも数多くの作品を発表しており、この研究で扱った資料がマルーフに関する全てではない。だが、この研究が日本におけるマルーフ研究を活気づける一助となることで、さらにはそれが全体としての研究をさらに高みへと押し上げることになり、わずかながらもマルーフ研究、オーストラリア文学の研究に貢献できれば幸いである。

クリストファーへ

『ある人生の想像』

デイヴィッド・マルーフ 作

中澤 幾 訳

初めてその子を見たのがいつだったのかは、自分でもよくわからない。私が今見ている自分は、おそらく三歳か四歳ほどだろう。私は我が家の畑の隅に生えるオリーブの木々の根元で遊んでいて、山羊飼いが山羊たちを呼び集める声がかすかに聞こえる中で私はその子に話しかけているが、この時が初めてだったのかはこの距離からではわからない。山羊飼いが頭をオリーブの幹にもたれてうたた寝をしており、黒いあごの輪郭や、痩せこけて筋張った首、だらしなく開いた黒い口が見える。蜜蜂がハーブの間を漂う。空気がきらめく。晩夏だろう。牧草の中でケシの花が風に吹かれている。黒い雄山羊が二本足で立ち上がってブドウの新芽を探している。

その子はそこにいる。私は三歳か四歳で、今は晩夏であり、そして春だ。六歳であり、八歳だ。彼はいつも変わらない。私たちが話すのは、独自の言語だ。ひとつ上の兄には彼が見えない。私たちのすぐ近くを通り抜けていった時でさえ。

彼は野生児なのだ。

山羊飼いたちが野生児の話をしているのを聞いたことがある。それが彼のことなのかはわからないし、自分が彼を知っていることなど誰かに打ち明けたりもしない。彼らが言うには野生児は狼と共に暮らしていて、水源に恵まれた溪谷に開拓した私たちの農園や荘園の遙か向こう、東に広がる狭い谷間に住んでいるらしい。

外には本当に狼がいるらしい。奴らはずれの放牧場を襲ったという話を聞いたこともあれば、雪の中で遠吠えを聞いたような気がしたことも一度ある。だがもしかするとあれは彼の声だったのかもしれない。狩人が持ち帰ってきた狼の頭が、警告のために農地の柵に吊るされているのを見たこともある。その頭は灰色で、牙を剥き出していたにも関わらずそれほど恐ろしくはなかった。私は彼のことを想像し、狼は情け深い生き物で人間と似通ったところもあるに違いないと思った。そうでなければどうやって狼に囲まれて生きられよう。恐ろしかったのは首を切り落としたというその行為であり、喉元の毛を染めるとす黒い血が縄のように幾筋も流れ落ちる様子だった。おそらくはこれも山羊飼いからだが、しばらく経ってから私はこんな話を聞いた。確かに狼には私たちと似通った性質があり、反対に私たちが狼と同じ性質を持っていて、というのも、世界には月があるかたちになると狼に変身する人間がいるのだと。彼らはまるでこぶしを握りしめるかのように人間の心を閉ざし、再びそれを開いた時には狼の前肢になっているのだ。頭蓋骨が膨らみあごは前に伸びる。背中からは硬い毛が生えてきて腹まわりは毛だらけになる。徐々に身体が前かがみになって、やがて四つ足になる。声が野太くなる。そしてそれは月のせいなのだ。あの頃の私はそういったものを信じ込んでいて、そして不思議に思った。あの子どもは狼男なのだろうか。私たち人間

の中に潜んで、月の満ち欠けによって痛みを感じながら変身している狼男たちとは、実は森で発見されて私たち人間の社会に馴染ませようと連れてこられた子どもたちのことなのだろうか。

いつしか私自身の肉体が変化して男としての兆しが現れ始めた時、その子は去って行って二度と戻ってはこなかったが、あの頃から変わらず頻繁に彼と再び出会えることを夢に見続けている。私はふたりの間で使っていた言語を忘れてしまったので、もし彼が再び姿を現すとしてももうわかり合うことはできないだろう。彼は私に何かを伝えようとしていたのだろうか。そうだとしたら、うまくいかなかったようだ。もしくは、単に私が忘れてしまったのか。いつのことだったにせよ、彼の使った言葉が私の理解を超えていて自分の言葉に訳すことができなかつたのかもしれない。彼はいつか戻ってくると信じているし、ずっとそう信じてきたつもりだ。だがどんな姿をして戻ってくるのだろうか。あの頃の子どものままなのか。私と同年代か。それとも狼だろうか。もっと違う何かに姿を変えることさえできるのかもしれない。もしかすると既に戻ってきたが、あまりにも目立たない、なんの変哲もないかたちをしていたせいで私とその存在を見落としていたのかもしれない。

私は誰にもこの話をしたことがないし、その少年の存在を伝えることも避けてきた。同じ年頃の兄ならばわかってくれたかもしれないが、彼にすら話さなかつた。深い疑いを持つようになっても、ひと粒の信仰だけは残されていた。

I

この土地が日ごとに私に強い印象を刻み込むのはそのわびしさゆえだろう。どこまでも続く切り立った崖が空と並行になることはなく、その向こうには生気のない海が広がっている。西方と南方には山々が雲のすぐ下まで伸びる。北方の淀んだ河口の向こうには何もない草原が北の果てまで続いている。

一年のうち八ヶ月もの間、この地は氷に覆われる。この土地は北の果てから何らかの呪いでも受けたのだろう。一夜にして雪が降り積もる。ようやく解け始めて地面が現れたかと思えば、平原は異臭を放つ泥沼と化し、害虫がはびこり草むらから蒸気が噴き出す。灰色とも茶色ともつかない低木を除けば、樹木と呼べるものを見たことがない。花も咲かない。果実も実らない。私たちがいるのはこの世の果てなのだ。最も原始的な類の野菜ですらここには遺伝子を残せていない。果樹園や趣味の庭園といった概念が生まれるまであと数百年はかかるだろう。どこを見ても何もない大地が続いていて、西方と南方は行き止まり、北方と北東は平坦な土地が永遠とも思われるほど広がる。切り立った崖の斜面が空へと続く。河岸平野、群生するヨモギ、その向こうに広がる草原、その全てが低く立ち込める空へと続く。頭上は雪で覆われているか、もしくは目で見える範囲はおろか想像もできないほど遠くまで何もない空が広がる。雲はなく、鳥もいない。

だが、私が今描写しているのは心境だ。風景ではない。

私はこの地へ追放されたのだ。

トミスと呼ばれるこの集落には百ほどのあばら屋があるが、それらは木の枝を編んで泥で固めただけのもので、屋根は藁ぶきで床は叩いて固めた泥をイグサで覆ってあるだけだ。それぞれの家屋には柵で囲った庭と牛舎があり、冬の間家畜を入れておくことができる。人間はといえば冬の間牛舎の真上に位置する大きな部屋で、燃えの遅い泥炭を積み重ねた上に木の板を乗せたものの上で生活する。夏になると他の部屋も開けられるようになるため私は自分ひとりのための小屋を与えられ、そこには書き物のための低い机と藁でできた清潔な寝床がある。

ここでの私の生活は最低限のところまで削ぎ落とされている。私はこの集落の族長と共に生活しており、彼が私の世話をしてくれているが、おそらくは時が来れば私を始末するのも彼なのだろう。この家庭には族長とその母(八十歳近い老婆)の他に、義理の娘とその息子がいる。彼らは粗野だが情け深い民で、私の世話役である老人は未開人にも関わらず、以前の私の地位に対する敬意を持って接してくれる。時には放っておかれることもあるが、そんな時は集落を散策したり、危険のない範囲で外の平原をふらついたりする。彼らが私の脱走を恐れる理由などどこにもない。文明のある地、皇帝の統治する地には私の居場所などないのだ。そしてこの辺境の地を越えればそこには未知の世界が広がっている。今のこの状況で私にそんな力が残っているとして、どこへ行くというのだ。

この泥だらけの小さな砦の周りを歩いてみたり低木の茂みへと分け入ってみたりはして

も、決して外壁が見えなくなるまで遠出はしない理由は、北方の草原に住み着いている野蛮人どもが群れを成して襲ってきて、声を上げながら家畜を奪ったり離れたところにある田畑に火を放ったりする危険が年中いつでも付きまとっているからだ。集落全体がある種の要塞になっている。そしてここで一番役立たずなのは私だ。気がふれた、滑稽な老人。奇怪で涙もろく、何も知らないうえに何も話せない。そして気難しい彼らには、私の生き方はばかばかしいほど日常生活からかけ離れているように見えるのだろう。彼らは私に食べ物を与えてくれる。眠る場所を与えてくれる。彼らは決して礼儀を知らないわけではない。だがトミスには私の母語を話す者はおらず、慣れ親しんだ言葉を聞かなくなってもう一年近い。私はここでは啞者なのだ。私は子どものように唸り声と身振りだけで意思を伝えようとして、指をさして眉を上げることで疑問を示し、相手が子どもであっても、誰かが私の意図を理解してくれようものなら喜びのあまり泣き出してしまふ。開けた平原に出てはただ叫び、独りごとを言うことで頭の中に言葉を保ち、絞り出そうとする。ここでの私の生活は、昼夜を問わず言葉では説明できないほどに恐ろしいものだ。まるで別の種に属しているともいうかのように人間の世界から隔離された私は、一日中夢うつつの状態でさまよい歩く。夜になると、日の光が覆い隠してしまっているものの正体を夢の中で悟る。全ての物体の影の部分が、いや夜が影を落とすあとの風景そのものが、私には理解できない膨大な内容が解読できない言語で記された一ページのように感じられるのだ。私は夜な夜な夢の中で、刈り入れが済んだ田畑を越え、何も無い平原を越え、私たちの世界の境界線の向こうにある草原まで旅に出る。風が巻き起こる。大地は海のようにうねりを上げ、鋭い音を立て、ため息をつき、空はヨトウ蛾で覆いつくされる。私は膝立ちになって、すっかり伸び切ったつめで地面を掘り始める。時おり狼がやってきて隣でかぎ爪を立てる。唸っている。一緒になって掘っているが、彼らにとっては私など幽霊よりも影が薄い。だがひとつわかっているのは、彼ら在必死で探しているものが何であれ、私は先に見つけなければならない。彼らが先に見つけなければ私の負けだ。月の光が舐めまわすように照らす中で、私はより懸命に、迅速に、汗をかきながら掘り進める。だが、自分でもわからないのは、これが夢だということだ。

本当は何を探しているのかわかっているのだ。詩人オウィディウスの墓だ。プブリウス・オウィディウス・ナーソー。騎士階級のローマ人であり、詩人である。この荒れ野では、彼が眠っている場所など誰にも見つけようがない。

^{ナーソス}
嗅覚ゆえにナーソーと呼ばれた者だ。

私はこれを読んでいるあなたに話しかけているのだ、別の時代を生きているあなたに。この手紙を誰かに送ることはしないのだから。この手紙の宛先はローマにいる妻でも弁護士でも、ましてや皇帝でもない。あなたに宛てているのだ、名もなき友よ。私がこれを書いている時代にはまだ存在せず、その顔どころかもしかするとかたちさえ想像もつかない誰かに。神の容姿など誰が想像できるだろうか。私たちの世界からこれだけ離れていることを考えれば、あなたは確実に神と呼べる存在だろう。神が我々の奥底で目覚め、我々の中からそ

の肉体を呼び集め、そしてこの世界を揺り動かした計り知れないほど長い周期が遂に終局を迎える時、ようやくひとつの存在へと進化するのだ。

この手紙は何世紀もあとの世界に宛てているが、どんな未知の物体にあふれた世界で発見され、どんな目つきであなたがこれを読むことになるのかは見当もつかない。ラテン語は用いられているのだろうか。ローマの人間が一度も訪れたことのないこの地で、決して解けることのない氷に覆われた塚の中にしまおう。千年もの時を経て、帝国が滅びて人々を黙らせることができなくなった時になってようやく、この手紙はあなたのもとへと届くだろう。私は詩人オウィディウスである。ちょうど十二宮の入れ替わりの時期に生まれた。互いに引っ張り合う魚座が地平線の下へ入り込み、雄羊座が昇り出す時だ。二つの領域の狭間で古き神々の支配する千年が終わりを告げ、私にはほとんど理解もできない遠い未来まで続く新たな時代が来た。そしてその新たな時代であなたは今これを自分の母語に訳しているのだろう。だが、あなたが座っている灯りのともった部屋の家具も、夕日に照らされる庭園の花々も私の知らぬものばかりだ。その作業がどんなに困難なことなのかもわからない。

私の名を聞いたことがあるだろうか。オウィディウスという名を。私の名はまだ世に知られているのか。私の作品は全ての図書館から排除されて焚書の対象となり、私はラテン語の世界から追放されてしまったが、私が残したいくつかの言葉はそれをすり抜けているだろうか。私の作品の隠れた愛好家が詩を保管してくれたか、記憶に留めてくれているだろうか。私の言葉は密かに口承されているだろうか。私の書いたいくつかの文章が他の誰かの詩に引用されて、帝国の目をすり抜けていないだろうか。手紙に残っているかもしれない。もしかするとことわざの一部としてあまりにも浸透したせいで、今や消し去るのが不可能になっているかもしれない。

私は、生き延びているのだろうか。

ろうそくの灯りを頼りにそんなことを書いている。窓のないこの部屋はいつでも夜のようだ。蜘蛛やら何やらが藁ぶきの屋根に住み着いては床を這いまわり、髪の毛やスープの中に入り込んで、衣類のしわの中に群がっている。しばらくするとそれも気にならなくなる。

生き物たちとここまで密に接したのは初めてだ。犬や猫ですらなかった。今となっては彼らが不思議とよい友人になりうるのがわかる。この私のように、彼らもまた言葉を話せない。彼らはひびの中を動きまわり、私たちの生活の隙間を生きている。いたって無害である。蜘蛛ですらそうだ。気の毒な生き物だ。彼らには彼らの言語があるのだろうか。もしそうであれば、ぜひ学んでみたいものだ。難しさでいえば、隣人たちが喉から出す卑俗な言語を習得するのときほど変わらないだろう。

このところ私は隣人たちが出す音を理解できるようになってきた。だが老人が庭から孫を大声で呼んだり、たそがれ時に嫁に囁きかけたりする声を聞いているだけで頭がおかしくなりそうだと思うことがある。まるで忘れてしまった何かを思い出そうとしているようで、頭のどこか片隅でぼんやりと光っているのにその姿が見えないのだ。蜘蛛たちの仲間に

なったかのように、世間から切り離された気分になる。それとも詩人が詩を読んでいるのが聞こえる中で、梁の上から落ちないようにしている鼠だろうか。まるで万物の規律における自分の地位が突然ひとつ下がったかのように、もしくは魔女の呪いで下等生物の一種に変えられてしまったかのように感じる。だがもちろんこれは魔女の仕業などではない。どんな魔術もかけられてはいない。行使されたのは法の力に他ならない。この世で最も高い権威によって、確かに私は別の規律から成る世界へと追放されたのだ。頭脳が発達することもなく完全に人間になり切れない者たち、社会と呼べるものを持たず、法の下に生きるローマ人へとなれない者たちの世界へと。

だが彼らゲタエ人もまた、我々と同じ人間なのだ。彼らの会話に耳をすます。その音は卑俗で、私は洗練されたラテン語に対する恋しさで胸が痛くなる。この世の全てを表現できる完全な言語。追放の宣告までをも。彼らの会話を聞いていて最も驚くべきことは、自分がその抑揚を理解できるということだ。愛情に後悔、そして怒り。私も知っている感情だ。転んでむせび泣き、痛い痛いといわめいてる子どもを連れ戻して、自分をつまづかせた石に悪態をつく子どもを慰める老人の声の抑揚。誰もが遠い昔の幼少期から同じような台詞を思い出すだろう。「石ころなんか嫌いだ。」

そして、蜘蛛も忘れてはいけない。彼らの話し声にも同調することができるだろうか。蜘蛛もまた彼らなりに言葉を交わしているはずなのだから。蜘蛛の言語でまた作品を書いてみてもいいかもしれない。追放された詩人オウィディウスによる『新・変身物語』は蜘蛛の言葉で書かれることになる。

あてもなくさまよい歩いている際に、建物と柵の間にある畑で作業している女たちを見かけ、足を止めることがある。穀物を仕分けては挽いている中、ひとりが顔を上げてしかめ面か微笑みを見せるが、その意味は彼女自身の中には確かにあるのだろうが、私にはわからない。たくさんの種がある。金色、緑がかった黄色や茶色、青色まで。いくつかはなんとなく思い出せるのだが、名前まではわからない。もちろん名前も知っているはずだ。その名前の美しさに惚れて自分の詩に書いたこともあるのだから。コリアンダー、カルダモン。だが、とても見覚えのあるものでさえその名前と見た目が結び付かないのだ。一度か二度、女たちが困惑している前で種をひと粒つまんで手のひらの上に乗せてみたことがある。すると一番若い女が笑って言った。コルシユカ。私とその種を見ると彼女はまるで子どもにやるようにうなずいて、大げさに口をすぼめて繰り返した。コ、ル、シユ、カ。そしてひと粒つまんで口に入れ、噛んでみせた。真似してみたが、味がわからない。この孤独の中で、そしてこの種と一緒に調理すればローマの料理に合うだろう何百ものハーブやスパイスがない中では、私の舌は味を認識しないし、頭は名前を認識しない。そのため今の私はこの種の名前も味も、色もかたちも知っているのに、それを翻訳して自分の経験と結びつけることはできないのだ。

今後はずっとこのままなのだろうか。子どものように全てを一から学び直さなくてはならないのか。幼い子どものように五感で世界を知覚しながらも、その世界の全てが持っている

た母語の名前の美しさは奪われたままで。

百かそこらのあばら屋があると言うだけで、この集落を説明するには事足りてしまう。それらの間を細い泥道が走る。豚やら薄汚れた鷺鳥^{がちょう}やらが泥の中を転げまわっていて、泥の成分のうち一割は土、残りの九割は踏みつけられた糞で、それらの生き物が何千世代もかけて残してきたに違いない。雨が降ったあとには丸裸の子どもたちが外へ出てきて鷺鳥と一緒に水たまりの中に座ったり、豚を追って家々の間を駆けまわったりするが、彼らの叫び声も子豚の鳴き声も私には同じに聞こえる。集落を囲む柵状の外壁の向こう側には穀物の畑が点在するが、それらを採取してすり潰すのは女たちの仕事だ。ところどころにハーブやその他の植物が生え、小麦やカラス麦、大麦からそれらの植物を全て手作業で選り分けて種を取る。それ以上の農耕は行われていない。

今は夏真っ盛りだ。湿った河岸平野は蚊の羽音に満たされる。だが数週間もしないうちに冬の足音が聞こえ始めるだろう。スキタイの大草原から北風が川を越えて吹いてきて、草原に生えるアシを蹴散らしては水面を激しく揺らす。男たちは泥炭を板状に切り取るために既に外へ出ている。積み上げて寒さをしのぐためだ。女たちは穀物庫をいっぱいにして、豚の燻製肉を梁にかけている。川が凍ってしまえば一時たりとも外壁の外へは出られず、男たちが昼夜見張りをしなければならなくなる。川は今私たちを守ってくれている。だが二ヵ月もすれば氷の橋となり、北からあふれんばかりの大群が押し寄せ、奪い、犯し、壊してゆく。私が生活を共にする彼らは、比較的野蛮なだけだ。本物の野蛮人どもと出くわすのはまだ先の話だ。私はまだ夢の中でしか会ったことがない。

つい最近一度だけこんな夢を見た。月明りの下、あばら屋の間の通りを歩いている。後ろをついてくる子豚の低い鳴き声を、痩せこけた骨の間から出る歌声を聞きながら歩いていると、怪しい光に照らされた沼地に辿り着く。月はアシの遥か上まで昇り、その表面はまるで眠たげな瞳のように雲に半分隠れている。半ば眠っている私自身の瞳もまた半分は鼻^{ふくろう}のように開き、半分は闇で閉ざされている。

私は川の上を歩いている。川は私の下で煙のように渦巻いている。今の私は月明りだ。向こう岸の土手まで来てみる。広大な平原がただどこまでも、平らに、なんの特徴もなく広がるが、そこら中がちりまみれで、私の下で渦巻いている。ちりの中からはなんの生き物も出てこない。蛇でさえも。これが原始の世界か。

突如、草原のちりの中ではなく、渦巻く空から、ありとあらゆるものが雷の如く降り注いできた。人間、馬、さらには私とその存在を信じず、物語の中にしか現れないものまでも。物語こそ私の落ち着ける場所ではあるが、彼らが存在しないことはわかる。ケンタウロスも。だが彼らは、私たちの知る牧歌的な神話に現れる柔和な生き物とは違った。彼らは巨大で、その力、鼻孔から出る息、ひづめの立てる音、全身を包む光。全てが恐ろしかった。私にはわかった。彼らは神だ。

神というものもまた、私は信じてなどいない。

言葉を失って草原の中心に立ち尽くす私の周りを取り囲み、彼らは巨大な円となって回る。叫び声を上げるが、悪意ではなく嘆きの声だろう。「お前たちの世界に住ませろ。」そう言っているように聞こえた。「川を渡って、お前たちの帝国へ。お前たちの人生へ招き入れろ。我々を崇めよ。信じるのだ。」

ゆっくりと、彼らは動きを止めた。

立ち尽くす。

息遣いが聞こえる。

この広大な草原ほど続くかと思われた沈黙があり、私は自分の鼓動を、彼らの足音のかすかな反響のような音を耳にした。ただ私の息遣いはより近くから聞こえ、自分の胸が張り裂けそうな気がした。そして私の視界を全て遮る得体のしれない力の中から、それらの創造物の一つがゆっくりと近付いてきて、そのひづめを優雅にちりの上に下ろしながら、目と鼻の先で立ち止まったために、あまりの距離の近さにその息遣いも、温もりも感じられ、息遣いに乗って届いた理解可能な音を聞いた気がしたが、この音の抑揚もまた聞き覚えがあった。もはや自分の言語を失ったために、異なる意味を求めて耳をすましているかのようだった。

手を伸ばし、ふれてみる。

そして私の眠りの奥深くから何かが、まるで鏡に写像が浮かび上がるように、私たちが向かい合っているこの場所まで浮かび上がってきた。そこにいた。私の外に。何者かが。そして私の中にあつたその写像が浮かび上がってきて、その二つは向かい合った。

目が覚め、声を上げた。だが私が発したその言葉は、私の母語ではなかった。

それ以来私はその言葉を思い出そうとしているが、その響きは眠りの中に沈んでしまった。その響きを思い出し、その言葉を発することができた時、私はその名前の正体を、自分が出会ったものを知ることができるのだろう。私を受け入れる瞬間をどこかで待ち続けている何かを。

^{ナーソス}
嗅覚ゆえにナーソーと呼ばれた者だ。

なんのために人間の祖先に鼻が備わっていたのかはわからない。私自身の鼻は、目新しいものを嗅ぎつけるためにあつた。何が流行していて、何が洒落ているのか。

私は元来社交的な生き物だ。ウェルギリウスらのように、完璧な耳を持った詩人もいる。私の場合は鼻だった。鼻というのは政治的な部位だ。たとえ個人的な事柄だけに鼻を突っ込んでいるつもりでも、そういった時こそが最も政治的な瞬間になりうる。鼻はひとを問題ごとに巻き込む。私は人々が求める言葉を嗅ぎ取ることに長けていて、彼らが今まで何を考えてきて、そしてその言葉を口にした瞬間から彼らが何を考えるかまで嗅ぎ取ってしまうのだ。

愛国心という名の下に全ての血族がお互いを滅ぼし合う戦争が百年続いたのち、私たちは今平和な時代を過ごしている。私はその時代へと足を踏み入れたのだ。柔らかく、ぬるま湯のような混沌とした時代、洗練された厚かましきの時代。自分たちがようやく限界を超え

て、もはや信仰など必要のないほど聡明になったように思われた時代へ。

「神は死んでなどいない」というのが私がこの世界から嗅ぎ取った新たな報せだ。「彼らの名は未だに私たちの頭に残っているのだから。人徳のある統治者たちによって毎日のように神々に捧げられている石碑のことなど言わずもがなだ。だが神々自身が真剣ではなくなってしまった。彼らは享樂の時代を始めてしまったのだ。彼らは聖地を捨て、信仰とは程遠いおふざけでしかない作り話に住み着いてしまった。私たちの祖父らが抱いていた敬虔さといった陰鬱で面白みのないものは、彼らにとって居心地の悪いものでしかない。私たちは遂に自分たちを信仰することができるようになったのだ。規則がないのだから、自分たちでつくればよい。馬鹿げたものにしようではないか。制約がないのだから、自分たちで生み出せばよい。何かひねくれたものにしようではないか。」そんな調子で延々と続く。

この時代の人々のために、私は新たな国のあり方を模索していた。ローマ市民としての美德などもう必要ない。それが何をもちたらずかなど誰もが知っているのだから。愛国心もいらぬ。戦士たちへの称賛も。養蜂や、羊に使う薬、羊飼いの少年たちのギリシャ的な同性愛を歌った詩も必要ない。私の生み出す世界はどこまでも個人的なもので、簡単に言えば二メートル四方のベッドから出ずに世間を旅するための手引きなのだ。

皇帝はひとつの時代を築き上げた。彼の名前を冠してアウグストゥス帝時代と呼ぶと、現代の歴史家たちが現在をしかと見据えて既にそう宣言した。それは厳肅で、理路整然として、壮大で、何よりも退屈な時代だ。それは彼に捧げられた（そして私が拒否した）賛辞として、大理石でできた彼の石像として生き続ける。

私もまた時代を築いた。彼の時代と重なっているが、私のものは彼が従える国民の生活や愛の中に存在する。陽気で、権力に屈しない、儂くも愉快的な時代だ。彼はそれが気に食わなかったのだ。

もちろん短い目で見ればアウグストゥス帝に軍配が上がるだろう。そして短い目とは今のことだ。私はこの世界の最果てへの一般的追放¹を言い渡され、ラテン語の世界から追い出された。「一般的追放」、それが今の状況を指す素晴らしいラテン語だ。

しかしアウグストゥスの姉が誠実な夫へと捧げた豪華な屋敷の片隅で、今夜誰かが犯されている。なぜならその特定の場所で行われるその特定の行為を、あからさまな反抗の表現として私が詩の中で描いたからだ。アウグストゥス帝は夜ごとにつめを噛みながらそのことで思い詰めていることだろう。黒海よりこちら側にも、皇帝の力が及ばない場所があるのだ。マルケッルス²の豪邸はその一つだ。

だが私は全てを、本当に全てを失ってこの地へと追いやられてしまった。私の当てこすりも下らない反抗も、底の見えない裂け目に張った綱の上で踊るような危険な真似も、今とな

[訳注]

1 一般的追放 (relegation) : ローマ法において、市民の権利を剥奪されない一時的な追放のこと。

2 マルケッルス (Marcellus) : ガイウス・クラウディウス・マルケッルス・ミノルのこと。アウグストゥスの姉オクタウィア (Octavia) の夫。

っては全てが愚かしく思える。私がお得意の嗅覚で自ら招いたこの最果ての地には、無が広がっている。鼻がもたらすのはそういったものだ。新しいものを求めて嗅ぎまわった結果、もう故郷からの便りは何もない。それどころかこの地にも何もない。私は死んだも同然だ。私が追放されたのは静寂の地なのだ。私にできるのは叫ぶことだけだ。

そしてそれこそ今まさに私がしていることだ。

崖のふもとの海岸線を行き来していると、崖から下りる影が海岸を光と陰にはっきり二分していることに気付く。何やら叫び声を上げている漁師たちの間を歩く。そして彼らが光る謎の獲物を引き上げる様子を眺めながら。時には寒さに腕を震わせながら崖の上の茂みを散策し、どこからともなく吹き荒れては辺り一面を暗闇へと変える嵐や、真っ白なアザミの綿毛や羊毛が一筋の流れとなって風に運ばれる様子を見つめながら声を上げる。

ローマは遙か彼方だ。声を張り上げ、平原を越えて西へと吹く黒い風の流れに乗せなければ、私の声は彼らには決して届かないだろう。私は声を奪われたのだ。だが、私を黙らせることはできない。

どうすればあなたに伝わるだろう。本来あるべき姿を無視した理想の景色を求め、何世紀もかけて造り上げられた風景しか知らないあなたに。我々が労働を、街を、田畑や果樹園を、牧草地を生み出して自分たちの心に持ったイメージだけを頼りにこの世界という楽園を開墾するまで、この大地は元来どれだけわびしい地であっただろうか。

あなたはイタリアを、いやどこであれあなたが住んでいる土地を、神々によって与えられた穏やかで美しい純粋な地だと思っているだろうか。そうではない。そこは造られた地なのだ。もし神々があなたの世界にいるならば、彼らはどこかの牧草地に生える木々の中で光を宿しているか、日光に照らされた小川や井戸水、泉の中の小石の上に、もしくは法的に認められたあなたの土地を示す石垣の上に宿っているだろう。もし神々が存在することでその地が輝いているならば、それはあなた自身が望み、引き出し、彼らを夢見て風景の中に見出したからなのだ。彼らはあなたと共にいるだろう。それは間違いない。大木に抱きついて自分の中に漂ってくる息吹を感じるとよい。石にふれてその温もりが体内に流れ込んでくるのを感じるとよい。泉に身体を預けて、眠っていたあなたの内なる世界に浸ってみるとよい。だが神々の息吹は認識しなければ存在しえない。彼らは外の世界に存在するのでもなければ、完全に私たち自身の内側に存在するのでもなく、私たちと造られた物体、つまり自分たちで造り上げて住み着いた風景の間を流れるように往復するのだ。私たちはこれら全てを生命の根源とでもいうべき部分で夢見ており、彼らは紛れもなく私たちそのものなのだ。私たちが見出しているのは自分たちの内面であり、一度風景が造られれば我々はそれを満たす神々へと変化するのだ。

まるで全ての生き物が夢見ることによって自分の殻を抜け出して新たな存在へと、より高次の存在へと変化する力を持ち合わせているようだ。夢の中で新たな存在の概念に辿り着いた時、私たちの肉体は痛みを伴った緩やかな変化を経験して、自らの限界を飛び越えてその存在へと生まれ変わる。かつての溶岩はその液体の身体が「私は固体だ。私は石だ。」と言う

ことができた時、日光に照らされて眠る鉱石となり、今度は鉱脈の中で再び性質を変え液体となって流れることを望むが、今や石というかたちとなったために変化はさらに緩やかで、新たなかたち、柔軟さや流動性を求めながら何世紀も経った時、ようやく変化が起こり始めたことに気付くのだ。鉱脈は緩やかに流れ出し、土はかたちを失い始め、その石は新たな命への変化を何世紀もの間待ち望んだ末に自分に目があることに気付き、口が生じて、跳ねるための脚が生じて、やがて蛙となる。そして今や地上を動きまわれるようになった蛙は空を飛ぶことを思い付き、決して蛙という自我を失うことなく、再びゆっくりと翼を得て風に乗ることを夢見るようになる。我々の肉体は絶対的ではないのだ。私たち人類という普遍的な存在もみな、お互いの中にある様々なかたちを深く愛しながら進んでいる。愛を交わす際にふれたことのある何か、お互いの奥深くに隠れている何かに向かって進んでいるのだ。緩やかに、痛みを伴いながら、何世紀もの時間を経て、私たちはそれぞれがその何かに向かってごくわずかながら進み続けている。私たちは究極の人類というものの輪郭を創り続け、神と呼ばれる存在となる人類のために風景を構築しているのだ。

私はその物語の終末をこの目ではっきりと見た。想像の中で。地球はかたちを変え、光に包まれた神々がその上を歩く。そしてあなたがそうであるように、私もまた整えられた地球をこの目で見たのだ。自分たちがまだ住むことのできない世界を、私たちは心で想像して手で創造することができるのだから。背丈ほどもあるトウモロコシ畑が日光の下で刈り取られ、月光の下では風に揺れている。緑色のオリーブの木々が風に揺られ銀色に輝く様子はまるで神が「銀」という言葉を発したかのようで、その吐息が大地を横切るにつれてオリーブの葉を色付かせているようだ。あなたもわかっているはずだ。この地球は私たちが造り上げたものなのだ。切り開き、掘り起こし、植え替え、種を持ち込んで、自分の理解を超えた計画に従って身体が動くに任せ、生み出した風景が自分たちを理想の生き物に変えてくれるまで心の飢えに駆られ続ける。

原初の状態まで追いやられた私には、自分たちがどれほど遠くまでやってきていたのかわかる。あるがままの姿の地球を見たのだ。平坦で特徴もなく、夏には泥沼が現れ、冬には荒地が凍り付き、木も花も耕された田畑もなく、野生の植物が生えていてもろくに成長もせず無造作に風に吹かれている。これ以上ないほど荒涼とした土地、原初の地だ。まるで私の頭の中ではないか。どれほど遠くまでやってきたのか、その全てを悟るのに私がどれだけさかのぼったのか、あなたには想像もできないだろう。本質的な生活がこれほどまでに質素であることを。

しかしここでさえも芽生ようとする命がある。ひとつめの種は旅立ってゆき、育まれ、完全なる姿へ続く長い旅を歩み始める。

使い古した履物と外套、それに日差しを避けるために麦わら帽子を身に着けて泥まみれの荒地をつまづきつつ、独り言を呟きながら川へと向かっていると、群生する野生のトウモロコシの中にあつた一点の緋色が目に付いて急に動けなくなった。

緋色だ！

この数ヶ月で初めて色というものに出会った。もしくはそう思った。緋色。小さな野生のケシの花。その赤い色があまりにも突然だったので、私の心臓は止まってしまった。私はその言葉を何度も繰り返し呟いた。緋色。まるで色同様に今まで私の中から抜け落ちていたその言葉を口にすることで、目の前の小さな花が風にさらわれるのを防げるかのように。ケシの花。言葉の持つ魔力に私の肌はうずき、言葉を口にすることはそのものを見るよりも素晴らしい奇跡に思えた。私は喜びに酔いしれた。踊り、叫んだ。ローマにいる友人たちが都会育ちの皮肉屋の詩人がこんな姿をしているのを見たら驚くに違いない。ところどころ固くひび割れているかと思えばあちこちに不快な臭いのぬかるんだ水たまりがある大地で、植物のことなどほとんど知らない男がみすぼらしい履物姿でこの花を称えて歌いながら踊っているのだから。ケシよ、深紅のケシの花よ。遙か昔の幼少期に、生まれ故郷スルモの農園を囲むトウモロコシ畑で見た花よ。私はお前を再びこの世に呼び戻したのだ。幼い頃の記憶から、私の全身を流れる血の中からお前を掘り起こし、風の吹くこの地に生み出したのだ。緋色。視界に輝きを取り戻す、口から出た魔法の言葉。緋色。そしてその一言で他の色全てが魔法となってあふれるように戻ってきて、一気に色付いた大地が私の周りで輝き出した。私は春を呼び出している。雑草だらけのオリーブの茂みに混ざったフランスギクの黄色、ヤグルマギクの青色、キンセンカの橙色、ジギタリスの紫色、それに何十年も忘れていた、母が庭に植えていたナデシコやシクラメンまで。全てが戻ってきた。とはいえ実際にそこにあるのは一輪のケシの花だけだ。種を抱えた中心部の周りを彩る、薄く繊細で明るい花びらが風に吹かれている。

この花はどこからやってきたのだろう。どこを探してもこの一輪しか見当たらなかった。風で種が運ばれてきて、この地に根付いたに違いない。だが一体どこから来たというのだ。輝くちりと共に高く舞い上がり、海を越えてやってきてこの地に舞い降りたのだろうか。それとも、北へと向かう鳥の胃袋に運ばれて、気まぐれに落とされた糞の中から芽生えたのだろうか。

私は地面に座り込んで観察した。このケシの花が気に入った。世話をしてやるべきだ。

突如私の脳内がありとあらゆる花々でいっぱいになった。地中深くから突き出して私の頭蓋の中を駆け巡る。色、かたち、花びらの数などの見たくを知らなくとも、ただ名前を口にすることでそれらはつぼみを開き、頭の中で香りを漂わせ、以前見知らぬ種をそうしたように舌の上に乗せて息を吹きかけると魔法となって現れる。こうやって庭園を創り上げよう。私はフローラ³だ。私はプロセルピナ⁴だ。どうすればよいのかはもうわかった。必要なのは信仰心だけだ。

ずっとわかっていたはずのことだが、これこそがその方法なのだ。名前を与えることで神々は我々の中で急速にかたちを成し、我々が心の内に持っていた彼らの栄光と力と威厳

³ フローラ (Flora) : ローマ神話に登場する女神。花と春と豊穡を司る。

⁴ プロセルピナ (Persephone) : ローマ神話に登場する女神。春をもたらす農耕の女神とされる。

をもって姿を現し、世界と我々自身を変化させながら、その先の世界へと進んでゆく。つまりは、私たちが目指している存在は私たち自身から引き出されるのだ。私たちがすべきことは名前を知って啓示を待つだけだ。いつの世も始まりは単純なものだ。

ケシよ、お前が私を救ってくれた。私の目の前で、お前がこの地を甦らせてくれた。命の泉を生み出す方法に、私はもう気付いている。

それは既に始まろうとしている。私の人生は今までずっと浪費されてしまっていたのだ。かつての自身の生活から解放されるには、静寂の世界を経験して合言葉を見つける必要があったのだ。

そして実はその言葉も既に表現されていた。何年も前に自分で記していたにも関わらず、今になってようやくその意味を理解し、意義を見出すことができた。「お前は自らを抜け出てもなお生き続ける。」

今こそ私が変化を経験しなければならない。

II

もう夕暮れも近い。私たちは木製の柵に囲まれた庭で、太陽が与えるその日最後の暖かさを感じながらたたずんでいた。老人と子ども、彼の母親と私の四人だ。

この庭は飾りがなく、ベンチがいくつかある他には、紐でくくられたヘチマが日干しにするために柵から吊り下げられ、女たちが穀物を挽くのに使う石が円状に並べられているだけだ。老婆、つまり族長の母親が私たちに混じることはない。彼女は部屋の中で何やら呟いていて、時おり窓から顔を突き出してはすっかり歯の抜け落ちた口で若い方に警告の言葉を発するだけだ。私の聞き取れる単語を寄せ集めたところ、寒いから坊やを何かでくるんでやるか寝床に連れていけと言っているようだ。そうかと思えば、彼女は骨張った肘で頬杖をついてこちらの話に耳を傾け、突然笑い出して私たちを驚かせる。

骨の折れる仕事が終わりに、眠りにつくまでの静かな時間だ。頭上では大きな雲がいくつも流れていて、大草原からは北風が吹き込み、その風に乗って川から寒さの足音が聞こえてくる。柵の上を葉が螺旋を描いて舞い上がる。だが風の届かぬこの庭で暮れゆく太陽の光を浴びていると、暖かく心地よい。

私たちはここで夕食を済ませた。イラクサでできたスープと山羊の乳からつくったチーズをハーブで香り付けしたものだ。器は自分たちの横、地面の上に置いてある。嫁はまた作業に取りかかっている。なめしていない毛皮の切れ端を縫い合わせて外套をつくっているのだ。彼女は剥き出しの足を伸ばしてその上に毛皮を広げ、喉や鼻の下に少し汗をかいている。時おり作業を中断し、濡れた髪が目にかかるのを手の甲で払っている。彼女は私が見ていることに気付いて視線を合わせてくる。彼女は私に対する恐れも、困惑も、そして好奇心さえも抱かなくなってしまった。彼女にとって私は既に義理の父を家長とする家族の一員であり、その中では夫を亡くした彼女もまた私同様によそ者なのだ。彼女は、老人が網をこしらえながら少年に聞かせてやっている話に耳を傾けている。私も同じように聞いている。私だけはやるべき仕事もないので、何もわからないながらも耳慣れない言葉の数々を吸収し、老人が自分のものよりも低く荒い声を真似すると子どもの目が驚きで丸くなる様子や、女のような甲高い声で子どもをくすくすと笑わせ、それに対して後ろにいる老婆が鳥のような声を出す様子に魅了されている。

老人の物語は驚きに満ちている。狼にまつわる話だろうか。私はそう自問する。それとも熊か。悪霊についてかもしれない。嫁は以前にもこの話を聞いたことがあるのか子どもの反応を見越して、彼が笑うと一緒に笑って私の方を見るので、私もつられて笑ってしまう。だが老人が何かの声（魔術師か、神だろうか）を真似すると、彼女の手が止まって瞳が翳る。

私もこの物語を知っている、そんな気がする。どこかで聞いたことがある。幼い頃に。異なる言語ではあったが、奴隷たちの一人から聞いたように思う。抑揚でわかるのだ。

老人の声は、私たちを取り囲み始めた暗闇を縫って伝わる。冬が近付いているのだ。夜の世界が。網をこしらえる角張った手はぶれることがない。彼は何らかの職人なのだ。それは

わかる。彼の手元がいかに安定しているかは、誰にでもすぐにわかる。彼自身が自分の話と網づくりにあまりにも集中しているため、少年が笑ったり怖くなって膝にふれてきたりした時を除けば、周りの人間のことなど忘れてしまっている。

老人などと呼んではいるが実際には私と大して変わらぬ年齢だろうし、私自身はまだ五十にも満たない。この過酷な土地での厳しい暮らしが彼を干上がらせ、しみやしわを与えたせいで、ローマ人の目には彼が七十歳にしか見えないのだ。しかしながら刈り上げた頭部と頬ひげや寸胴な身体には、私にはない厳格な高貴さが漂っている。

彼の人生に想いを巡らせてみる。私自身の人生と並行して流れてきたに違いないのに、全く想像がつかない。彼の幼少期も、思春期も、亡き妻の顔すら思い浮かばない。彼が海岸から戻ってくる際に、集落の外にある彼女の墓を訪ねているのを一度か二度見たことがある。彼の人生は毎年毎年、今私が見ているのと同じものの繰り返しだったのだろう。働いて、眠って、働いて。しかしそれでいて彼の人生が私には謎めいて映るのは、自分を軽薄な愚か者に感じさせる彼の高貴さが、それだけでは説明がつかないからだ。私の人生はこうも取るに足りないものだったのか。自分の感覚を、慌ただしさを、多様性や変化を重んじるように育てられ、書物からのみ学び、生ぬるい安全の中で過ごし、自らを甘やかして愛情に浸り、自身の知性や社交性、親切心や生まれのよさにかまけてきた。名状できないものには心動かされず、目に見えないものは信用しない。請け売りの方法で見事に問題を解決する能力を（おそらくはあまりにも早く）身に付けた頭の切れる少年は、自分の力量を越えたものに出会って悩んだこともない。そんな私に、馬の持つ動物的な部分を自分の中に取り込んで手なずけることのできる達人をつくり上げたものの正体など知りえるはずがない。彼の瞳の奥に、口調に、緩慢ながら力強いその所作に、あの広大な大草原を思わせる何かを見ることがある。その大草原から駆けてくる馬乗りたちは、他の者とは違い死んでも埋葬されることなくそのまま放置されて、魂は馬と共に風に乗って空を駆け抜けるのだ。

明日は老人の率いる狩猟団に加わって、鹿の住むカバの森へ入るつもりだ。

私たちが小さな庭に集まると霜が降りていて、どぎつく光る星が頭上すぐ近くを覆っている。

私たちはベンチに座り、一緒になって食事をとる。固めた乳を水に溶かし、ほんのりと甘い蜂蜜を加えて鍋で温めたものだ。茂みの奥深くに生えるハーブの蜜を吸う野生の蜂から取れる蜂蜜は、そういった得体の知れない植物の苦みを帯びているので、この料理の甘い後味が舌に届く前に独特の香りが鼻孔を満たす。慣れるまではあまりよいものではない。腹を空かせた私はそれでも他の者同様に二杯目を受け取った。

別の一団が着いた時、私たちはまだ食事の途中だった。ゲートルを紐で留め、飾りの付いたシャツは胸元が開いていて、弓矢を携えている。比較的若く見える男が三人、長髪と黒い頬ひげの生えた険しい見目をしている。それに小柄で白髪交じりの老いた男が一人、集落のシャーマンだ。彼らの後ろには裸足の子どもたちが六人ほど野次馬感覚で集まって騒い

でいる。

老人は彼らひとりひとりの手を固く握って挨拶し、祈りの言葉を呟いているシャーマンを抱きしめたが、彼の方は老人だけでなく女たちにも、少年にも、ベンチにも、門扉にも、そして私にさえも祈りの言葉をかけている。

私たちは環状に集まって黙り込んだ。少年は庭で温められている鍋のところまで行き、母親に例の乳を固めたものをひとすくい手の中に注いでもらった。彼はそのまま円陣の中に戻ってきたが、燃え尽きそうな炎の底から、ベンチの上に置いた空の器の中から、そして壁のひびや隅から出てきた悪霊たちが集まってくるまで静寂が辺りを支配した。中心に立つ少年は怯えている。彼の視線はたき火からベンチへと庭中を落ち着きなく駆け巡り、彼自身やその手の中にある穀物と雑草を混ぜ合わせたものを狙う魑魅魍魎の姿を探している。この瞬間、この一時の儀式の間はもはや自分が家庭の最も若い存在、ずんぐりした七歳の、過度に甘やかされて多少悪ふざけの過ぎる少年ではなく、闇の力を引き出す器、家屋そのものの化身であることに気付いていて、静けさの中で荒々しく息をして震えながら手を差し出し、この痩せこけた地の収穫が目には見えない何かによって食されるのを待っている。

シャーマンが歌を唱え始め、他の者もそれに加わった。少年の身体が強張って震え出す。かゆ状の乳が手からこぼれ落ちると、一瞬ためらってから彼が顔を低くしてそれをなめ始めたので、老人は詠唱をやめることなく軽く耳をつかんで少年を止めた。乳がこぼれ、若い男のひとりが手振りでも少年をなぐさめながら土を蹴ってその上にかぶせた。詠唱がやんだ。私たちは黙ったまま立ち尽くす。動揺した少年の目はせわしなく動き、彼と目が合うと母は頷き、祖父は頭を軽くなでた。私たちが注意深く見つめる中、彼はぎこちなく向きを変え、丸めた両手を伸ばしたまま鍋の方へゆっくりと戻り、中身をたき火の上にかけた。炎が音を立てる。それを合図に円陣は解かれた。全員が急に談笑を始め、庭は活気づいた。男たちは自由に挨拶を再開し、女は布で子どもの手を拭いてやり、二人の老人は肩を叩き合って冗談を交わす。全てが幸運を示している。出発の時だ。

布で覆われた木製の鞍をつけた寸胴な馬たちが集落の出入り口に連れてこられ、私たちは飛び乗った。何も知らない私のせいでみなの前で恥をかかされた老人は、足首で馬の胴体を固定すればあぶみなしで乗れることを教えてくれ、若い男たちは彼に気を使ってこちらに気付かずに鞍をいじっているふりをした。一人が口笛を吹いて見つめた河岸平野の先では、まだ東の地平線を縁取る薄明りでしかない太陽が霧を輝かせている。馬を駆って集落を出る。沼地へ続く道は霜で白くなっており、私たちが通り過ぎる際にできる大きなひづめの跡はすぐさま崩れて溶けてゆく。まるで私の夢に出てくる、馬の身体をした巨大な者たちが姿を消して後ろからつけてきて、私たちが残した跡を慎重になぞっているかのようだ。平原へ出ると霧が私たちを取り囲み、馬の胴体や私たちの足首を包んだ。雲の中をかき分けているような錯覚に陥る。だが頭上高くでは割れた雲の隙間から黄色い光がもれ、鳥たちが歌っている。

三十分後、太陽が木々の上に真っ赤な球体となって現れても、辺りは依然として雲に覆わ

れたようで、高台では薄い霧も窪地へ下りると波のように押し寄せる。

ゆっくりと進む。馬たちは泥まみれの草むらを押し進み、高台へ駆け上がると息を荒げる。河岸平野より高い位置はどこも起伏が激しいが、夏の雨季のせいで沼地が未だに洪水状態である以上高台を外れるわけにはいかない。

霧がようやく消え始めた。辿り着いた地には樹木が点在していて、どれも幹は白みを帯びて葉は槍のように尖り、朝焼けの中で茶色がかった金色に光っている。兎が茂みの中で逃げ回り、男たちは白い尾が跳ねてゆくのに向かってからかうような声をかける。かつての要塞の名残りにも見える砕けた岩々が突き出る斜面を登って、私たちは樹木の生い茂る高原へと向かう。花崗岩の壁が立ちはだかる間を駆け上がり、先頭の一団が開けた場所へ飛び出す音を聞いた。続いて私も草の生えた斜面を登り切ったが、私の馬が足を滑らせて危うく転落するところだったのが視界の隅に見えた。

広大な自然が広がっていた。先頭の馬が三十メートルほど先で止まり、それに続いて他の馬も横に並んだ。そして風に吹かれて揺れるマツの木が一面に広がる林へ、一列になって進んでゆく。ここまでやってくる途中で自分たちが遠回りをしていたことに気付いた私は、少し距離を取ったままついてゆくしかなかった。何らかの儀式が執り行われている今、私はよそ者でしかないのだ。柔らかな針状の葉でできた絨毯を踏みつけながら一面のマツ林に入り込むと、馬のひづめの下からその匂いが舞い上がってきた。

マツの木がまばらになり始め、その向こうにあるものが見えてくる。それがなんなのか初めは見当もつかない。だがこれが物語で聞いていた膨大な数の塚、墓石群なのだと気付く。おそらく百近くあるだろうそれらは、全て砕けた石でできていて、突き刺さった木の棒の上に未だに馬と馬乗りの遺骨が残っているものも多く、これがこの地に伝わる馬乗りの埋葬方法なのだとわかる。私は馬乗りたちに続いて巨大な墓石群の周りを進む。大きな鳥が羽ばたいて上方にある別の塚の塊まで上ってゆく。棒が風に揺れて音を立て、私はこの死者の軍隊を前に自分の夢を思い出している。塚が並ぶ周りを一度、二度、三度回ったところで立ち止まる。族長が肩にかけていた穀物でいっぱいずだぶくろの頭陀袋を手に取り、突然一団の全員を率いて死者と共に駆けまわり始め、音を立てて揺れる棒や遺骨の間を行き来しながら、穀物を取り出して死者の口に向かって投げつけては悪霊や鳥たちを追い払うために叫び声を上げる。今になって初めて、私は育ち切っていない大麦やカラス麦、そして小麦までもが自分の周りで日光に照らされていることに気付いた。私たちは広大な野原の中にいるのだ。

男たちの叫び声がやむと、老人が私の横に並んできて微笑みかけ、ひと握りの種を差し出した。私は怯えながらもそれを受け取ったが、彼の意図がわからなかった。腐った歯が全て剥き出しになるほどの笑いを見せたあとで、彼は顔をのけぞらせて血も凍るような叫び声を放った。そして頷いて何かを期待するような目で私を見る。

老人の目を気にしながらも、私はその音を真似した。彼はまた微笑んで、その顔を崩さずに私の肩を叩いた。私は輝きを放つ墓石群に向かって馬を進め、馬乗りが上げる死の叫びの下手な真似事をしながら手に持った穀物をまき散らした。

おかしいことに、そびえ立つ塚の間を行き来している間、私は束の間の高揚感を覚え、何かを思い出した。その何かは私の頭が理解できる前に消えてしまったが、まるでこれらの全てを以前にも経験したかのような気分だった。私は再び叫び声を、今回はさらに大きな声を放ちながら、狭い道を駆けまわった。他の者たちがそうしているのを見て、肺を冷たい空気で満たし、長い叫び声として吐き出し、何かから解放されたような感覚を味わった。まるで吐く息に乗って恐怖心が流れ出て、自分の魂が浄化されてゆくようだ。私はローマ人だ。男たちが座り込み、歯を見せて笑い合っているところへ戻りながら、そう呟く。私はローマ人で、詩人だ。その息や音もまた私の中からこの世界へと流れ出て、一層の解放感を味わう。老人が私に握手を求める。彼が私にかけた言葉は理解できないが、再び隊列を組んで出発した際、若者の一人が道を譲って私が老人のすぐ後ろをついてゆけるようにしてくれ、私は残りの全員を従えて狭い急な道を進んだ。

日光に照らされる道へと進んでゆく中で、私はおそらくこの三十年で初めて兄のことを思い出している自分に気付いた。私がまだ若かった頃に死んだ兄。本来ならば私の代わりに父の跡取りとなるはずだった兄。

三十年前のことだ。兄の葬儀のあと、私と父は隣り合っただろうと今と同じように馬に乗っていた。私は突然馬を駆って一頭分の距離を空けた。父は腹を立てていて、私は軽んじられた気がして傷付いている。彼が何を考えているのかわかっているからだ。二人のうちで生き残るべきは兄だった。私は取るに足らない方で、この世界に何も残すことはない。我々の土地を救って、重要な地位の公職に就いて、一族が信仰する神々を敬虔に信じて、よくできた息子が成しうることを達成するのは兄の方だったのだ。それが事実であることを知っている私は、自分の人生を、鞍の上に乗る自分の全体重を重荷に感じた。私が墓石の下に眠って彼を日光の下で父と並んで走らせることができるなら、何だってする。だが、私にも意地があった。そして罪悪感が。父と並んで進みながら、私はここを出て二度と戻らないと父に告げた。既に別の道を進み始めていた。木立から続く狭い道で父から離れ、馬一頭分の距離を保ち続けた。私は既にローマへ向けて進み始めている。この時はまだ知る由もないが、既に追放へ、三十年後のこの日に向けて進み始めている。私は老人となり、父が頑なに信じ続けたローマ法の届かぬ場所で、彼が家族の人生を捧げたローマ帝国の外で、この世界の辺境で未開人たちと馬に乗っており、九日間も共に馬に乗っている彼らの誰ひとりとしてローマ帝国の言語を知らない。あの朝は共にいた私たちがこんなにも遠く離れてしまうことなど、誰が予想しただろう。言葉にするどころか本人の意識にも上ってこなかった父の呪いが私をこんなにも遠くまで連れ去り、あの日以来太陽の下でさえ冷たい風のように私の背中に吹きつけるだろうことなど。

だが突然、私の背中に当たる日光が温かく感じられた。どうやら高原で発した野蛮人のような叫び声が、三十年前に死んだ兄と、私が面目を失うたった一年前に埋葬された父を連れ戻したようだ。私の叫び声は彼らに向けられていた。ローマ人の息子が、ローマ人の父のために生け贄を捧げて水を数滴ふりかける。父の葬儀ではそんな風にただ手順に従っていた

だけの行為が、あの叫び声のおかげで急に意味を持ったのだ。そして私にとって死者たちは過去のものとなった。ようやく、自分自身の死を迎える準備ができたのだ。

昼が近付く中で、私たちは狩猟場所であるカバの森へ入ってゆく。

木は既にほとんど枯れてしまっていて、銀白の幹にはところどころに黒い線が走り、箒の柄のような小枝にはちらほらと金色の葉が残っている。木々の間から落ちた葉が大地に広がり、まるでため息をついているかのような音がひづめの下から聞こえる。太陽は潤み、空は青白い、風のない一日。不自然すぎるほどの静けさだ。

若者の一人が地面に下りて馬を引きながら、ところどころに見える地面を観察しては足跡を探している。私たちも一緒になって馬から下りて彼のあとを追うと、辿り着いたのは狼のねぐらだった。母親が入り口のところで牙を剥き出しにしており、開けたところにいた子どもたちは地面を駆けまわって互いに噛みつき合うのをやめた。毛だらけで、小さくて柔らかい。私たちが近付いてゆくと子どもたちは母親の後ろまで下がってゆき、こちらをにらみつけながら四つ足で立ち上がった。私たちは彼らの目の前を通り過ぎて、次に熊の足跡を、そしてようやく鹿の足跡を見つけた。なんとそれらの中に人間の足跡が、小さな裸足の、おそらくは子どもの足跡があったのだが、男たちが驚いている様子はなかった。老人は恭しくうなずいて手振りで説明した。それは確かに子どもの足跡だと。十歳かそこらの野生の少年が、鹿と共に暮らしていると。去年狩人の一人がその少年を発見したが、近付く間もなく逃げられてしまったらしい。

私の頭は混乱した。彼らに聞きたいことが山ほどあったが、それを伝える言葉は持ち合わせていなかった。その少年はどこからやってきたのか。誰の子どもなのか。なぜここに住み着いたのか。年中丸裸で、食事を与えて世話してくれる者もないのに、どうやって彼は生き延びられたのか。もちろんそういった話を聞いたことはある。野生児の話は世界中どこにもあるが、突き詰めてゆけば、誰ひとり実際に見たことのある者はいない。そしてローマの双子、我らがローマ帝国の父である狼少年の兄弟の話⁵がある。だが彼らの伝説を真に受けるような人間がいるだろうか。つまり、愚昧な農民を除いてだが。しかし子どもの足跡は現実存在している。周りにある鹿のものと同じように。

その一つに指先でそっとふれてみて、感触から足跡の主である生き物を認識しようとしてみる。その温もりを感じられるような気がして、そこから彼を私の心の中へと呼び出してゆく。馬鹿げている。足が地面にふれていたのはたった一秒程度だ。その子はそこら中に散らばる葉の上を駆けまわっていたのだ。足跡の強さでわかる。ひとつひとつの間隔の広さを考慮しても、彼が鹿と一緒に走っていて、それも彼らについてゆけるほどの俊敏さを持って

⁵ 狼少年の兄弟 (the wolf brothers) : ロームルス (Romulus) とレムス (Remus)。ローマ帝国の建国神話の一つ。ラティウムの王であった祖父から王位を奪った大祖父によって川に捨てられるも、狼に育てられて生き延びる。後に故郷に戻った二人は祖父の復讐を果たし、ローマ帝国を建国したとされる。

いることがわかる。

もう一度ふれてみる。ただただ神秘的である。そして突然、まるで私の想像力が本当に彼を呼び起こしたかのように、私の目がその姿を捉えた。そしてさらに不思議なことに、私は彼を知っていた。私は誰よりも早く、四十メートルほど先のカバの木の間に差し込む青い光を背景にして彼の輪郭が浮かんだのを捉えた。獣のようにうずくまって私たちをにらみつける、小枝並みに細い少年。その日に焼けた上半身からはあばら骨が浮かび上がり、肘も膝も骨張っていて、黒い髪の毛が肩まで真っ直ぐ伸びている。彼は私の叫び声に飛び上がって森の中へ逃げてしまった。

私は本当に彼を見たのだろうか。それとも突然、何年も経った今になってスルモ時代の秘密の友人であったあの子を、その存在を忘れてしまっていたあの少年を見つけたのだろうか。突如、彼は私の前に姿を現したのだ。あれは幻覚だったのか。私は自分が見たものを信じるができなかった。だが男たちは違った。彼らがすぐさま馬に乗って私が腕を伸ばしている方向へ駆けてゆくと、土や葉が舞い上がった。その時、見えないところで草を食んでいた六匹ほどの鹿が私の方へ向かって広野を駆け抜けてきたが、私が悲鳴を上げて倒れると驚いて方向転換して去っていった。

戻ってきた男たちは口々にことの顛末を私に聞かせたが、私には全く理解できなかった。彼らは本当に少年を見たのだろうか。彼らから逃げ切るなど不可能だろう。となると彼は狼のねぐらか落ち葉の絨毯の下、もしくはどこかの木の根元に入り込んだに違いない。私たちは馬に乗って木々の間をゆっくりと進み、銀白の幹の間を縫うようにして進み、夢でも見ているかのような感覚でお互いに声をかけ合って場所を確認しながら、どんな痕跡も逃さぬように目を見開き耳をそばだてた。別の鹿の群れが驚いて飛び出したので、若者のひとりが今夜の夕食を仕留めて肩から下げている。私たちは午後の間中、たった数百メートルの範囲を夢の中にいるような心地で延々とうろついていたが、夕方になると霧が濃くなってきて辺りが暗くなり始めた。どうすればいいのか。もし少年を見つけたらどうすればいいのか。追いかけて捕まえるのか。そのあとはどうするのだ。そもそも彼は何者なのだ。空の色が深くなって私たちの周りに影ができ始めたので、老人はここで夜を明かすことを決めた。

馬をつなぐと、老人はそれぞれに仕事を割り振った。私の仕事はたき火のための枝を集めてくることだ。若者の一人が私と共に残って鹿の皮を剥いで肉を刻んでいたが、彼がとても素早くそして丁寧に仕事を済ませてしまうと、皮は一枚続きで枝にぶら下がり、肉は部位ごとにきれいに分けられてあぶる準備ができていた。内臓は脇に寄せられて、その横には鹿の血がいっぱいに入ったヘチマが置いてある。

私はというと独り言を呟きながら枝を集めてまわったあと、膝を抱き寄せて座り込んで彼のことを考えていた。あの子のことを。

一体どこにいるのだ。こちらからは見えないどこかで、今でも私たちを観察しているのか。はっきりと思い出せるのは彼の目、木々の間の開けたところから私を見据えるあの目だ。あの視線は今まで見てきたどんなものとも違った。あんなものを見たことは人生で一度もな

かったが、遠い昔に見た友人であるあの子の目は別だ。自分の詩の中で、人間より高次もしくは低次の存在へと強烈な変化を経験している途中の摩訶不思議な生き物を生み出してきたが、あれは全く未知の世界だ。私の想像力を遥かに超えている。真っ黒な瞳と鋭い顔つき。そして優雅な物語や説明可能な美しい奇跡で満たされた私の詩も、(もしも本当に存在するのなら) 誰かに認められるためではなく、どうにかして生き延びるためだけにこの世界に存在する偶然という名の彼の現実と比べると、どれだけつまらないものになってしまうだろうか。私は膝を一層抱き寄せて慣れ親しんだ言語で独り言を呟いた。するとその正直で無邪気な顔を血で汚した若い狩人は警戒心をあらわにして私と距離を置いた。他の者たちが戻ってくると、彼は老人に何やら話しかけ、老人が密かに肩越しに私を見たので、私は洪々共同体へ戻らなければならなかった。私と彼らの間には人間であること以外に共通点が存在せず、経験も慣習も言語も異なる状態でもそれを共同体と呼べるのならではあるが。

シャーマンが草を踏みつけた上に道具を広げている。尖らせた魚の骨、川辺の泥でできた雑な球体、そしてひと握りの種。私が見守る前で彼は骨で自分の周りに円を描いてその中に道具を並べ、座り込んで身体を前後に揺らし、以前老人が物語を聞かせる際にしたように女の子のような甲高い声を絞り出した。だがこちらの方が比べ物にならないほど高く超自然的で、彼がその音を口から出るがままにしていると、動物の鳴き声になったり長くゆっくりとした口笛になったりして辺りを漂った。ようやく眠ったかのように静かになると、両手が開いて突き出され、鹿を仕留めた若者が血の入ったヘチマを持って円の端までやってきた。彼は人差し指でシャーマンの額に少量の血を塗り、しわの多い唇にふれ、最後に手の中に数滴の血を注いだ。彼は残りを円に沿って流し、闇が深まる中で私たちが円の外に座って待つと、シャーマンは自身の声で六文字ほどの言葉を何度も繰り返し、合間合間に鳴き声のような別の声が小さく割って入った。すると突然彼は目を覚まし、全てが整った。私たちが見守る中、彼は夢の中で遥か遠く北の果ての世界まで旅に出ていた。彼の魂は凍り付いた大草原を越え、川を越え、厳しい荒地へと辿り着いたらしく、私たちが彼を通して聞いていたのはその地の霊たちの声だったようだ。いつの間にか彼は再び狩猟団の一人となっており、腹を空かせた関節の悪いいたって普通の老人であり、火を熾したり寝床をつくるのに枝をつなぎ合わせたりするのを手伝うために、留め金をした足で歩きまわっている。

私はまた疑問を抱く。少年はこれら全てをどこかで見ているのだろうか。そして何を思うのだろうか。私たちをなんの種族だと思っているのだろうか。自身の同族だと気付いているのだろうか。

私は分厚い鹿肉を食べたあとで指をなめてきれいにし、その後空虚な森の奥で男たちが一緒になって歌う様子に、その奇妙な音に耳を傾けていたが、その間もずっとそのことを考えていた。彼も聞いているだろうか。こんな雑音を出すのは一体どんな生き物なのか不思議に思っているだろうか。彼は自分の喉からも同じ音を引き出すことができることに気付いたのだろうか。単純なものだとしても、言葉を取り戻し始めているだろうか。想いも言葉も分かり合える存在を持たず、自分自身に話しかけているだろうか。まるでこの私のように。

そんなことを考えながら眠りに落ち、目覚め切っていない頭で辺りを見まわすと、頭上に広がる星を除けば自分が独りきりであることに気が付き、そして一層深い眠りに落ちて夢を見た。それとも再び目覚めたのだろうか。どうにもわからない。どちらにせよ、何らかの動物が暗闇から姿を現して私を見つめていることに気付いた。狼か。今感じているのは狼の鼻から出る息だろうか。それとも鹿か。いや、あの子なのではないか。以前の夢と同様に、私は自分でも自分の想像力が生み出したものでもない何かと向き合っている。何か私とは別のことわりに属するもの、それに出会うために私は自身の深いところから浮かび上がってきた。まるでガラスの表面に浮かび上がるように。あの少年は私の中にいるのか。それは誰だ。どこからやってきたのだ。彼は一体何者だ。

目覚めると、そこには誰もいない。たき火の向こう側、毛皮にくるまった若者が寝返りを打って、奇妙な低い声で何かぶつぶつと呟いているが、彼らの言語なのか意味を成さないただの寝言なのかすら私には判断できない。誰かが私のこともくるんでくれたようだ。しばらくの間星を眺めていたが、とても近くに見え、まるで自分の中に入ってきて、さらにすり抜けてゆくように思えた。次に目覚めた時は夜明けだった。

冬がやってきて、そして去っていった。季節はすっかり春だ。空は澄みわたり、湿気を含んだ風が優しくそよぐ。だが、どこを見ても花は咲いていない。辺りの茂みは黒ではなく灰色がかかった緑で、海は燃えるように波打っている。だが、今にも実ろうという果樹園もなく、スマイレもなく、黄緑色の葉をたたえた大木もなく、太陽の下で湧き出て交わる川もない。

冬の厳しさは想像を絶するものだった。七ヶ月の間、何千キロも広がる草原を越えて北の果てから音を立てながら吹く風が、茂みをなぎ倒して黒い海を泡立て、遂には海全体が凍り付き、沖合まで海の上を歩いて行って水の中で動けなくなった魚を見ることができる。女たちが飲み水を汲んでくる塩辛い小池は段々と固まり、今度は男たちが出向いて行って氷の塊を削り取ってこなくてはならなくなる。彼らはそれを引きずって戻り、必要となった際に火にかけて溶かすのだ。この強烈な北風の中では耳あて付きの帽子に毛皮の外套、ブーツやゲートルがなくては外に出ることもできず、そこまでしても呼気は凍り付き、氷柱になったひげは音を立てて折れる。人間の発する言葉も飲み水用の氷と同じように削り取られ、家屋に持ち帰ってから溶かさなければならぬ。日中ですら極寒のこの地で無駄話をしようなどという者がいればの話だが。夢の中で、私たちはその中を動きまわっている。まるで私たちの機知が頭の中で鋭く小さな水晶へとかたちを変えたように。まるで熊か何かのように、私たちは自分の心に持つ洞窟の中へ深く潜ってゆき、そこで眠る。他の者の意識に出入りする中で、私たちの姿かたちは曖昧になり、ぎこちなく、目には見えないものとなって動きまわる。

私の意識は繰り返し、鹿の住む森とあの子のもとへと飛んでゆく。彼はあそこでどうやって生きているのだろう。衣服もなく、家屋もなく。私はよく彼の夢を見る。亡霊のようにカバの森の中で雪の上を歩きまわり、コケを口に含み、氷の下に見える地面を掘り起こしてい

る。彼はこの冬を生き延びるだろうか。男たちは来年も彼の足跡を見つけるだろうか。私はもう少し天候が落ち着いて、狩猟団を組んで彼を捜しに行こうと族長ライザックを説得する理由ができるのを待ち切れずにいる。これは誰にも話していない。時が来るまでは自分の中に留めておこう。この気持ちのおかげで今まで生き延びてこられたのだ。一方で、私は夜ごとに夢の中であの子に追いついている。息を吹きかけて彼の身体を温めてやる。それとも私の夢の中にまで狼や鹿が現れて、彼らが少年を温めているのだろうか。もしくは動物たちがそうするように、どこかのくぼみに丸まって隠れ、冬の間中眠っているのだろうか。ゆっくりとした息遣いだけが自然界につながれたまま。そしてもしそれが事実ならば、どうやって栄養を得ているのだろうか。何を夢見ているのだろうか。彼は夢を見るのだろうか。

彼は私が幼少期に出会った野生児だ。今なら間違いなくそう思える。私のもとへ戻ってきたのだ。彼はあの子だ。

この真っ白な数ヶ月を特徴づける出来事が二つ起きた。一つは集落へ届いた今季初めての知らせで、通りから通りへかけて大声が飛び交い、木製のどらが鳴り響いてその知らせを伝えた。ダキア人が北にあるいくつかの町で略奪と破壊を繰り返し、川の向こうから私たちのもとへと向かっているというのだ。そのすぐあとに続いたもう一つの出来事とは、奴らの襲撃だった。

川は年が暮れるずっと前から凍り始めていた。五千歩分は幅があるだろうその川は今や堅固な氷の橋と化して、何百ものダキアの馬乗りたちが北の平原から雷のように降り注いだ。我々は集落を囲う外壁を守らねばならず、私も槍と兜を手渡されて男たちに加わるように言われたが、私という人間は五十年もの間平和な帝国の中で過ごしてきて、一度たりとも訓練など受けたことがないのだ。それでも冷たい夜気にさらされながら、山のように着込んだ毛皮のせいで誰かもわからない状態で外壁の後ろに立たされた。

これ以上の皮肉はない。騎士階級のローマ市民である私は、連綿と続く戦士の血を引きながらもローマという咲き誇る文明と秩序によって野蛮人から守られてきて、兵役やら愛国心やら軍人としての美德といった古臭い慣習を笑ったものだ。だが五十歳になった今、私は世界の最果てで守備の構えを取っている。一体何を守るためだ。百かそこらの泥と藁でできたあばら屋と、ラテン語も話さない三百程度の粗野な他人をだ。そしてもちろん、自分自身をだ。

ことの顛末はこうだ。襲撃者たちがやってきた時私は眠っていて、女たちの一人に揺り起こされた。そして私も自分が耳にしているものが何か悟った。氷の上を走るひづめが響かせる轟音、木製のどらの音、暗闇の中を飛び交う声。捉えどころのない姿が北から、私の夢の中から現れて、たった数週間前までは水だったはずの橋が反射する月光の中を駆け抜けている。私はよろめきながら表へ出た。放たれた矢が空から雨あられと降り注いで藁ぶきの屋根に突き刺さり、気の毒なことに外壁の端から覗いていた男に命中して、彼は悶え苦しみながら倒れ込んだ。矢じりには毒が塗ってある。傷口はすぐに膿んで悪臭を放ち、その男は三

日もの間譫妄状態に陥って、川の向こうの草原へ、そしてそのさらに向こうにある大地が彼の身体を受け入れてくれるまで、徐々に進んでゆく。奴らは一晩中外壁の周りをうろつきながら狼のように叫び声を上げ、内側には矢が降り注いだ。朝になると奴らは去っていったが、南東に広がる林はみな燃やされていた。いばらの匂いが混ざった真っ黒で苦い煙が、厚い雲となって私たちに覆いかぶさった。

奴らはトラキア人たちの住む集落の一つに向かっていった。そして春がやってきた。

私は今や、本当に差し迫った欲求についてなら人々に理解してもらえるほどには彼らの言語を習得していた。なので老人に狩猟団の件について話を持ちかけてみたのだが、彼はどうもはっきりしない態度だった。何かを恐れているのだろうか。あの子に関する迷信か何かでも広まっているのだろうか。あのシャーマンの交霊と歌声は、実は鹿狩りの成功を願うものなどではなく、あの子と関係のある儀式だったのだろうか。彼らはあの子がどこからやってきたと思っているのだろうか。神だとでも思っているのか。それとも自分たちと同じ民族だと思っているのか。果たしてそうなのだろうか。それとも北に広がる草原の向こうからやってきて、襲撃に巻き込まれて行くあてを失ってしまったのかもしれない。

自分があの子を知っていることも、スルモでの幼少期に言葉を交わしたことも、老人には伝えていない。彼を保護してここへ連れてきたいと思っていることなどもってのほかだ。この季節も彼が生き延びたという確信を持ちたいのだとだけ伝えている。老人はそれを信じてくれているが、どちらにせよ彼らはみな私が狂っていると、自分たちには何ら関係のないことで騒ぎ立て、頭の中の考えに対してひとりで議論を交わしているような狂人だと思っている。だが毎日毎日、老人は言い訳ばかりする。外壁を直さなくてはならない、木材がないので北のマツ林まで遠出しなくてはならない。そして集落の老人がひとり亡くなって、彼を埋葬するために男たち全員が丸二日もの間出払っていた。そうこうするうちに魚が活動を始める。男たちが毎日小舟で出かけて網で魚を捕まえているうちに、一週間が過ぎた。今度はランタンを持って鳥賊を探しまわるようになる。彼は私をからかっているだけなのではないか。それとも前回同様、秋まで待つ必要があるのだろうか。

秋が来た。明日、我々は鹿を狩りにカバの森へ行く予定だ。あの子のことを口にするのはやめておこう。前回と同じように馬に乗って旅立ち、同じ迂回路を通過して高原へ向かい、一面に広がるマツの森を抜けて、死者がかたちなき馬に乗って空を駆けまわる地へと辿り着いた。ただひとつ違うのは、今年は寒くなるのが早いということだ。高原は雲に包まれ、灰色の霧が眼前でうねりながら横切り、棒は音を立てて揺れている。手に握った種をばらまきながら駆けまわる男たちの叫び声は濃霧を通して湿って響き、遠くまで届くことなく自身のもとへと返ってゆく。

森へと向かう道中で、霧雨が降る。痕跡は何もない。足元の地面はぬかるんでいて、馬たちは広がる葉の間に隠れる輝くような青さの水たまりを飛び散らして、汚れた灰色の雲の

中を切り進んでゆく。鹿を捕らえる。皮を剥ぎ、肉を絶ち、荷かごに詰める。あの子の存在は全く感じられない。男たちはそれを感じるのを恐れていて、何事もないとわかると嬉しそうだった。私はというと落胆と悲哀に暮れていた。また冬が来る。彼はどうやって生き延びるというのだ。私はどうやって生き延びればよいのだ、彼がまだどこかにいるという確信も持てずに。

また春が来た。

私に向けられるこの粗野な言語を、原始的だが思いやりのある人々の言葉を、全て理解できるようになっていた。私は老人の孫息子にラテン語の読み書きと、詩の朗読を教えるようになった。私自身の作品もいくつか入っている。彼は賢い子だが気難しく、自分が学んでいるものに必要性を見出せないようだ。老人の話の聞いていると、今では小さな庭で物語を聞かせている彼の様々な声音が示しているものが何かわかる。それは北風であり、狼であり、巨人であり、死んだ戦士の霊であり、脛の骨であり、断ち切られた首であり、海底である。老人の物語は、ギリシャ人たちから聞いた話を基にした私のものより断然興味深い。しかしそれらは、理解を超えた荒唐無稽な劇のように残忍でありながら、この地の悪夢のような風景とそこを舞台にした私の夢の中での旅を包み隠さず物語っている。老人が放つ精巧かつ馬鹿げた冗談の前では、自分たちが見たものや知っているものを美しく語るだけの我々の文明的な寓話などなんの魅力もない。その冗談はまるでここでの冬のような世界を満たしている。頭を鈍らせ、血を凍らせる。それらは真実であるかのように感じられるのだが、同時に何ひとつ理解できない。時々ながら私は、友人であるこの老人の目に映る世界を漠然と理解し始めている。驚かされてばかりだ。飾らず、残酷で、恐ろしく、滑稽だ。同時に彼は日に日に私の知るローマ人の誰よりも高貴で洗練された人物に見えてくる。彼の横に並べば私など取り乱した老婆でしかない。尊厳などどこにも見当たらない。

またしても秋が近付いてきた。空気が煙たい。私たちは再びカバの森へと向かう。

森には入ってすぐのこと、秋らしい黄金色の陽が差し、落ち葉の絨毯の切れ目にある水たまりに空が映る中、彼はそこにいた。全く身動きせず、この二年を経ていくらか大きくなった彼が、細い線の走るカバの木々の間に立っていた。私の心は喜びで満たされた。彼がいる。すぐ目の前に。男たちにも見えている。彼の身体には泥の筋が走っていて、骨張った膝や肘、それに痩せ細った腹が見えた。十一か十二歳ほどの醜い少年が、汚い髪の毛を鳥の巣のように乱れさせている。

私たち五人が輪になって座り、集落から持ってきた薄いスープを少し飲んでいる間、馬たちはカバの木の間を練り歩き、落ち葉という土壌から顔を出したわずかな草を食んでいる。日も終わりに近付いてきた。静謐という言葉そのものだ。私たちが話もせず器を両手で包み、スープを飲んでいると、突如として彼が現れた。こちらを見つめている。器の縁から顔を上げた男たちの瞳は黒く、手は垢だらけだ。全員が顔を上げた。彼を見て、次にお互い目

を合わせ、そして凍り付いた。馬たちまでもが食事をやめて午後の潤んだ空気の中で顔を上げ、新たな存在の匂いを確かめている。その場にいる全員の息遣いが聞こえる。まるでその瞬間に全員が魔術にかかったかのように。まるで時間が止まったかのように。こんな風に落ち葉の上に長い間^{あぐら}胡坐をかいたままでいると、まるで森の木々の一部のように見えるのではないかなどとってしまった。もし自分たちの精神を解き放ち、木に、落ち葉に、コケになったならば、彼は私たちのもとへと近付いてくるだろう。私以外の者は怯えている。私にはわかる。彼らが動けずにいるのは、一種の恐れからだ。たいまつや毒矢を持って夜襲をかけてくる馬乗りも、口から泡を飛ばしながら牙を向けてくる猪も恐れぬこの男たちが、あの子を恐れている。私は違う。私が動けずにいるのは全く別の恐れからだ。指を動かすだけで、息を吸っただけで彼は驚いて逃げ出してしまうかもしれない。

私たちは互いを見つめながら座っている。どれだけの時間が経っただろう。彼が飛び上がることはなかった。だが、一頭の馬が草を求めて頭を垂れて私たちの間を横切ると、カバの木の間には日の光だけが残されていた。

私は落ち着いている。彼がまだ生きている、それだけで十分だ。あとのことは時間が解決してくれる。私たちはこれからまだ二日もこの森に留まる予定なのだから。

初日の夜、たき火の灯りの端、つまり暗闇が始まる場所にかゆの入った器を置いた。様々な穀物を塩辛い水でゆでて蜂蜜で味付けしてある。他の者たちが眠りについたあとも私はずっと外套にくるまって座り、落ち葉の絨毯に足がふれる音を逃すまいとしている。必ず様子を見に来ると確信している。私たちが彼を探しているように、彼もまた私たちを探し始めたのだ。彼は私たちを求めていて、私たちが何者で、そのかたちや匂いがなぜこんなにも森に住む他の生き物たちと異なるのかを知りたくてたまらない。彼は自分が何者なのかを自問し始めたのだろうか。少なくとも部分的には自分が私たちと同じであることを察しているだろうか。私たちからすれば、姿かたちに関しては彼が自分たちと同類であることがわかる。

耳をすましても、何も聞こえてこない。カバの木に背をあずけて座ったままで眠りに落ち、夜明けを知らせる銀白の光に目を覚ます。慌てて器のところまで向かう。空だ。何かやってきて食べ散らかしていった。鹿か、彼らが信仰する森の悪魔の一種か、それともあの子だろうか。私は器を外套の下に隠して用を足してきたふりをしたが、老人は全てを見抜いた様子でこちらを見ている。彼はこれが愚かな賭けだと思っている。それも危険で愚かな賭けだ。彼は私のことを、年老いた私の愚かさを恥じるあまり、自分が気付いていることを私に悟られないようにしている。若者たちに命令する時の彼の声は普段よりうるさく乱暴で、まるであの子が怯えて逃げ出すように仕向けているようだった。

よく晴れた静かな日で、至るところに鹿がいる。開けたところに設置した拠点は男たちが仕留めた五頭ほどの鹿でまるで肉屋のようになり、血の臭いが充満し、木の枝にかかった皮から血が滴り、腰や脚、あばらなどに切り分けられた肉は持ち帰る時のためにきれいに積んである。冬の間の食糧として女たちが塩漬けにして倉庫にしまうだろう。その作業には丸一日かかる。二日目の夜もここで過ごし、明け方に旅立つことになるだろう。

私は再びかゆの入った器を準備し、今度はたき火からかなり離れたところに寝場所を確保したが、決して眠ってしまわぬように木の幹を支えにして姿勢よく座った。

すぐさま眠りに落ちてしまい、夢を見た。昨日森の中であの子を見つめながら何気なく考えていたことが現実となった。私たちはみな、本当に全員が姿かたちを変え、森の一部となっていた。キノコや石になった仲間たちを見つけることができる。私自身は水たまりになっていた。日光に照らされて温かくなった自分、液体の自分、空の青さを全身に取り込んだ自分を感じることができる。だが私は、点在している小さな水たまりの一つに過ぎない。雲が、その写像が自分を通り抜けてゆくのを、そして一度だけ翼を持った何かが素早く過ぎ去っていったのをどこかで感じている。徐々に辺りは暗くなってゆく。そよ風が水面を揺らす。そして自分を包み始める暗闇に、私は恐れを抱いた。私の魂はどこか肉体の近くを漂っていて、目覚める頃には戻ってくるのだとわかっている。だがそれでも、夜が自分を覆い隠しつつあるのを、星空の下で自分が冷たくなってゆくのを、そして辺りの気温が急に下がったのを感じていると、自分がただの森の中の雨水になってしまうことが急に恐ろしくなった。凍ってしまうとはどんな感覚なのだろう。想像してみる。徐々に凍ってきて氷の結晶ができたが、私はできるだけそのことを考えないように努めた。恐ろしい。私の魂はどうなってしまふのだろう。私は森の暗闇の中でじっと月を待った。すると近くで軽い足音が聞こえた。鹿だ。その動物の顔が私に向かって下りてくる。私の心は鹿に対する愛情で満たされた。舌が水面にふれて、私を少し口を含む。鹿は私を自分の中に取り込んだが、自分の一部がなくなってしまうような感覚が一切なかった。水面に生じた感覚は筆舌に尽くしがたいもので、私はさざ波を立てる。私の一部が中へと入ってゆくと、鹿はゆっくりと顔を上げて落ち葉の上を歩いていった。自分の一部が遠くへ行くのを感じながら、残りがまた静けさを取り戻し、落ち着き、澄み渡ってゆくを感じる。狼がやってきたらどうする。私は突如そんな疑問を抱いた。もしかしたら次にやってきて私にふれるのは粗雑で強欲な狼の舌で、最後の一滴まで飲み干してしまうのでは。ありえない話ではない。狼の腹の中にすっかり収まってしまふことを想像して、覚悟を決める。

次の足音は、先ほどのものより軽かった。すぐにわかった。あの子であると。星空を背に、鹿よりも高さのあるあの子が立っている。膝立ちになる。私に向かって身をかがめる。彼は鹿のように水面を舐めることはせず、息で私が揺れるほどに顔を近づけて、手のひらで私をすくう。指の間から輝くような星の明かりが幾筋も漏れて私に降り注ぐ中、彼はすくった水を飲む。私はまたさざ波を立てる。調和を失うのは恐ろしく、波は大きな音を立てながら縁へと向かってゆく。落ち着きを取り戻すと、彼は消えていた。私は静寂を取り戻し、星の明かりを反射している。眠りにつく。目を覚ます。

辺りはまだ暗い。あの子がちょうど器を地面に置くところが見える。両手に器を抱えてしゃがみ込んでいる彼の顔は、汚らしい髪で隠れていた。

彼は私が息を呑んだのに気付いた。三メートル足らずのところにいる彼と一瞬目が合うと、彼は手から器を落とした。それは私の方へ転がってくる。彼は急に立ち上がったが、困

った様子で立ち尽くしている。まるで今になって初めて、もといいた森の中と新たな世界、嗅ぎ、ふれ、取り込んだ私たちの世界のどちらに向かって走り出せばよいのかわからなくなったかのようだ。男たちがろくろを使って作った粘土製の器から、彼は中身を食べたのだ。蔭かれ、刈り取られ、砕かれ、ゆでられてひとさじの蜂蜜で味付けされた穀物を。暗闇の中で見つめ合っている私たちの間を何かが伝わった。私たちは言葉を交わしたのだ。私にはわかった。声に出す必要のない言語で。

来年は彼を捜す必要もないだろう。向こうから見つけるはずだ。

だが今はまだ、彼は裸足で葉を引きずりながら暗闇に向かってゆっくりと後退りしてゆく。私は次の冬が明けるまで待たねばなるまい。

全ては思った通りの展開になった。

一年は瞬間に過ぎ去った。自分の運命を呪ってばかりいた私も、肉体的にも精神的にも強さを取り戻した。私が時間をかけて散歩に行く茂みには小さな動物や昆虫がたくさんいて、そのどれもが興味深い。海岸まで下りていって漁師たちと言葉を交わしている間も、浜辺の黒い小石が波に磨かれている。この辺りの海にいるのは見知らぬ魚ばかりだが、それはそれで美しく、それぞれが生物として完璧でどの部位も欠かすことができぬほど重要であり、その姿は称賛に値する。たとえ恐ろしい生物だとしても。神の創造物を批判するのをやめて、受け入れる姿勢を学んだ。私たちには、目的のはっきりした力が備わっている。つまり、その力こそが最終的に到達すべきものへと私たちを駆り立てるのだ。ただ可能性を思い付くだけでよい、そうすると私たちの中で不思議な力が働いてそれが現実になるのだ。それこそが変化の本当の意味なのだ。それこそが真の変身なのだ。葉や花が木の内側に宿るように、人類の未来も現在の私たちの内側にしまわれているのだ。ただ泉を見つけ出して、掘り起こしてやればよい。これらの変化は想像以上に緩慢だ。何世代にも渡るだろう。だがこの過程は確実に達成される。私たち自身が既に「こうありたい」という何世代もの人類による願いの産物なのだ。そしてこれを読んでいるあなたは、私たちが願っている存在なのだ。既に神となったのだろうか。翼は生えているのだろうか。

私は毎日老人と出かける。彼は今まで持ったどの友人よりも親しい友だ。彼と出会うために慣れ親しんだ地の者たちに別れを告げなければならなかったとは、不思議な話だ。彼が網のこしらえ方を教えてくれ、私はコツをつかみ始めた。魚の種類によって、網や仕掛けの種類が変わる。網に取りつけるかぎ針にも豊富な種類がある。こういったことを学べて幸せだ。何が素晴らしいかといえば、それぞれが完璧な組み合わせを成していることであり、それらの物事の相性を見出す私たち人間の才能である。これら網と針の関係、遙か昔から続く関係性は一種の詩といえるだろう。

また、茂みを散策する際にいろいろな種を採集するようになった。沼地に生えている花々はともすれば見落としてしまうほど小さく、私がそれらの種を持ち帰り、薄汚れた指先で土に埋めてやると、一気に芽吹くのだ。限りなく質素ではあるが、私は庭園をつくり始めた。

そして私は冬の間中見張り番たちに混ざって訓練を繰り返したが、その中で自分の中にあったもの、どんなに私が認めるのを拒み続けても父はずっとその存在を知っていたものを見つけた。兵士の面影を。こんなにも自分が変化するとは。今までとこんなにも違う自分が生まれるとは。

今や彼らの言葉を自分の母語と同じように理解できるようになって、不思議と感動的だと思うのだ。我らがローマの言語と全く異なるのは、ローマの言語の最終的な目的が物事の差異や感情と思考の微妙なニュアンスを表現するところにあるからだ。この土地の言語は同じく表現に富んでいるが、それらが表すのはありのままの姿と物事の調和だ。この言語で詩を生み出すこともできるだろう。この言語で世界を認識すると、それは全く別物に映る。別世界である。なぜだか世界が創造された時の本質に近く感じられ、この世を今のかたちに変え、そして来たるべき未来のかたちに変えてゆく何らかの力も身近に感じられるのだ。この地の簡素なつくりを、数少ない彩りを、崖や茂みの鋭い輪郭を、弱々しくもはっきりした光を見て、私の目は喜びを湛える。もはや春を知るのに樹木に生える花びらや若葉は必要なく、自分の中に見出すだけでよいのだ。自分の中で氷が音を立てて崩れ始めているのを感じる。再びゆるくなって流れ、世界を映すようになる。それが春というものだ。

膠着状態こうちやくだったライザックとの長い議論でも勝利を収めることができた。秋が来てカバの木が葉を落とせば、私たちは少年を見つけに行き、そして傷付ける心配がなければ、今回は彼を連れ帰ってくる。ライザックにはひとつだけ心配事があった。森の精霊たちの怒りを買うことなく少年を集落まで連れ帰ることができると、シャーマンに保証してもらう必要があるというのだ。

私が思うに彼らが恐れているのは、彼を育て守ってきたものがなんであれ、あの子を集落に招き入れることでその何かに対して無防備になってしまうのではないかということだ。冬の間外壁の周りをうろついている狼たちかもしれない。強風にもかき消されることのない遠吠え。まるで何らかの霊のようにも見える灰色の群れ。毛深く、鋼鉄のかぎ爪を持ち、飢えた冬の獣。あの少年も冬になると狼へと姿を変えるのだろうか、ライザックはそう考えている。彼はそうやって生き延びているのか。そうなったら私たちはどうすればよい。彼は夜中に這い出して、兄弟たちのために門を開けてしまうのではないか。それとも彼を育ててきたのは狼などよりもさらに残忍で恐ろしい霊なのだろうか。未だかつて見たこともない未知の獣がいるのかもしれない。彼がそれらと心を通わせていたら、想像でしかないと思っていた恐ろしい生物へとかたちを変えることができるとしたら、私たちにはそれを鎮める手段はない。

私は彼がただの少年だと、私たちと何ら違いのない人間の男の子だと主張していて、ライザックは私の話を信じている。もしくはそう振る舞っている。というのも、彼には自分は信心深い住民たちとは違い、私と同様に理性的な人間だと私に思わせたいという強い願望があるからだ。

だが実際のところ私は彼を欺いている。彼は普通の少年などではない。彼は、あの子なの

だから。

夏が来て、私の庭園は輝き出した。わずかな農地のカラス麦の間や沼地に生えているのを見つけてきた野生の花々だ。どこから種が運ばれてきたのかなどわかるはずもない。愛情を込めて世話をすれば立派に育ち、腐葉土や肥料を十分に与えれば青色、赤色、黄色と色付く。家の女たちは私が食べられないものにこんなにも労力を注いでいることをばかばかしいと感じ、呆れている。それでも、彼女たちはここにある色を見て喜び、家のわずかな蓄えである水を進んで提供してくれる。おそらく彼女たちにとっては子どもを甘やかすような感覚なのだろう。他のもの全ては単純に利用するために存在する。女たちは装飾品を一切身に着けない。彼女たちが縫う衣類はしっかりと頑丈な作りだが、遊び心はひと針も存在しない。ここでは私が育てる花々だけが陽気な存在である。私が捨て切れずにいる以前の生活の名残りだ。花を世話をしている間だけが余暇と呼べる時間だ。

彼らにとって余暇とは未知の概念だった。それこそがここへ来るまでの私が知っていた全てだということを、どうすればわかってもらえるだろう。ここへ来るまでの私が重んじていたものに価値があったのは、それらが無意味だからであり、それらのために使う時間が押し付けられたものではなく与えられたものだからであり、余暇を楽しむことは自由になることだからである。自由という言葉は彼らの言語には存在しないのだろう。この土地が持つ性質や法則から解放された自由なものなど、ここには存在しない。

だが私たちは自由なはずだ。私たちが頼るべきは自然界の法則ではなく、自分の本質を損なうことなくその法則を超えた存在を思い浮かべる方法なのだ。私たちは自由に自分たちを超えてゆけるはずだ。それだけの想像力さえあれば。

ローマで書いた詩がそうであったように、ここでは私の小さな鉢植えが世の中と逆行する存在だ。これは始まり、変化の兆しだ。いつの日か、女たちの一人が種を詰めた袋を持ってここを通り過ぎる際に、私のかわいらしくもきらびやかな花々の匂いを嗅ぐために足を止めるようになるだろう。彼女は自分でも気付かぬうちに、新たな世界への一步を踏み出しているのだ。

その一方で、私の頭の中にはあの子のことしかない。他はすべて暇つぶしだ。花々と共に、夏は過ぎていった。穀物が刈り取られ、もみ殻を取られ、保存された。次の秋がやってきた。

彼を見つけに行こう。

ことの顛末を語ろうとは思わない。臆病な私は追走劇に加わることなく、できることなら目撃したくもなかった。カバの木にしがみつくように丸まって両手で耳を覆い、全てを他人任せにした。鋼鉄のひづめで葉の土壌を刈り取りながら大きな馬が森の中を駆けまわり、男たちが雄叫びを上げながら円を描くと、あの子はおそらく全方向から自分に向かって飛んでくる奇妙な叫び声にうろたえて、そこら中から飛び出してくる影のような姿に怯え、下生えの中をあちこちに逃げ回った。何かにつまずいた彼は突如この広い場所に出てきて、私の

目の前で立ち止まった。完全な錯乱状態にあり、疲れ果てて半ば狂乱していた彼は木の枝で切ったのか肩から血を流し、全身は泥まみれだった。遂に男たちに取り囲まれた彼の口から出た唸り声は、人間の口から発せられるものだとは思えなかった。

それでも、背後で若者の一人が馬から下りると、あの子はどこかに残っていた体力を引き出して拳や足を振りまわして歯を剥き出したが、若者が荒々しく彼の口と鼻を覆って息を絞り出し、他の男たちが押さえつけて革ひもで縛りつけた。目だけが激しく動き続け、彼の全身に走る痙攣を見て、私は発作か何かかと不安になった。彼に手を当てると、蛇が出すような獰猛な威嚇の音を鼻孔から出して、痙攣は一層激しくなった。ようやく私たちは彼を解放した。解放と言ってもブナの木の根で豚のように縛り上げられた状態であり、シャーマンが儀式を始めた。シャーマンが出す自分のものではない北の果ての甲高い声を聞くと、彼は落ち着いてきたようだった。催眠状態のシャーマンの歌が少年の持っていた野性を引き出して、永遠に続く真っ白な世界に向かって北へと運び、魚の骨でできた穴をくぐって氷の地面の下まで持ってゆくようだった。シャーマンが目覚めて円から出てきた時あの子は眠っていて、帰りの道中も族長の馬の鞍から吊るされたままで眠り続け、さらには集落に着いてからも丸一日眠ったままだった。

なんと奇妙な行進だったことか。午後遅くに沼地からの長い上り坂を進んでいると、河岸平野や長々と続く崖の黒い輪郭に秋の日が差し、その向こうにはどこまでも輝く灰色の海が広がっていた。水たまりで跳ねていた子どもたちも、大きな目でこちらを見つめながら叫び声を上げて私たちのあとを追いかけてきた。棘の生えた低木にかけた衣類を取り込んでいた女たちも、腕にあふれるほどの洗濯物を抱えたままやってきてこちらを見ていた。真っ黒なかぶりものの下から、目だけが見える。少年を捕獲したという噂は私たち自身より先に到着していた。族長の馬に吊るされた鹿ほどの大きさの痩せこけた少年は、実際にはもう死んでいるかもしれない。私たちが馬に乗せて持ち帰る肉のように、血液も魂も抜かれてしまったのかもしれない。

狼少年、副神⁶、サテュロス⁷。その生き物がなんであれ、彼が生きているという噂は既に広まっていた。集落は彼を壁の内側へと迎え入れた。全てが始まるうとしている。

⁶ 副神 (godling) : ローマ神話などで、主神と呼ばれる神に仕える神々のこと。

⁷ サテュロス (satyr) : ギリシャ神話に登場する半人半獣の森の神。ローマ神話のファウヌス (faun) に当たる。

III

私は何か間違いを犯したのだろうか。

あの子は未だに縛りつけられたままで、部屋の反対側で寝込んでいる。集落に連れてこられた時から、老婆も嫁も彼にふれようとしなかった。彼が身体を汚せば私が洗ってやらなくてはならない。二人は彼のために粗挽きの穀物を蜂蜜で甘くしたかゆをつくってくれるが、部屋の敷居をまたぐことはない。手の縄をほどいて器を置いておき、彼がイグサの床の上を這って進み、飢えた獣のようににおいを嗅いでかゆをすする音を扉の外から確かめる。犬の鳴き声のようなものは漏らすは泣くことはない。目は乾いたままで、人間の泣き声は一切出てこない。我を忘れて涙を流すことができれば、彼の中の子どもの部分を取り戻せるかもしれないというのに。その鳴き声は森の獣から教わったもので、どこか頭の奥から出てくるのだろう。彼はその声を何時間も発し続けるのだ。親指をくわえて自分を落ち着かせる子どものように、彼は恥ずかしがる様子もなく自分の手で身体を刺激して、まるで猿がやるように小刻みに身体を震わせ、繰り返し繰り返し、疲れ果てるまで続ける。そうして静かになると部屋の隅でしゃがみこんで、口を固く結んで膝を小さく抱きかかえる。そうかと思えばイグサの中に潜り込んで、肘を強く挟み込んだ膝の上にあごを乗せて丸まってしまう。

私たちはお互いを見つめたままで何時間も過ごす。それでも彼が今どんな感情を抱いているのか見当もつかない。私が何をやっても興味を示さない。ちょっとした書きものをする。食事をする。外套のほつれを直す。こちらを見つめているようで、実際は何も見っていない。初めのうちは、身体を洗ってやろうとふれただけでも鋭い前歯で噛みつこうとしてきた。今では私のやることを無抵抗で受け入れるようになっているが、その態度がまた私を不安にさせる。彼の中にあつた何かを、私たちは既に殺してしまったのではないか。彼が死んでしまうのではないかと思うとたまらなく恐ろしい。連れ帰ってきたのは彼の中の何か動物的な部分であり、私たちがそれを力づくで飼い慣らしておくことができるのは、彼を捕まえた若者の腕をすり抜けて自分の魂が離れていってしまったとその何か気が付くまでなのではないか。それどころか魂が彼の肉体から漂い出てしまったのは、私たちが彼を催眠にかけた時なのかもしれない。

眠っている彼を見つめる。腿の内側を走る痙攣を伴って、彼の足は犬のように震える。

夢を見ているのだろうか。もし彼が夢を見ているのだと確かめることができたなら、ようやくつながるべき存在が、次なる存在へと続く階段を導いてやるべき彼の中の何か、まだ消えていないことがわかるというのに。彼が夢を見ることのできるのだと確かめなければ。彼が微笑みを、涙を浮かべることができるのだと。

だが、私はまだ彼を言葉で描いてすらいなかった。

十一歳かそこらの彼は背が高く、身体は力強いが痩せこけたつくりで、肘や膝の関節は肥大して固くなっている。真新しい傷が腕にも足にもあり、古い傷跡は肉体にできた染みのようで、黄色く焼けた肌の下に茶色く残っている。手足には薄く毛が生えているが、胸には生えていない。だが、背筋に沿って生える一列の体毛は狐のような赤みを帯びていて、それこ

そが女たちが彼を恐れてふれようとしない理由だ。しかし特に珍しいことではない。家の前で裸になって遊んだり、水浴びして跳ねまったりする子どもたちを観察してみれば、同じようなものが見えるだろう。普通の状況なら誰も気にしない。この少年の身体にあるからこそ、女たちにとっては何らかの徴しるしに見えるのだ。そして足だ。確かに雨の日も晴れの日も関係なく裸足でいたせいで足は広がって固くなり、つめはすり減り、足の裏は分厚くなっておそらく粘土製の食器並みに固くなっているが、正常な足以外の何物にも見えない。少年ルロが集落で吹き込まれてきた噂では、あの子が全身毛で覆われてひづめを持っているというが、本当に馬鹿げている。

夕方になると私は少年を引きずり込んであの子を見せ、何が見えるか聞いた。だが彼は怯えるあまり直視することができず、それでも確かに現実を見たに違いないのだが信じている様子もなかった。彼が信じ込んでいるものは現実よりもよほど強烈なのだ。

彼が何を考えているのかはわかる。私がどうにかして魔術であの子のひづめを曲がった足へと変えて騙そうとしたか、彼自身に魔術をかけたとでも思っているに違いない。

私は最初、少年が自分と同じくらいの年齢のあの子に対して特別な興味や同情を抱くかもしれないと思っていた。しかしそんな気配は微塵もない。彼があの子を忌み嫌う様子は、なぜだかそのうち彼に自分の居場所を奪われてしまうと感じているかのようだ。まるで、そうまるで眠っている間にあの子が自分の魂を盗んでしまうと感じているかのようだ。この人々は夢遊病や魂を盗む存在を本気で信じている。私自身も疑い始めたが、彼らが考えているのはきっと、あの子が既に魂を失っていて、部屋の隅で眠っているように見えても実はシャーマンと同じように身体から抜け出して歩きまわることができ、壁をすり抜けて隣の部屋へ入り、そして少年ルロが森での狩りや川の向こう側での旅といった少年らしい夢を見ている最中に、魂の入っていない彼の身体の中へと入ってゆくことができるだろうということだ。老婆や少年の母親が彼にこの考えを吹き込もうとしているのは、当然ながら彼が老人の考えを左右しうるからだ。だがライザックはどういうわけか、この件に関して私の味方を続けている。女たちを敵に回してまで。そしてあの子の様子を見に一度だけやってきたものの詠唱するのを拒んだシャーマンをも敵に回したことになる。女たちが私の噂をして陰で責める要素がまた増えたわけだ。彼女たちとシャーマンは、もちろん結託している。

そんなわけで、私たちは一日中暗がりに座っているだけだ。

彼の特徴を観察するうちにあの子が何を考えているのかをわずかながら推測できるようになったが、それでもかつてのように、森の中で語り合った頃のように意思疎通することはできていない。まるで魂を失って、あの頃私が話しかけていた彼とは別人であるかのようだ。小さな欠けた歯が並ぶ口を見してみる。彼はまるで怪我でもしたかのよう、歯を剥き出しにしてせわしく息を吸い込む癖がある。だが、彼は自分を刺激している時にも同じようにするのだ。しかもそうしていると、彼の骨格の異様さがよくわかる。高めの頬骨や突き出た下あご、顔の輪郭。目も観察してみる。真っ黒な目は深くくぼんでいる。眉毛は吊り上がっている。私たちが洗って整えてやった髪の毛は、インクのように黒く、真っ直ぐで、手触りは

荒くてつやなどない。だが栄養不足が原因なのか、落ち込んでいるからなのかはわからない。もしかすると魂が抜けてしまって落ち込むことすらできないのかもしれない。以前知ったのだが、髪の毛は本人の調子次第で輝きも曇りもするが、特に悪い時に顕著なのだ。私たちがどれだけ洗ってやっても、彼は清潔にならない。まるで土が皮膚の下まで入り込んでしまって、その色が移ってしまったかのようだ。彼の手足に残る茶色がかった古傷も、中に泥が入っているからだと思えば説明がつく。彼は全く美しくない。私が想像していたあの子の姿とは似ても似つかない。それでも私は愛情を、途方もない哀れみを抱いて、彼を正常な状態に戻してやりたいという痛みにも似た必要性を感じている。

考えに考えを重ねる。次はどうすればよい。どう始めればよい。思いやり、それこそが今ここで求められている。そして時間が必要だ。まず私たちの優しさを見せ、そして私たちの種を理解させる。そして次に彼も私たちと同じ種族であることを納得させるのだ。そうして初めて自分が何者であるのかに気付くだろう。

だが出だしが悪すぎた。私たちを残酷な種族だと思って当然だろう。一体どんな獣がこんな仕打ちをするだろう。一体どんな獣が彼を馬で追いまわし、縛り上げ、彼の知る全てを取り上げて連れ去ることができるだろう。そして少年の悪意にさらされ、女たちの敵意にさらされたのだ。少年は近付かせないようにしよう。

結局は私ひとりでやらなければならないだろう。少なくとも初めは、私が彼とこの世界の橋渡しとなる必要があるだろう。

なぜか私は夢で見た狼を思い出し、私という水たまりを飲み干そうとする狼に対して恐れを抱いた。

時は流れてゆく。

私は女たちが食事を持ってきても部屋を出ないようになった。また罨なのではないかと警戒したのか、彼も初めのうちは用心深かった。器に向かってにじり寄り、においを嗅いで、よく観察してから手に取り、以前より時間をかけて食べて、その間も器の縁から真っ黒な目を覗かせて私を監視したが、そんな時の彼の目は赤く光っているように見えた。そして指に付いた最後のひとすくいを平らげると、器を転がして隅に戻っていつてしまう。彼はそこで膝を抱えて座り込み、私が何らかの行動に出るのを待っていたものだ。だが今や彼は私を気にすることもなく食事にありつく。まるで存在していないかのように。豚のような音を立てて食べる。

私は自分の藁布団も持ち込んで、彼とは反対側の隅で寝るようになった。彼はそれにも慣れたようだ。そして自分が彼とのつながりを取り戻し始めていることに気付いたが、それがいつ始まったのかは見当もつかない。彼の身体を洗ってやっている時だったかもしれない。それに関して彼は全くと言ってよいほど抵抗しなくなったが、自分の身体にふれられても何の反応も示さない。それとも、お互いの視界を出たり入ったりしているうちに偶然目が合った時だったのだろうか。はたまたお互いの夢の中だったのかもしれない。この部屋中を満

たす何かを介して、同じ水たまりの中を漂っているかのように一方の夢がもう一方と出会い、目覚めている時の精神では知覚できない領域で、私が彼の夢の中、もしくは彼が私の夢の中へ流れ込む。もしくはここで動きまわって書きものをしている時、インクに浸したペンを羊皮紙の上で走らせている時、かみそりをあごに当てている時に私が生み出す、目に見えない流れが彼にぶつかって砕けたのを感じたのかもしれない。確かめようがない。だがつながりを持ったことだけは確かにわかる。彼はもう犬のような鳴き声を出すことも、膝立ちで前後に揺れることも、喉の奥から小さな唸り声を出すこともない。彼はじっと観察している。そして彼の心と呼べるであろう何か機能が始め、外へと向けられ始めたと思っている。そう感じるのだ。遂に、彼の心を見つけた。見つけたのだ。自らの意思で外へと出てくる準備ができてきたのだ。

今日彼の身体を洗ってやっていると、多少怯えながらも好奇心を抑え切れずに私の手の甲に指先をふれてきて、肌の感触を確かめたあと急いで手を引っ込めた。私が拒否して彼を叱ると思ったようだ。私は不思議な気持ちになり、若干の恐怖すら覚えた。暗闇で現れた何かの動物になめられたかのように。彼はようやく自分自身という概念を理解しようと思いはじめたのだろうか。彼にとってはガラスに映った自分の姿にふれるようなものなのだろうか。自分の肉体のつくりや、それがどんな見た目なのか、どのようなかたちをしているのか、それがこの宇宙でどうやって存在しているのかといったことを考え始めているのかもしれない。自身の肉体を想像してからでなければ、自分が何者なのか悟ることはできないのだろうか。

知性の存在を私は確かに感じている。書きものなどの作業に取り組んでいる際には、以前にも増して頻繁に部屋の中にあるもうひとつの生命力の源に気付かされる。そこから発せられるさざ波は光のように私の意識の片隅に押し寄せては砕け、私の思考を乱す。私にはわかる。この部屋を満たす昼前の湿っぽい空気の中には私のもの以外の感情も思考もあふれていて、その中で私はペンを走らせ、少年は身体を弦のように緊張させて隅から目を光らせている。彼の心や身体が落ち着かなくなってきたのは、彼が生まれ変わろうとしている証拠だ。

結局のところ、彼は子どもなのだ。じっとしていることなどできない。身体を動かして表現したい気持ちも、ものにふれて認識したい気持ちも抑えられるものではない。

彼がここにきて二週間近くになる。初めの三日間は眠ったままで、彼の魂はこの世を離れようとして、それから数日間は何かにあらずといった状態で生活していたが、彼は再び目覚めようとしていた。少年らしい敏捷さを取り戻そうとしていた。昨日のことだ。私が少し部屋を離れているうちに彼が私の筆記具にさわったに違いない。インクがこぼれていた。私は彼がいじったことに気付かないふりをして片付け、インクを補充し、どこまで書いたのかを確認した。だが彼の舌がインクで青くなっているのを見た時は笑い出してしまうそうだった。

今日は部屋の外へ出て、戸口のすぐ後ろから様子を見ていた。

羊皮紙が巻いてあるところへふらふらと進み、見つめ、指先でつつき、顔を近づけてにおいを嗅いでいる。あの束から動物の毛皮のにおいがするのだから、さぞかし困惑していることだろう。再びインクに強い関心を持ったようだ。またにおいを嗅いでみるが、こぼさないように慎重になっている。ペンを手に取ると、私をよく観察していたのか、ぎこちないながらも親指と人差し指できちんと握った。どうやら満足したようだ。インクに浸そうとするが、指に挟んだままでバランスを保って穴に入れることができずに苦戦している。インク入れの上に覆いかぶさる彼の表情はどう見ても集中した人間のそれであり、子どもたちが初めて絵を描く時や、文字を書く時、針に糸を通す時と同じだ。目は一点を見据え、口の端から突き出た舌が手に合わせて動く。まるで舌も手足と同じで、我々人間がこの世に突き出して物体を動かし、変化させるための部位であるかのように。会話というものはこうして生まれたのだろうか。手が物体をつかみ、押し、つくり、生まれ変わらせるように、舌がこの世界と関わろうとして。

新たな世界の物体を認識しようとするあの子の挑戦を戸口の後ろに隠れて見ているうちに、自然と涙がこぼれた。我々人類が様々なものを見出し、造り出すようになる緩やかな進化の過程には、つまりは我々自身の中や我々を取り囲む世界の中には、このような心震わす出来事があふれているのだろう。子どもが初めて立ち上がろうとする瞬間、それを実現するために我々の祖先が何世紀もかけて夢見て、想像から生み出したであろう足という部位を使って、次の段階へ進もうとする瞬間に感じるだろう。煉瓦を積み上げて不安定ながらも小さな塔を初めて造ろうとした瞬間、いずれ街と呼ばれるものの始まりの瞬間に感じるかもしれない。そんな途方もない時間をかけてきた発見の数々の歴史。それらの瞬間をひとりの子どもがたった数ヶ月で甦らせている。ひとりでは決して成しえなかった物事を存分に経験し、彼が送っていた数千年とも思われるような長い静寂の日々の中でどこかに眠っていた意識を、どうにかしてこの世界に向けている。愛しいあの子が長きに渡る孤独の日々を終えて、生まれ持ったものや同胞たちの社会へ自分を導いてくれる発見をする日をこの目で見るのは、どんなに感動的だろうか。

彼の手を自由にしてやってから数日が経つ。そして今朝、拘束具を全て外してやった。もう必要ないだろう。今から彼を私たちや新たな生活につなぎとめるものは、目には見えずとも確かにここにある。彼も感じているはずだ。蜘蛛の巣のようにこの部屋に張り巡らされた感情の糸を。好奇心。自らを取り囲む全てのものが自分にとってどんな意味を持つのかを知りたいという欲求。それら全てが自分という存在を定義づけ、自分の身体の機能を明らかにする。それが今彼を捕える糸であり、彼の心はそれらに沿って動きまわって自分と私たちのつながりを解明するようになるだろう。それどころか器やひしゃく、バケツ、私が彼を洗ってやるのに使っていたがいつしか自分で使うようになったスポンジ、インク入れ、ペンと羊皮紙、彼が気付くようにさりげなく置いた色付きのボールとのつながりも。私はボールには一度もふれていないので、それが自分のものだど気付いているだろう。彼の心が外へ向けら

れ、それらのものへ向けられているのがわかる。暗闇の中でさえ、それらの感情の糸が震えているのを感じることができる。

あの子と一緒に座って彼がゆっくりと外界と接するようになる様子を見ながら、もし自分の意識が彼の身体の中に入り込むことができれば、彼が失った幼少期を取り戻してやる方法がわかるのではないかと想像していると、気付けば私はなぜだか自分自身の幼少期へと立ち返っていることが多くなった。私の幼少期もまた失われていた。いや、拒絶していたと言った方が正しいかもしれないが、どちらにしろ長く忘れ去られていた。私が自分の中の時間を超越した領域に入ってゆくと、そこでは過去が突然甦る。もしくは未だに流れ続けている。帰ってきたのだ。自分のものとは信じられないほど驚きに満ちた新しい意識と出会っている。この経験が自分のものだと認識できるのは、過去の記憶の再現としか思えないほど鮮明であるからに過ぎない。想像がこれほどまでに精神や感覚に訴えるような現実味を帯びているはずがない。

もちろん、男はみな幼かった頃の自分を過去に置いてきている。男性性という新たな自我を見出す過程の一つなのだから。だが私は他の男たちとは比べ物にならないほど過去から距離を取ってしまったように思う。スルモで過ごした単調な日々は大都会の人間としての役割、洗練された詩人としての役割にはあまりにもそぐわず、私は不安と嫌気のあまりその二つをつなげることを諦めてしまった。同じ理由で父の顔を見るのも辛くなってしまった。重要な地位に就くことは叶わなかったが、その埋め合わせには十分なほどの名声を文学で成したあと父は私に失望したままだった。彼は再婚して新たな家庭を持った。そのおかげで私には彼と距離を置く口実ができた。二度の結婚に失敗したあと、私はまるで家族や祖先や社会といった一切の過去を持たずに、神をも恐れぬ想像力で生み出した生き物に満ちたこれまでにない作風の私の処女作を持ってこの世界に突然生まれてきたかのように生きてきた。

そして今、全てが戻ってきた。

特に本当に幼い頃のある夕方の記憶が、最後に感じたのがいつだったか思い出せないほどの愛情を、自分を圧倒するようなこの上ない愛情を伴って戻ってきた。私と兄は眠りにつく前に我が家の女たち、つまり農園の召使たちに預けられて、彼女らの子どもたちと一緒に身体を洗って服を着せてもらっている。私たちと同じ年頃の少年少女で（まだ奴隷として認識し始める前だったので）あの頃は農園やオリーブの茂み、遠くに広がる果樹園と一緒に遊んだものだ。

頭上に梁の伸びる石畳の大きなキッチンにはお湯と石鹼水が用意されていて、おそらくは十以上の子どもたちが水しぶきを浴びせ合ったり、床にできた水たまりで遊んだりして、柔らかな真っ白のタオルを抱えた女たちが私たちを捕まえようとする中、全員が叫び声を上げながら逃げまわっている。私にはその光景が美しさと清潔さの極みのように思える。思い出ただけで心がきれいに洗い流されてゆくようだ。きれいに洗った裸の身体に、

真っ白なタオル、笑いながら濡れた手を伸ばしている女たち。

収穫期には養母と一緒に農舎で寝ることが許された。病弱だった私の母は花粉症からくる頭痛に悩まされていて、自分の部屋にこもったまま一度も出てくることがなかった。父は毎朝農夫たちと一緒に出かけ、溪谷の向こう側まで行かなければならない時はそこで彼らと寝泊まりした。私たちはキッチンの裏にある、藁でできた巨大なベッドと一緒に寝かされ、女たちがローマ神話の神々よりも古くから存在する木の精霊や悪霊たちの話を語るのを聞きながら横になっていた。悪霊たちは家や納屋の隅々、至るところに住み着いて、(食べ物を求めて鼠に化けてやってきた彼らに)パン生地の塊やハーブを与えて鎮めてやらなければならない。ハーブの場所は女たちの中でも最年長で豊富な知識を持った者だけが知っていて、丘の高いところから集めてこなくてはならない。

それは女だけの世界で、私が知ることは二度とない。泡風呂やパン生地の匂い、乳の匂い、年長の女が日光に照らされたテラスの壁にかけてすいている羊の毛の匂い。後ろに広がる田畑には、空を舞う鳥たちが輝いている。朝早く、まだ光も差していないような時間に女たちと子どもたちが一緒になって、橙色の大きなキノコを採りに湿っぽい草原へ散策に出る。私は女たちを観察したものだ。彼女たちはみな裸足で、用を足そうとしゃがむ時はスカートをまくり上げる。顔は真っ直ぐ前を見て、頭の上には藁でできたかごを乗せている。帰り道に刈り取られた畑へ来ると呆れたような顔をして、鳥を追い払うために小麦畑の中央に複数立てられた赤塗りのプリアポス⁸の像に向かって嘲りを込めたお辞儀をする。農園に戻れば、今度は木造の鶏小屋へ行って雌鶏の下から卵を集める。豚にも餌をやらなければ。枝を編んでつくったふるいにかけて穀物のもみを取る作業もある。午後には涼やかなキッチンで黍^{きび}のパンを焼いて、蜂蜜がよく染み込むように藁で穴をあけなくては。夜になって全てが終われば、今度は子どもたちを風呂に入れる。

私は一人の少女に視線を移す。スカートがめくれ上がって足ははだけ、腕は水に濡れて光り、兄のペニスをつかんで浴槽の周りを^{がちょう}鷺鳥のように連れまわしている。それを見た女たちはみな顔をのけぞらせて大声で笑い、子どもたちは手を叩いては水しぶきをあげて、泡をそこから中に飛ばしている。そして私は五十年近くも経った今になって急に、この少女こそ父がベッドを共にしていた相手に違いないと気付いた。彼女は私の兄を、この世界の全てを受け継ぐことになる少年を引っ張り、びしょ濡れのキッチンを歩きまわっている。その間女たちは歯のまばらな口を開け、腹を抱えて笑っている。この上なく楽しい情景である。そしてその中心に立つ私は、おそらくこの頃まではこの情景の持つ神秘を多少なりとも理解していたのだろう。

あれは別世界なのだ。その世界に存在していた自分をふとした瞬間に振り返りながらも、自分がその世界の何ひとつとして理解していなかったことを自覚しているというのは、なんと不思議な感覚だろう。結局私は別の道へ進み、男の世界へ、街へ、地位へと向かっていったのだから。そして兄もまた別の道へ進んだ。死へと向かって。

⁸ プリアポス (Priapus) : ローマ神話に登場する豊穡を司る神。男根をもって表される。

だがそれ以上に不思議なのは、それらが今までずっとふれられないまま、思い出されないまま過去に留まっていたにも関わらず、新鮮なまま輝いていて、その清潔な匂いを感じられるほどの感覚を伴っていることだ。

こうして静寂の中に身を置くと、同じ日付である二人の誕生日の直後、パリリア⁹の最中に起きた兄の死をも思い出す。

私たちはいつも仲が良かったが、気質はまるで違った。というのも真面目な兄は忠誠心というものを何よりも大事にし、それを父へ、我が家の農園へ、家族へと捧げた。彼は農園の境界線となる石垣の石ひとつひとつまで把握していたが、なぜならローマでは家族というものが土地と強く結び付いており、ここは我らペリグニー族が古くから住む地なのだ。これ以上ないほど敬虔な彼を私は慕いそして妬んだが、不真面目な方という役割を早くから確立していた私は自分のやるべきことを察し、彼の敬虔さをからかったものだ。

彼は具合を悪くして数日間横たわり、口もきけない状態だった。まだ十八歳だというのに。家の奥にある部屋で長椅子に座って、寒さに凍えては熱さに焼かれながら汗に濡れて横たわる彼を見ている。私は少しだけでもと読み聞かせをしてやるが、全くこちらに集中できないようだ。水を飲ませてやると、唇の震えが私の手まで伝わってくる。私は涙をこらえ切れず、そんな自分を恥じた。パリリアの日がやってくると、私は夕闇が近付いてくる中で彼の使命を果たすため、彼の代わりを演じるために重たい気持ちのまま表へ出て、庭を横切る間も女たちの視線を感じつつ、既に闇の中でいくつもの炎が燃えているところへ向かって畑の中を進んでいたが、もしこれから行う儀式の最中に一瞬でも兄のようにこの儀式を信じることを自分に許してしまえば、私は彼の役割を奪ってしまい、私が彼の代わりになることを示して（存在などしない）神々を安心させることで、彼を不要なものへと変えてしまうことになるだろう。

黄金色の稲が生える斜面を上る間も私の心は沈んでゆく一方だったが、本当は幼い頃からいつもこの祭りを楽しみにしていて、初めて父の肩に乗せられて行った時に燃え盛る炎やトウモロコシ畑に映る男たちの影が飛び跳ねるのを見てから愛してやまないものだった。

私も我が家の敷地を示す境界線である石垣は全て把握していたが、理由は全く違っていた。私にとって、それは世界が始まる場所だった。その向こうにローマが、そして我々ローマ人が支配する世界がどこまでも続いているのだ。境界線の向こうに、私の知らない世界が広がっているのだ。私の心は冒険に出て、^{げん}験担ぎにすり減った石垣にふれてから暗闇の世界へ繰り出すが、そこには見えない以上は想像するしかない未知の存在があふれている。兄にとっては、この農園こそが彼の魂そのものなのだ。彼という存在を定義する世界の縁で、石

⁹ パリリア (Parilia) : 古代ローマの家畜の守護神パレスに捧げられた祭儀。ロムルスがローマを建国したと言われる四月二日に行われ、家畜を連れて炎の中をくぐることで^{はら}祓い潔め、その繁殖を願った。

は光を放つ。小石を取り除いて階段状に耕した田畑や、木の精霊と同じように中に隠れられるほど大きく育った節だらけのオリーブの老木や、ブドウ畑、蜂の巣、月光に照らされて傾斜の上を流れるようなトウモロコシ。それら全てを、穂先が剥き出しの足をなでるのを感じながら通り過ぎてゆくと、父の待つ畑に辿り着く。

ひと通り終わったのか、父は布で身体を拭いているところだった。彼にキスをする。奴隷の一人が服を脱がす。器から乳をすする。豆の苗と子牛を焼いた灰を手取る。父はローレルの枝を水に浸して、私に向かってしぶきをふりかけた。彼の目からは涙がこぼれている。胸や眉に水がかかる。飛んでくるの小さな粒を浴び、私は目を瞬いた。

畑まで続く道のあちこちに積まれた藁の山が燃えているのを跳び越えてゆかねばならず、私は駆け出し、最初の山を跳び越える。風の一陣が肺の中に入ってくるのを感じ、飛び跳ねること、浄化されて物事とのつながりを持つこと、藁から立ち上る煙、ぼんやりした黄昏、マツの木にいる虫を狙って急降下する夜鷹^{よたか}、自分の足の下から生えてくる若い植物、その全てに喜びを覚えた。何かが起こったのを悟った。そう、信仰というひと粒の穀物が自分の心の中で実ってゆくのを許し、彼を殺したのだ。兄は死んだ。初めの場所まで戻ってきた時の身体中の苦しさに、前屈みになって腰に手を当て必死で息を吸う自分にはっきりと見て取ることができる。その罪悪感は、儀式を終えた私を包むこの輝きの中に感じる事ができた。私が兄を死へと追いやったのだ。人々が投げかける二度目のローレルのシャワーを浴び、そよ風で汗が乾くのを感じながら暗くなりゆく畑を再び駆け抜け始めた時には、既に事が起きたあとだとわかっていた。庭に続く入り口で立ち止まり、嘆き悲しむような声に耳をすませた。そして聞こえてきた。女たちの声が。畑の端に座り込み、暗闇の中で履物を脱ぐ。手足を広げ、髪を垂らして寝転がり、自分がやっていることをなんとなく察した。私は彼が受けるはずだった清めの儀式を拭い去ろうと、一瞬でも自分が抱いた信仰心を償おうとしているのだ。

そうなのだ。我々の日常に深く根ざしたところで、こういったことは起こるのだ。私たちはそのことについては語らない。それどころか自分自身にも嘘をついて隠そうとするが、事実は消えない。我々は故郷である大地をつくり変えてきたにも関わらず、結局は大地に這い戻り、手足に土壌を感じ、口の中に砂利を感じる。私はあの夜に自分の中の何かを封じ込め、土をかけて隠そうとした。今になってその何か再び叫び声を上げている。仲違いをしてから何年も経った今になって、気付けば父ともう一度話をしたいと思っている自分がある。二度と目にする事ができないであろう故郷へと戻る道を見つけ、そして帰ってきたことを伝えたい。ようやく故郷への愛着を受け入れることができた。自分が生まれた場所を知った。

そして他の全ての考えと同じように、この考えが私の心をあの子のもとへと連れ戻した。彼の故郷はどこなのだろう。どんな家柄なのだろう。生まれた時の星座や、頭上にあった惑星、月の満ち欠けはどうだったのだろう。そしてもし彼がそれらを知らないのだとすれば、自分が何者で、どんな運命の下に生まれたのかを知る術はあるのだろうか。

それとも、それらを知らないという状態が彼に自由を与えているのだろうか。

この頃は毎朝、私とあの子はあの子の家の少年や女たちに声の聞かれない広野まで出てきて、ちょっとした勉強をしている。

あの子がいつも持ち運ぶ色付きのボールは一種のお守りになっていて、彼にとっては初めての所有物だった。決して放さないのだ。眠っている間は抱えて丸まっている。食事中はあぐらをかいてできたくぼみに器を抱え、ボールは膝の間に挟んで、私が使い方を教えたスプーンをぎこちなく、それでもなんとかようやく使っている。一緒に外を歩いている時は左手に持っている。

集落の人間と出会いそうな場所は避けている。例えば女たちは水辺で石に打ちつけて洗った服をいばらにかけて乾かし、男たちは外壁で囲われた集落の一番はずれにある、わずかながらオーツ麦のとれる小さな田畑まで鋤を付けた牛を駆り立てる。西に広がる小さな木立は女たちにとって聖域となっており、月の満ち欠けに応じて彼女たちが犬の内臓をヘカテー¹⁰に捧げているため、そこも避ける。

そうなるかとあとは川まで広がる沼だらけの土地しか残されていない。

私たちは履物を脱いでから（といっても少年は裸足であり、緩いローブ以外は何も身に着けていないうえに、集落から離れるとすぐにそれも引きちぎってしまうのだが）イグサの生える沼をかき分けて、低木といくらかのカラス麦が生い茂る草深い小島へと向かう。そしてそこで毎朝、沼地の鳥がどこかで甲高い声でお互い呼び合ったり湿った空に向かってゆっくりと飛び上がっていったり、蛙が単調な鳴き声を上げる中で、私たちは練習にとりかかる。

私はあの子に言葉を教えているのだ。

一筋縄ではいかない。しばらく前に一緒に散策に出た際に、どんな鳥や動物を見かけても彼はその声を真似することができることに気付いた。しかも、時おり雲のすぐ下の高いところを舞っている大きな鷹を真似して口笛を吹けること、子どもの頃いたスルモでは神聖な霊とされていた啄木鳥^{きつつき}を真似して木の幹に向かって「コツコツ」という音を発せられること、彼はそれらを私に自慢できるのが嬉しくて仕方がない様子だった。彼は足を広げて立ち、腰に手を当て、頭を太陽に向けて反らし、唇を尖らせて、全身の部位を自分が真似している鳥の嘴^{くちばし}やとさか、肉垂^{にくすい}に似せて、それらと全くもって同じ声を発し、そして確かに、彼らの言語という神秘的な領域に入ってゆくことで、その瞬間彼らそのものになり、不思議なことに私の目には彼の姿が変化したかのように見える。

震え声や笛のような音を出すために、時に彼は自分の手を楽器のように使う。握った手の中に息を吹き込んで指を動かすのだ。そうでない時は高く鮮明な大声がただ口から流れ出てきたり、囁くようなさえずりが喉の奥から聞こえてきたりするが、突然彼の身体から金属が軋むような甲高い音が生じることもあり、あまりにも近いところから聞こえるので驚い

¹⁰ ヘカテー (Hecate) : ギリシャ神話で天界、冥界、下界を支配する女神。三つの顔と体を持つとされる。

てしまう。鳩、鳥、水辺の鳥や、地平線の向こうの想像もつかない所から飛んできた渡り鳥。まるでそれらの様々な鳥が彼の中に住んでいて、唇の間から出る息に乗って外へ出てくるかのようだ。まるで平原を超える鳥たちの謎めいた渡りについていき、餌を求めて飛び込む鳥たちと共に川底へ潜ったことがあるかのようで、私の想像力が追い付かないほど空高く、その鳴き声がどんな響きなのか知ることもできない星空の中まで共に昇ったことがあるかのようだ。

彼がそれらの音、そして蛙や蟬や兎などの泣き声、狼の低い遠吠えや恐ろしい唸り声などの様々な音を出す様子を観察していると、どう教えれば彼が話せるようになるかもしれないかがようやく少しわかった。

真似する動物の声によって、彼の顔全体が異なったかたちをとる。蛙であれ鷹であれ狼であれ、何かひとつの言葉だけを常に話していれば、彼の喉やあごの筋肉はその音に適したかたちになるだろう。生き物と彼らの出す音はそれほど深く関係していて、一体となっていると言ってもよいほどだ。ならば、彼は人間特有の発声器官を通して会話する方法を学ばなければならないことになる。もしも私がそのかたちを彼に理解させることができれば、使い方は自分で見出すだろう。

なので、真似してほしい音を私が出しても彼が自分の口から出すのにかなり苦労する時は、私の喉に彼の指を当ててその震えを感じさせたり、唇に当ててそのかたちや息の出し方を理解させたりする。ひとつまたひとつと、私たちは徐々に彼の中から人間の言葉を引き出すのに成功し始めた。彼は喜んでこの遊びに挑戦している。他の動物と同じように私の真似もできることをしきりに見せたがる様子は子どもそのものだ。私の唇に指先を当て、眉間にしわを寄せながら私の声を聞き、自分の口でも同じ動きをできるようになり、ほとんど完璧な音が出せるようになった。私の喉から手を放して自分の喉に当て、ようやく同じ震えを感じることができると陽気に笑って音に耳をすませる。初めは仰天し、まるでその音がどこから来たのかもわからないようで、つぎに歓喜し、喜びに酔いしれて同じ音を何度も何度も繰り返し発して、合間合間に小さく喜びの声を上げる。

私は彼を理解し始めていた。鳥を真似する時に彼がやっているのは、私たちがやるように外界にあるものを複製して、耳のよさや発音器官の柔軟さを発揮しているのではない。彼はその鳥になり切っているのだ。鳥が彼を通して話しているのだ。つまり、人間の音を学ぶことで彼は自分を人につくり変えているのだ。言葉こそが重要なのだ。自分が何者なのかを彼が理解するきっかけを見つけたのだ。震えを伴う音を出すことで彼は自分の喉を知った。鼻孔から音を出すことで彼は自分に鼻があることに気付く、その奥に音が反響する空洞があることに気付いた。そうやって唇、舌、歯を見つけていった。私たちが持つ音域を一から全て築き上げる中で、彼は自分の頭の中で頭というもののイメージを築き、私の喉やあご、唇に指先を当てながら自分が私と同じつくりであること、自分が人であることを何度も何度も確認した。

だが彼が想像の中で創り上げているのは、一体どんな頭なのだろうか。

結局のところ、私が導いた先に彼が想像して生まれ変わるものとは何なのだろうか。

そして全ての音声を身に付けた今、私はどの言語を教えるべきなのだろうか。

同時に、私たちは単純な手作業の練習も進めている。例のボールを使って投げ方と取り方を教えた。彼はこういった動作を素早く身に付け、私が彼ほど鋭敏な目も安定した手足も持っていないことに気付くと、私を出し抜くようになった。槍投げを教え、針を使った縫い物を教えた。彼はペンを安定して持ち、それで印を書けるようひとりで練習した。一番予想外だったのは、彼が笑顔を覚えたことだ。私がボールを追ってたどどしく駆け回るのを見て笑うだけでなく、私たちがやるように目的も理由もない気分の高揚から来る、自分の魂から来る微笑みだ。散策の際には彼は教師の役割も演じてみせ、草むらの中の足跡を指さして、その足跡の主がどんな鳥や獣なのかを身体の動きや音の真似で説明してみせた。腐った丸太の下に幼虫やさなぎを見つけると、自分の手を使ってそれがどうやって蛾になるのかを説明し、その変態の過程を踊りのようなもので表現してみせた。

彼にとってこの世の全ては生きているのだ。彼が知識を引き出す場所、今までに観察して記憶に留めてきたものがそのまま残された図書館のようなもので、彼には解読できる象形文字からなる言語なのだ。散策する時に彼が私を案内しているのは、彼の意識そのものなのだ。それは私たちの周りに見え隠れしている。それは湿地であり、茂みであり、丸太であり、枝である。千もの移ろいゆくかたちで埋め尽くされており、それらは金切り声を上げ、歌い、震え、羽音を立てる。そして彼の心の中ではこれらこそが詩であり、千もの神々とその寓話や、修辞法、法則、科学的事実や歴史的事実、哲学者の理論と共に私が記憶している詩の数々と同じように聞こえるのだろう。唯一の違いは、彼の詩は歩きまわられる実際の世界であり、天候や季節が存在し、生命の循環が存在することだ。彼が自分の意識の中に私を招き入れると、私はそれを足元だけでなく全身で感じる。一体どうすれば彼を私の意識の中に招き入れることができるだろう。

ひとつの結論に達した。あの子に教えるべきなのは私が共に過ごすようになった人々の言語であり、私の母語ではない。それを決めたことでもうひとつ別の決心をしたことも理解している。私がローマへ帰ることは二度とない。

私は間違いなく妻と弁護士に手紙を書き続けるだろう。それどころかアウグストゥス帝にも手紙を送り、私の罪を赦して呼び戻してくれるよう頼み続けるだろう。なぜなら、私の表向きの人生においてはそれこそ私に期待されていることで、私は終幕までこの役を演じ続けなければならないからだ。だがもう一方の人生の私は、もし私を呼び戻す手紙が来たとしても帰ることはないとわかっている。この数週間で、この地こそ私が探し求めていた真の目的地であることに気が付き始めており、そしてどれほど苦しくても、ここでの私の生活こそが真の運命であり、その運命から逃れるために自分の存在全てをにかけてきたことを察している。神のお告げが来ても、我々はほとんど気付かないものだ。それはこう宣言するのだ。

「これがお前が放り出そうとしていた人生だ。二度目の機会をやろう。百もの偽りの役割を、

百もの偽りの身分を生み出すことで振り払おうとした運命だ。初めのうちは災難に思えるだろうが、その仮面の下にはとてつもない幸運が隠れているだろう。運命もまた百もの手段でお前の現実逃避を終わらせることができるのだから。これでようやく、お前はなるべきものになるのだ。」

そして、長年の間心の中ではわかっていたことを自分自身に認めた。私は今やこの地の人間なのだ。この地は私の居場所となった。私は自分の本質に辿り着きつつある。

この全ての始まりが何だったのかは謎のままだ。おそらくは私たちの夢だったのだろう。心の外に閉め出していた何か別の存在、口にする 것도 憚られたその考えが覚醒し、私たちの中で活動し始めたのだ。隠されていた人生の全てが奔流となって意識に流れ込んでくる。そして私の幼少期が戻ってき始めたのだ。今まで記憶していたものとは違い、もっと鮮明で、本当に経験した通りのままで。だからこそ、今思い返す私の過去は驚きの連続なのだ。まるで他の誰かに起きたことであるかのような新しい過去を手渡され、それを追体験することで今の私は古い身体から抜け出して新しい別の何かに生まれ変わっているようだ。

あの子との練習の中でもそうだ。私が知っているものを表現しようとした瞬間、それまで知らなかったものにぶつかるのだ。私の方が彼から教わっているのだという感覚に強く囚われることがよくある。そして、この場で出会った新しいものは全て私の中からゆっくりと痛みを伴って引き出されているのだと。

私とあの子は反対の方向へと進んでいるが、それは同じ道なのだ。彼はまだ、自分を取り囲む宇宙から個という存在を見出せていない。彼という存在は自己の外にあって、生活を共にする獣や鳥、そして木の葉や水、草、雲や雷と生命力を分け合っている。彼がそれらの中に自分を落ち着かせられるのは、それらのひとつひとつが彼の精神の欠片を含んでいるからなのだ。彼には他者という概念がない。

私も彼が持つ世界に対する意識に、私に対する意識に入り込もうと努力してみたが、上手くいかない。私の心が彼を取り込めないのだ。犬座、大熊座、竜座など、全ての星座を空に思い浮かべ、それらを私自身の延長線上、自分が次に変化する存在として認識しようとする。だがそれが空であること、星々には名前や逸話があることを知っているため、私は空になり切ることができない。雨が降れば、私は「雨が降っている」と言う。雷が落ちれば、私は「雷が落ちている」と言う。あの子は違う。彼はこう考えているに違いない。「私が降っている。」
「私が落ちている。」すると私は急に混乱に陥り、他とは違う自分という個の魂を失い、自分の小指からその最後のひと欠片がこぼれ落ち、物事の多様性の中に自分を見失って二度と戻ってこられないかのように感じる。

だがそうならなくてはいけないのだ。私はゆっくりと最後の変身を遂げつつある。私は古い自分の存在を追い出して宇宙を取り込まなければならない。生き物たちは、少しずつ戻ってくるだろう。姿を変えた神ではなく、彼らそのものとして。嘴を持ち、毛が生え、牙があり、かぎ爪があり、蹄があり、鼻が突き出ている、そんな彼らが我々の中に留まり、我々の

意識の奥深くに再びその命を吹き込むだろう。その次にやってくるのは植物だ。もちろん彼らそのものとして。次に我々が取り込むべきは湖であり、川であり、地球に広がる海や平原であり、ところどころ雪に覆われた岩山の林だ。そして少しずつ、あの大空がやってくる。全てのものが持つ精神が再び我々の中に移り住む。我々はこの世の全てになる。

その時になってようやく、我々は人間としての本来の肉体を思い描くことができる。

こうして毎日、音を組み合わせる人間が使う言葉を生み出せるようあの子に教えて、鳥や獣の音を生み出せるようにあの子から教わっている。

初めのうちは、彼を喜ばせるためにやってあげた遊びに過ぎなかった。自分というものに対する意識の強さ、私のごこちない挑戦が彼を笑わせ、そして彼の中の子どもらしさが急に外に出てくるのを見て私は嬉しくなる。そして私たちが同じ遊びを楽しんでいるという感覚のおかげで、長く困難な道のりでも彼は投げ出さずに済んでいる。

だが実際には、彼の方が辛抱強く教えてくれる。彼は私が真似しようとしている鳥を見せてくれる。震える鳥を私の手の中に預けてくれる。彼がどういうつもりなのかはわかる。その命と自分を重ね合わせて想像してみろというのだ。小さくて柔らかな生き物の温もりが私の中に流れ込んでくるにつれて、私は人間としての心をしまい込んで嘴を生やし、自身の肉体の重さに抵抗して外へと飛び立とうとし、濡れた草原から雲へと向かって舞い上がるのがどんな感覚なのかを想像してみる。馴染みのない音が、小鳥のさえずりのような音が私の喉から聞こえてくる。あの子は手を握りしめてから、自分でも同じ音を出してみせる。私を応援し、鳥という存在を示す素朴な音階へと一歩近づけてくれる。

それは事実として起こっているのだ。私は日々、鳥という個体に近づいている。かつて、ここへ来たばかりで孤独を感じていた頃、私は蜘蛛の言葉で作品を書くことを考えた。そして今あの子に導かれて、私はそれを果たしつつあるのだ。今はわかる。真の言語とは、森の中で見た夢であの子と私が最初に交わした無言の言語なのだ。それは幼少期に私たちが使っていた言語であり、ぼんやりとして聞き取れない不思議な会話の記憶が睡眠と覚醒の狭間で甦り、今にも私の舌に戻ってこようとしているこの言語はきっとこの宇宙の神秘を解き明かしてみせてくれるだろう。今にして思えば私が追放されたのは宇宙からだっただけだ。私を取り上げられたのはラテン語よりも原始的で普遍的な言語であり、間違いなく繊細な言語だったのだ。ラテン語は区別するための言語で、全てが事細かに定義されて分けられている。私が今説明している言語は、ほぼ習得できているといってもよいこの言語は、その音節のひとつひとつが調和のためにあるのだ。かつて我々はみなその言語を知っていた。私も幼少期に話していた。我々はもう一度それを取り戻さなければならない。

新しい季節が近づいてきた。この頃はもはや例の沼地の小島へ出かけるためには寒さに備えて着込まなければならないが、既に一ヵ月もの間絶え間なく北風が吹いているというのにあの子は未だに裸で出歩いている、寒さも風も全く気にしている様子がない。暗闇が木立を越えてやってくる時間は日に日に早くなっている。外の明かりはくすんでいる。私たち

の散策に付き合っていた鳥たちも群れを成して飛んで行ってしまった。彼らの数は日に日に減ってゆき、夕暮れ時に平原の湿った景色を抜ける道に戻っていると、南下する鷺鳥の群れが波となって空を打ち、上空を独特の鳴き声で満たすのが聞こえる。獣たちは地中に潜って眠ってしまった。心なしかあの子も鈍くなってきたようで、私は遂に彼の越冬術の秘密を知ることになるのではないかと半ば期待している。朝目を覚ますと彼が獣と同じように深い眠りにについているのを見つける日が来るだろう。連れ帰ってから最初の三日間は眠り続けていたように。

一方、集落は皆へと姿を変え始めていた。男たちは集団で外へ出て外壁を直している。今季最後の作物は刈り入れられて穀物庫にしまわれた。夏の間は開け放たれていた空の牛舎も食糧で満たされ、数週間のうちに家畜も連れてこられるだろう。雄牛、雌牛、驢馬、それに山羊が私たちの寝る部屋の下に入れられ、朝そこへ下りると暗がりの中に彼らの生温かい息が感じられ、尿の臭いが漂い、鼻を突っ込んで餌を食べる音が聞こえてくるだろう。四角く切った泥炭が庭に積み上げられる。男たちや半裸の子どもたちに怒鳴られ、鞭打たれ、雄牛は泥炭を積んだ荷車を引いてぬかるんだ泥道を上っている。閉じこもる準備が進められている。川が凍れば再び現れるに違いない北の馬乗りたちから、そして狼たちから身を守るために。私たちひとりひとりの心の中にあるのは、自身の中に入ってゆく感覚、やってくる寒さから逃れ、自分の身体の中にある明るさと温かさを求めて潜ってゆく感覚である。つまりは自分の奥深くにある自我まで潜ってゆく感覚だが、その自我は冬の間強いられる互いの密着した生活の中でも切り離されていなければならず、それは始めに集落が、そして家が閉ざされて、外壁での仕事の時間を除けば昼も夜も同じように過ごし、牛舎の上の大きな部屋で泥炭の炎を焚いてくるまっている間も変わらない。ここでの冬は長い間くすぶり続ける怒りの季節であり、疑いの季節であり、年の暮れが近づくにつれて寒さが私たちを近づけつつも同時に切り離してしまう日々の中で膨らんでゆく妄想の季節なのである。

私が何より不安なのはあの子のことである。今までは夏の間私に与えられた小屋で家族から離れて過ごしていて、あばら屋の寝室と隣り合わせなので完全に切り離されているわけではないものの、好きな時に出かけられて、この狭い空間が許す限りではあるが他の者を避けて生活することができていた。ここ数週間でどれだけ自分を隔離していたか、いかに自分があの子との生活を自分の世界の全てにしてしまっていたかに気付いた。それも全て終わろうとしている。私の慎ましい小屋は蜘蛛たちに明け渡さなければならない。雪が降り始めて一週間もすれば完全に埋もれてしまうだろう。みながひと部屋にまとめられている状況を、どうすればあの子はやり過ごせるだろうか。女たちは、そして少年は彼を受け入れるだろうか。

この不安をライザックに伝えたのは、夕日が差し込む庭に座って、この集落では一般的な木の盤とピンを使ったゲームの最中だった。

彼が勝っていたのはいつものことで、彼はずんぐりした人差し指で垂れた口元やひげをなでながら嬉しそうな表情をしないように気を付けていたが、実際のところ私には彼を悩

ませるほどの才能はなかった。彼は存在しない難問を解くふりをして、私に向かって指を振り、ようやく自分の手を進める。

「いやいや、友よ。信じてくれていい。私の家族はあの少年を困らせはしないさ。」

だが私には信じ切ることができなかった。彼の族長としての地位や、その身にまとう目には見えない権威にもかかわらず、ライザックの集落に対する支配力は私を安心させられるほどのものではなく、家庭に対するそれも同じだった。しきたりの中に確固として存在する彼の男としての特権の裏には、女たちの怪しい力があるように思える。母親である老婆は特に、彼に対する奇妙な支配力を持っている。彼女に対して、彼は怒鳴りもするし何度か手を上げるのを見たこともある。だが彼の精神が彼女の精神を前に怖気づいてしまうのを感じることができる。表だっては信仰されない世界の悪霊、彼女がこっそりと囁きかけて月明りの下で生け贄を捧げている古代の霊たちがこの世界でも強力な存在であることを、ライザックは知っているのだ。彼が老婆の魔術を恐れるのは、シャーマンを恐れているのと同じ理由からなのだ。彼が使える武器は肉体的な強さと、（こんなものではあれ）法の権力だけである。

老婆は敵意と疑念を示したままだ。私たちの分の食事を器に注ぐ際に彼女の唇が動くのを見ていても、彼女が単純に独り言を言っているのか何らかの呪文を唱えているのか判断できない。彼女が魔術の使い手なのは集落でもかなり有名で、莓状血管腫¹¹や口唇裂、難産の問題で彼女に相談したいという女たちが来ない日は滅多にない。それどころか、若い男が人目を忍んでやってきたものの、女たちの魔術という危険な世界に屈する決心ができずに門の前でまごついているのを一度ならず見たこともある。惚れ薬なのか、べと病¹²や子羊の突然死を避ける祈祷なのかはわからないが、その類のものを求めていたのは明らかだ。私たちが例の小島へ出かけると、彼女がヨモギの茂みでハーブを集めているところや、獣でも人間でもない何か草原に残した、環状の跡の中でお告げを受け取っているところを見かけることがたまにある。彼女が私を見張っているのはわかっている。思うに、（彼女にとっては詩人がそういうものなのか）私のことを自分と敵対する魔術師で、あの子を操って彼女が知らないより強力な魔術を引き出そうとしていると信じているのだ。彼女がかゆに向かって呟いている言葉は穀物から滋養分を抜き出すための歌で、私たちの精神が栄養を得られないようにしているのだ。だが自分の息子のことを警戒し過ぎるあまり私たちに直接魔術をかけることができないでいるのだ。

この件における彼女の味方は少年ルロである。彼は嫉妬しているのだ。私の生徒としての立場を追われた彼に、何度か授業を再開しようと申し出たにも関わらず。彼は私に近づくことすら拒み、私が教えようとしたラテン語や簡単な数学に意味がないことを声高に宣言している。

¹¹ 莓状血管腫 (strawberry mark) : 皮膚の表面や内部にできる「赤あざ」の一種。乳児に起きる。

¹² ベと病 (mildew) : 菌類の寄生によって植物にかびが発生して枯れてしまう病気。

老人は遺憾に思っているようだ。彼は自分の孫にそういった教養を身に付けてほしいのだが、プライドのためか自身の教養のなさを引き合いに出すことはできないらしい。革のようなつくりの顔をすぼめて道化めいた謝罪の表情を示し、自分の威厳もかなぐり捨てて、直接口にすることなく少年の無礼を詫びて彼の抱える悩みもわかってほしいと訴える。彼は無骨だと叱ってルロの横顔を叩く。だが手加減はしていて、無骨な自分を選ぶことが部族に対して忠実であり、さらには粗野ではありながら無骨ではない祖父に対して忠実であることだと仄めかしている。少年はその意図を理解した上で叩かれて、高慢な笑みを私に向けて、これ見よがしに歩き去ってゆく。

ライザックは頭を振り、しかめ面をして、お手上げだと示してみせる。見事勝利を収めた老婆は喜びの金切り声を上げて、足早に去ってハーブを湯に浸す準備するが、そうしてつくった茶をあまりにも横柄で大げさな恭しさを装って注ぐので、ライザックはそれを飲むことができず、器を中身ごと庭に放り投げてしまう。

気立てのよい少年の母親だけが、全面的に私を敵視できずにいる。彼女はいつも私の事を男性的な強さに欠ける、甘やかしてやらねばならない弱者のように思ってきた。彼女のおどけた愛情は私がここに来たばかりの頃から変わっておらず、彼女は自分が仕分けている種の名前を教えてくれた。そして彼女は老婆を恐れているため、私が姑にとってやっかいな存在であることを喜んでいる。私が育てている植物のために水を運んでくれるのは彼女だ。思うにこの行為は、この家庭での居心地の悪さに耐えてきた人間が、自分に似た者を見つけた時のささやかな反抗なのだろう。

遠くの集落からやってきた彼女は、ここの者たちとは部族が異なる。彼女が持つこの家庭とのつながりは、夫が死んだ今となっては息子を通してしか存在しない。それよりはむしろ、ライザックが不思議なほど彼女を気に入っているからだろうか。老婆は間違いなく彼のこの点も非難しており、この社会を弱める生ぬるさの一つと受け取っている。

おそらくは嫁も同様の弱さを持ち合わせているからこそ、自身の恐怖や老婆の警告を無視して、彼女は作業に熱中するあの子にふれることができるのだろう。優しく、そしてたった一瞬だけ、好奇心ゆえか愛情からか、それとも彼の中に隠された何らかの力にふれたいという衝動ゆえか、彼女は彼の頭をなで、彼がその手を感じた瞬間にはもう立ち去っている。たった一瞬ではあるが、その瞬間の彼らの表情は筆舌に尽くしがたい何かを示している。

私が言いたいのは、ここでの生活は外界から隔絶されてもなお緊張に包まれているということだ。そしてまだ冬は始まったばかりだ。

今日は一日中、空気があの独特の静けさをまとっていて、病的な緑がかった空の色は雪が降ることを告げていた。海の上には巨大な雲の塊が立ち込めている。家畜は既に屋内に移されたが、仕切りの中で足を踏み鳴らして白い息を吐き出し、暗闇の中で落ち着きを失っている。あの子もまた練習に集中できなくなってきた。この年頃の少年なら誰でもそうだが、彼は扱いが難しく、私の注意を逸らすための言い訳を挙げさせればきりが無い。沼に浮かぶ

翡翠^{かおせみ}の羽根、丸太の上でのたうつ幼虫。だが今日は違った。体中の筋肉が強張り、警戒して、まるで背後で草を踏む足音を聞いたかのようなのだ。ひとつのことに集中できず、二度ほど痲癢を起し、私の手を振り払っては頭を振り回し、彼が今耳をすませて捕らえなければいけない言語を私の教えようとしている言語が邪魔しているかのような様子だった。

彼はよくこうやって天候と調子を合わせてその変化を悟ることがある。風がやってきて海の水面を揺らしたり沼地の雑草を持ち上げたりする何時間も前から、その変化を嗅ぎ取ることができる。時に彼は庭で急に背筋を伸ばして座り、まるで近付いてくる何かに気付いたかのように頭を上げ、吹き始めた冷たい一陣の風に揺られて草の葉がなびき始めるのや、遙か北の彼方で雷が光り始めるのを察知するのだ。

だが今日彼が感じ取っているのは雪で、それは私たちが三週間近くも前から予期していたことだった。砦では最終準備が進められている。灰色の平坦な土地に、弦が弾かれたかのように無音のざわつきが広がっている。全てのものが同調してかすかな音を立てている。

真夜中と明け方の間の時間に部屋に差す奇妙な明かりに目が覚める。脈打つようなその不自然な青さは、月明りとは全く異なる。あばら屋につながる戸は開いていて、あの子はいつもいるはずの部屋の隅にいない。私は飛び起きたものの、恐怖で動けなくなっていた。

だが彼は逃げてはいなかった。何時間も降り続けていたに違いない山と積もった雪が照り返す眩い光を浴びながら、彼は裸で庭に立ち尽くし（他の者がみな毛皮にくるまって寝ている今になっても裸で寝ている）、どうやらそのまま眠っているように見える。彼が見せている心ここにあらずといった恍惚の表情は夢遊病者特有のもので、彼らは廊下や階段ですれ違ってどこか手の届かないところにいて、壁ではない何かによってこの世界とは隔てられたどこかに同時に存在している世界で生きているかのようなのだ。彼が微動だにせずに見上げている天は、眩いほどの青色で、夜の色でも昼の色でもなく、それはどこまでも澄んでいて、どこまでも清らかで、何も混ざっていない、いつまでも心に残るような青さだった。

彼はそのまま立ち尽くし、雪から跳ね返る光を浴びながら、寒さにも動じず一時間近くもそうしていた。彼を起こす勇気はなかった。そして夜明けの光が辺りを照らし始めると、彼は口を開き、顔、肩、胸と順にこすって、顔を上げたまま腕を前に差し出して、降り注ぐ光を全身で直接受け止めようにした。

彼の邪魔をするのを恐れて動くことができず、同じように寒さの中で立ち尽くしていた私は、おそらくは足をずらしたときに小さな音を立ててしまった。

こちらを振り返った彼は目を覚ましていた。微笑みを浮かべる。歓喜の声を上げる。雪の中で跳ねまわり始め、両手いっぱいにくっっては振りまいた。この寒さに気が付いていないようだ。身体の色は変わらず、手足はかじかんでいない。手の中に雪を握ってたどたどしく駆け寄ってきた時、私には彼が発している温もりや輝きを感じられ、まるでかまどのようだった。彼が私に雪を見せる様子は、まるでそれが彼の世界からやってきたもので、私が見たことがないかと思ったかのようなのだ。

だが部屋に連れ帰ろうとすると、彼は拒んだ。あんなにも激しく抵抗するところを見たことはなかった。無理にでもそうしようとしたのが間違いだったのか、彼は私に詰め寄り、唾を吐いて外套を引き裂くと、外壁のところまで走って行ってよじ登ろうと引っかいた。なだめようとするとは彼は私を放り飛ばして唸り声を上げ始めた。森にいた頃の唸り声と同じだ。彼は動物のように壁を引っかきながら唸り、私が近づく度に唾を吐いて、歯を剥き出しにして獣のようにつめを尖らせた。私の後ろには、女たちがいた。ライザックもいて、警戒していた。眠たげだった少年は、老人の聞かせる物語が突然現実になったのかと目を見開いている。

今にも泣き出してしまいそうだ。どうにもできない。ライザックと共に、あの子が疲れ果てるのを待った。遂に壁にもたれた彼のつめは血まみれで、私の心は同情でいっぱいになり、そして突然の罪悪感に襲われた。それでも私は彼にふれることができなかった。今まで何週間もあの子のために立てた計画に従ってきたが、彼のことを自分が望み続けた生き物、夢で見た存在としてしか捉えていなかった。だが今、雪の上にひざまずき、唸り、自分の顔につめを立てる彼を見て、私は彼の孤独感を垣間見て恐ろしくなった。彼を苦しめる痛みも、その叫び声が示す深い喪失感も欠乏感も全く窺^{うかが}い知ることができない。ようやく唸り声が収まって子どものような弱々しい泣き声になると、私たちは彼を寝床まで連れてゆき、戸を閉めて暗くしたまま二人で一緒に横になっていると、彼は泣き疲れて眠った。

翌朝には夜の出来事を一切覚えていないようだった。私が藁布団を片付け、書きものの道具や剃刀や器をしまい、牛舎の上の大部屋に移るために私の、いや私たちの部屋をひと冬の間空ける準備をしているのを、彼はいつもの隅から見つめていた。私は彼を置いてゆくわけではないことを身振り手振りで伝え、自分の物をまとめるよう促した。身に着けようとしないう粗末なローブと、色付きのボールだ。だがもうろうとしているようだ。彼が見ている前で、私は部屋を片付け、蜘蛛たちに別れを告げ、戸を閉ざした。その週の終わりには私たちの小屋は雪に埋もれ、後になって凍ってしまうと屋根を破らない限りは中へ入ることはできなくなる。

ゆっくりと、全ての持ち物を手にして牛舎と上の部屋をつなぐ梯子を上がってゆく。

IV

冬眠のような生活が始まる。

ここへやってきて今年で五年だが、未だになじむことができない。明けても暮れても目の前に広がるのはいつもと変わらず灰色がかった光の差す沼地であり、雪が降っては凍り付き、また降り始め、大草原から吹く風はやむことがない。床下でくすぶる泥炭の煙のせいで、部屋の空気は淀んでいる。風から身を守るために、窓という窓はほとんどの時間かんぬきを通されたままだ。世界が凍り付いたかのような異様に穏やかな日には窓を開けるが、そんな日は空が凍るような青さを見せて、息を止めた世界が青色や金色、白色に輝き、まるで突然全く新しい土地にやってきたのかと思ってしまう。それ以外の日は暗がりの中で丸くなり、甲高い音を立てながらひさしに吹きつける風の音や、その風で雪が落ちた時の重々しい音を聞いている。木製のよろい戸が激しく揺れて氷柱が音を立てるのを聞きながら、隙間から入り込んできた風が巻き上げる、室内に充満した煙から身を守っている。私は小さくなりつつあるろうそくを頼りにこれらを書いており、突然の風で吹き消されないように何度も何度も手で覆ってやらねばならない。かなりの時間を睡眠に費やしている。原因はこの空気の重さかもしれないし、異常なまでの寒さで血の流れが遅くなっているのかもしれないし、それとも単純に退屈なだけかもしれないが、いずれにせよ気付けば私は日中でもうとうととしていて、四六時中もやがかかっているようで頭が働かない。一体一日のうちどれだけの時間を、半ば眠ったような、夢うつつの状態で過ごしているのだろうか。十二時間か、それとも十五時間か。

さしたる違いもない日々が過ぎ去ってゆき、忘却の彼方へ消えてゆく。昼も夜も同じだ。一週間で過ぎてゆき、三週間となり、五週間に。木の枝に印を刻むか羊皮紙に記していなければ、別の一日がやってきたことも過ぎていったこともほとんど気付かない。

私の場合は、見張りの番を何度こなしたかで週を計算している。私は五日に一晚表へ出て四時間の見張りにつく。外壁の尖った先端のすぐ下を走る通路を行き来するのは、私の他に二十人ほどだ。澄んだ夜には美しい景色が見えることもある。空高く雲の合間に月が見え、青みがかった河岸平野には濃い影が走り、のどかな風景が見渡す限り続き、その先にはあの川が見える。見張りをしている時には雪の上を狼が群れを成して動きまわっているのが見え、辺りが静まっていれば遠吠えも聞こえる。狼が一匹外壁のすぐ近くまでやってくることもあれば、群れで現れたことも二度ほどある。彼らが月光に照らされた牙を見せて悲痛な遠吠えで空気を満たすのは、集落の小屋にいる家畜たちを嗅ぎつけているからで、反対に雄牛や驢馬はその遠吠えを聞いて不安げな鳴き声を上げる。だが大抵の夜は海のように辺りを包む霧の中を往復するだけで、片手を突き出して狭い通路を動く私たちの姿はまるで盲目にでもなったかのようなのだ。この四時間もまた一種の眠りのようなものだ。目を引くものもなく、音は全て弱々しい。灰色で夢の訪れないこの眠りは膝を痛めつけて頭を締めつけ、本物の眠りに落ちないように我慢することはこの上なく難しい。凍った泥の中に十メートル以上も深く埋まってしまいそうな気分になる。

一方であの子は何事にも関心を示さなくなり、何時間もただ暗がりを見つめて座ったままになっている。両足を抱えてその中に顔をうずめている。時おり俊敏さを取り戻すこともあり、静けさのあとに巻き上がる風に勢いよく顔を上げたり、雪雲が頭上に現れると急ににおいを嗅いだりする。そして窓を開けられるほど天候が静まると、彼は喜びのあまり気がふれたかのようになり、窓際にかかとだけで立って身体を揺らし、自由になった子犬のような哀れな声を出す。だが霧や雪、過酷な寒さによって閉じ込められる時間が続くと、彼はまたあの憂鬱な状態に戻ってしまい、何が起きても彼を引き戻すことはできなくなる。目の前に食事が用意されればそれを口にする。だが彼はもうふたりの言葉の遊びにも関心を示さなくなり、私たちが覚えたことのほとんどを忘れてしまうのではないかと不安になる。一度、彼が教えてくれた音の一つを出して興味を引こうとしたが、彼は恐ろしく動揺してしまった。私の無意味な鳥の鳴き真似は、三ヶ月以上も目にすることができていない沼地を彼に思い出させただけで、そしてその時になって、なぜもうそこには行かないのか、なぜ私たちの遊びが終わってしまったのかを彼が理解していないこと、理解できないことに私は気付いたのだ。私が彼を罰していると思っているのだろうか。

ある澄んだ夜、窓を開けると彼が飛び出そうとしたので窓際で彼とつかみ合いをせざるをえず、彼は動物的で耳障りな叫び声を発して足をばたつかせた。その声を聞いた老婆はまたしても彼が子どものふりをした獣であり、なんとかして私たちに取り入れたのだという思いを強くした。

彼女はことあるごとにあの子を見張っている。思うに、彼が何らかの道具にふれることで持ち主である自分たちに対して支配力を持つことを恐れているのではないか。確かに、何時間もただ座って虚空を見つめるだけの彼は、全くもって普通の子どもには見えない。そして彼が喉の奥で唸り声を上げる時、子犬のように鳴く時、痛みのあまり小さく吠え立てる時など、私できえ何らかの動物の霊が時おり彼の中に戻ってきているのではないかと疑ってしまう。冬の森で彼を生かしていた動物の霊が、彼は生き延びた。今回も生き延びることができるだろうか。私が見ている前で彼は日に日にどこか遠く、目には見えないねぐらへと去ってゆき、そこでまどろんでいる彼の精神を呼び覚ますことはできない。

あの子を見れば、何をしているのかははっきりわかる。冬の森林にいる自分を夢想しているのだ。カバの木が生えた柔らかな雪の上を移動して、木の皮を噛みながらコケをむしろうとしゃがみ込む姿が束の間だけ見える。私が肩にふれても、彼は何も感じない。黒い両目はひどく落ちくぼみ、視線は私をすり抜けて、風が吹き輝く氷の大地を見据えている。彼が急に反応を示していたのは天候の変化ではなく、あれは心の中で彼が旅をしている風景の変化に対する反応だったのだ。もし春にもう一度彼を見つけ出すことができるのなら、自由にやらせよう。だがそれは不可能だ。彼をここに連れてきてしまった以上、後戻りはできない。既に、室内の温かさのせいで彼は寒さへの耐性を失いつつある。彼が私たちと同じように毛皮で身体を包むようになってもう数週間が経つ。外へ出れば彼は凍り付いてしまうだろう。どんな神秘に守られていたにせよ、私がそれを奪ってしまった。彼は私たちと何

ら変わらずひ弱で、たとえ老婆が気付いていないとしても、少なくともその点は結局のところ彼が人間であることを示している。

私の発見を証明するかのように、あの子が熱を出した。いつものように膝を抱きかかえて座り、どこかを見つめていた彼は突然前のめりになると倒れて気を失ったが、毛皮をかけてやろうと私が近付くと目を覚まして、間もなく震え出した。大粒の汗が眉の辺りに浮かび、髪から滴り、全身から川のように流れ出した。そして燃えるような高熱の合間に、彼は寒さに凍り付いた。おそらく今まで寒気を感じたこともなかったのだろう。冬が意味するものを身体で感じ、雪や氷になることや、人体の限界である絶対的な寒さの領域に踏み入れることがどういうものなのかを自分の中に見出して、この新たな感覚を前に身体を強張らせた。彼は膝をきつく抱え込み、自分の殻に閉じこもった。手足、肩、首の筋肉全てが硬くなり、手は握りしめられ、口は固く結ばれた。彼は怯えているようで、発作が起こると私はナイフの柄を嚙ませて押さえつけねばならず、その間も彼は身体を揺らし、強張らせ、ひとしきり痙攣が過ぎると疲れ果てて死んだかのように眠る。するとまたしても汗をかき始める。彼を抱き上げて少しでも水を飲ませようとしていると、私は兄のことを思い出して、この子が私にとってどれほど重要な存在か、彼を失うことが何を意味するのかに気付かされた。

老婆は部屋の反対側から様子を見ている。何を考えているのか私にはわかる。これはただの発熱ではない。あの子は悪魔と闘っているのだ。森の中で彼を守っていた動物の霊が、彼の中に戻ろうともがいているのだ。何か薬はないか、彼女が霊薬の材料に集めているハーブをもらえないかと私が頼むと、老婆は首を振ってから親指を下に突き出して、唾を吐いた。朝も夜もあの子から目を離すわけにはいかない。霊が勝利してあの子の身体に舞い戻るかもしれないと判断した瞬間、彼女はあの子の喉を切り裂くだろう。間違いない。

だが若い方の女には自分にも子どもがいるからか思いやりがあり、少年がこのようにもがき苦しむ、汗にまみれ、全身を震わせ、布切れに覆われた身体を揺らしているのを見ていられないようだ。見つからないようにして彼のために食事や清潔な水を持ってきてくれる。

老婆が彼女に食ってかかっているのが聞こえ、私にも老婆が何を言っているのか理解できた。あの子が抵抗するのをやめて、その途端に彼の仲間の巨大な白狼と一緒にここに閉じ込められ、それがあの子の身体をすぐにでも乗っ取って表に出てきたらどうするのか。熱は苦痛を伴う変化の兆しだと彼女は信じている。あの子の血液は沸騰しては凍結し、一滴ずつ変化しているのだと。あの子の胃袋は狼の食糧である生肉を求めてよじれるだろう。彼の手足は真っ直ぐに伸びてかぎ爪が生えてくるだろう。あごが曲がって牙が生え始めるだろう。それどころか、実は狼などではなかったらどうする。何か他の獣だったら。彼女の想像を超える大きさで、より恐ろしい何かだったら。

嫁は怖気づいてしまった。そして彼女の心に新たな疑惑の種が蒔かれてしまったのがわかる。もしも獣が、あの子の体は奪えないと思って、他でもない彼女の息子を選んだらどうする。いとも容易いだろう。私たちが眠っている間は暗闇に包まれた肉体は空であり、あの

子の精神が抜け出して、部屋を横切り、彼女の息子の身体に入り込む。ただそれだけ、終わりである。

続く二日間、嫁は私たちに近付くことを拒んだ。彼女はあの子から目を離さず、自分の息子から目を離さず、少年を可能な限り私たちのいる部屋の隅から遠ざけたが、その間も老婆はぶつぶつと何かを呟きながら私たちの周りをうろついていた。

だが夜も深まり、あの子の熱病が危機的状況に達して私が思わず助けを求めると、暗闇で起き上がり、外套に身を包んで水を持って現れたのは若い方の女だった。私の疲れは限界を迎えつつあり、五日近くも看病を続けたあとでは、紛れもない疲労のせいでいつ泣き崩れてしまうかわからないような状態だった。手の震えが止まらず、器をあの子の口元まで持ってゆくこともできない。

彼女は私からそれを取り上げた。膝立ちになる。少年の頭を持ち上げてやると彼は冷たい水を勢いよく飲み込み、そして私が枕代わりにつくった布切れの山に戻してやると横に座ってあおいでいたが、その間私は壁に寄りかかって眠ってしまっていた。再び私が目を覚ますと彼女はまだそこにいて、外套の隙間からちょうど顔が見えた。彼女は姿勢よく真っ直ぐに座って、手であおいで風を送っている。彼女が頷いてまだ眠っていてよいと伝えてきたので、私はすぐに自分の奥深くに戻っていった。

窓の隙間から入り込む早朝の光の中で目を覚ますと、発作を起こしたあの子を彼女が抱きしめていた。彼女は怯えていて、私は今こそが本当の危機だと察した。彼女が恐れているのが何か私にもわかった。

あの子は身体をばたつかせては脱力し、手足を振りまわし、歯を食いしばっては緩め、奇妙な動物の声が聞こえてきた。他の者が身じろぎし始めるのが聞こえ、暗闇から現れてこちらを見ている老婆の後ろでは、少年が眠たげに身体を起こしていた。あの子は低い鳴き声を出し、喉からは唸り声が聞こえてくる。舌が垂れ下がり、口の隅からは唾液が垂れる。唇を動かす。そして突然、私たち全員が聞き取れるほどはっきりとそれは聞こえた。嫁は息を飲んで少年を突き飛ばし、老婆はわめいた。はっきりと、彼の口から、唸り声や手負いの動物のような鳴き声に混ざって、単語が、私がこれまで何週間も彼に教えようとしてきた言葉の一つが飛び出した。彼は譫妄^{せんもう}状態の中でようやくそれを身に付けたのだ。彼の意識に上ったのだ。彼の舌は遂にそれを発音できるようになった。

それはいたって平凡な言葉で、意味などなかった。この人々の日常生活で頻繁に使われる言葉の一つでしかない。だが彼らはすぐさま反応を示した。その上、遂に彼が自分の中に人間らしさを見出したことに喜んでいたあまり、私は彼らが警戒していたものを見落としてしまった。嫁は足をもつれさせながら、恐れおののいて遠ざかり始めた。老婆は彼女に向かって手を伸ばし、反対の手を背後に伸ばして少年をつかもうとした。彼らは少年を間に挟んで縮こまってこちらを見つめていたが、一方の私は理解できないままであの子のそばに座って彼らを見上げていた。

これこそ老婆が予言していたものだ。熱にうなされながら、その峠であの子は別の魂を奪

い取った。彼がこうして急に彼らの言葉を話し始めたのがその証拠だ。

彼女らは次に少年ルロの方を振り向いたが、それはあの子の口から知らず知らずのうちに言葉を発したのは彼だったからだ。一瞬ののち老婆は彼を哀れんでむせび泣き、若い方の女が自分自身の子どもを放棄して侵入者の世話をしていたと罵り、彼を手当てして峠まで持ちこたえさせたせいで一瞬でも悪魔が息子の魂を奪うのを手助けしたと責めた。若い方の女は恐怖のあまり言葉を失っている。彼女はイグサの上をふらつき、腹を押さえて声にならない音を喉から漏らしており、あたかも病を患う寸前のようだ。少年は泣き始め、老婆は彼の衣服を引き裂いて^{しるし}徴を、痕跡を、悪魔が入り込んだ場所を探した。一時間後にライザックが見張りの番から戻ると、部屋の中は完全な騒動と化していた。女は二人とも発狂しかけ、寝床に横たえられた少年は熱病の最初の兆候である発汗に襲われていて、一方であの子は遂に自身の危機を脱して静かな寝息を立てていた。

私は非常にうろたえていた。

他の場面であれば私はこの展開に対してこれ以上ないほど喜んでいただろう。あの子が遂に喋ったのだから。譫妄状態の^{まなか}最中に彼は人間の言葉を身に付けたのだ。彼が踏み出したこの初めの一步は、確実に人間の世界へと導いてゆくに違いない。もしこれが六、七週間前に沼地で起きていれば、私は喜びのあまり我を忘れていただろう。だが今は彼が自分を追い込んだ危険のことしか考えられない。あの人間の言葉が、眠っていた彼の奥深くから引き出され、心も魂も彼の住んでいた森で雪の上を漂っていた間に出てきたあの言葉が、彼を滅ぼすことになりかねない。

そんな危険には一切気付くこともなく、眠っている彼の口からは穏やかな吐息が漏れている。だが危険が確かに存在している以上、私は彼から離れるわけにはいかないし、肉体が休息を求めても、一瞬たりとも屈するわけにはいかない。反対側の隅では、私たちに注意を向ける余裕などない様子の女たちが少年の身体を覆ってむせび泣き、その泣き声の合間に少年のうめき声がかすかに聞こえる。彼はあの子が患ったのと同じ病の初期症状を見せている。あの症状には見覚えがあった。

どうやってうつったのだろうか。

その時頭に浮かんだのは少年の警戒したような顔つきで、老婆が彼の衣服を引き裂いて侵入の痕跡を探していた時に見せた、得体のしれない存在に対する恐怖だった。あの時にうつったのだろうか。彼女の恐れを取り込んで自分のものにしてしまったのか。一体どのような謎めいた現象で肉体が滅びに向かってゆくかなど、誰にもわからない。何年も前のこと、小アジアへ遠出した際に、私は疫病に見舞われた町に行きついた。その時私が驚いたのは病の進行の不規則さで、ある家はひとりの無傷な子どもを残して全滅しており、次は二つ飛んだ先の家で犠牲者が出ていた。その時から私はあることを信じるようになった。雲のように町を覆って進む疫病そのものの他に、疫病の影とも言うべきものが肉体か精神に棲み付いていて、その二つが出会った時にのみ病は発症するのだと。そうでなければ、一人が病を患ったのにその隣に座っていたか同じベッドで寝ていたもう一人が無事である説明がつかない

い。そしてその影、肉体の中に眠っている影は、恐怖に他ならないだろう。二つをつなぐのは恐れなのだ。肉体は恐怖から汗をかき、その汗で濡れた身体に疫病が付きまとうことで、汗の一滴一滴が変化して熱を帯びる。精神の中で生まれたものが肉体に影響し始めるのだ。私は一度劇場でも、同じように病が広がってゆくのを見た。アンティオキアにある劇場で有名な役者が演じていたのは、神々を侮辱したために致命的な熱にうなされ苦しむ英雄の最期だったが、その演技が観客の心にもあまりにも強く訴え、身体を包む熱さや、息を詰まらせる姿、襲いかかる病もあまりにも完璧に表現したために、六人ほどの観客が恐れや自身の罪悪感のせいで突然体調を崩し、汗をかきながら観客席から転げ落ち、運び出されることになった。彼らの心には目の前のものの印象が強すぎたのか、役者の身体の中にあつた偽物の病が、彼らの身体に伝わって本物となったのだ。その病を想像する役者の魂が彼らの魂に非常に強い影響を及ぼしたために、彼らは病を受け入れるしかなく、その毒がすぐさま血管を伝って流れていったのだ。

そうやって熱病は広がってゆくのだろうか。そうやって少年は苦しめられているのだろうか。誰かにうつすことで自由になりたいというあの子の願いではなく、母親によって持ち込まれた恐怖を通して、老婆の急な錯乱のせいで彼自身の心に植えつけられ、そしてそれはすぐに汗へ、炎へ、発作へとかたちを変え、彼は今それに苦しんでいる。感染したのは老婆が嫁をつかもうと手を伸ばした瞬間であり、その時嫁はあの子の発声に恐れを抱いて走り出し、老婆はその間も叫び声を上げながら背後の眠たげな子どもの方を振り向いた。この老婆の叫び声に驚いた瞬間、彼は病を患い、彼の身体は彼女の手からそれを受け取ってしまった。あの子からうつった母親を介して。彼女たちの心から彼の心へ。だが老婆が心から信じて若い方にも思い込ませたのは、あの子に憑りついている悪意を持った霊が全てを行つたということであり、少年の母親は確かに病の媒介者となつてしまったものの、それは彼女自身の弱さと同情が原因だつたということだ。あの子の看病をしたがために、彼女は自分の息子の命を売り渡すことになつたのだ。彼女は死霊が移るのを許してしまつた。

そして少年ルロは刻々と深い譫妄状態に陥つてゆき、叫び、うなされ、この一週間部屋を満していたあの子の哀れな泣き声や手負いの動物のような鳴き声と同じ音を漏らし、もがき、それを見た女たちは同じ動物の霊が彼を伝つて私たちの中に入ろうとしていると信じている。一方であの子はそれらに気付くこともなく、体力を取り戻しつつあつた。身体を支えるまではいかなかつたが、今日は上半身を起こして食事をとるだけの体力はあつた。そして微笑みすら見せた。

今となつてはライザックまでもがあの子の回復に対して眉をひそめており、彼の表情にはあの子が彼らに対して働いた何かへの心からの恐怖が見て取れたが、女たち同様彼も孫息子が苦しむ姿が心配で悲しみに暮れているために、見つめたり訝しがったりする以上のことはしない。彼の感情の全てはイグサの上の小さな青白い姿に対して注がれており、その人物は熱病が熱さと寒さの段階を迎えるにしたがつて発作を起こして手を握りしめた。病がようやく老人の頭から離れるのは、彼が受けた精神的な打撃が憤りへと変わり、私たちへ

と向けられる時だろう。五日間昼夜を問わず子どもの横に座り込み、肩を丸め、表情を変えず、時に涙を見せる老人の横で少年は頬を濡らしながら弱ったような声を漏らしていた。彼の気持ちは理解できるが近付くことはできない。私はここから動かさず気配を押し殺して、あの子を近くに留めていた。嫁、つまり少年の母親は今でも悲しみや罪悪感に打ちひしがれており、頭を抱えて座ったまま少年を見つめ、彼がこの世に戻ってくるのを祈っているだけだ。彼を世話しているのは老婆の方だ。万が一少年が死ぬようなことがあれば、私たちを包むこの激しい感情は暴力へと姿を変えるだろう。そうなれば私にはあの子を守る術も自分を守る術もない。半分ほど眠りに落ちた状態で、私はその瞬間がやってくるのを待っている。荒々しい怒りの叫びが老人を突き抜けて私たちの方へと飛びかかり、少年を苦しめている激情が老人の身体に宿って私たちを襲い、まずはあの子を、そして庇おうとすれば間違いなく私を襲うだろう。

だが奇跡的にも五度目の夜が過ぎ、少年は生き延びた。明け方になると老婆は雌鶏のような声を上げながら、まるで彼が理解しているかのように少年に話しかけ、半ば眠りに落ちかけていたライザックを揺り起こしたが、座り込む彼の身体は真っ直ぐなのに顔は前に倒れていた。少年の母親はゆっくりと立ち上がり、五日間惨めな世捨て人のように沈み込んでいた壁際から出てきた。ライザックは手を固く握り、安心してやけに陽気な大声を出し、おそらく全員にこんなに心配をかけたことで少年をからかうと、にやつきながらすぐに部屋の中央へ戻ってきて、私に手招きした。彼の恐怖も怒りも全て消え去ってしまった。彼は窓に近付いてかんぬきを外した。眩いばかりの光が部屋に流れ込んでくる。今日は遠くの風景が見渡せるほど澄み渡った真っ白な一日で、雲ひとつない青空の下には輝くような白銀の世界が広がり、そして突然部屋へと舞い込む一陣の風は格別だった。ライザックは身体を伸ばし、空に向かって両腕を広げながらまたしても大きな叫び声を上げると、弱々しく部屋へと戻ってきて、自分の寝床であるイグサの山に転がり込んだと思うとすぐに、ここ一週間で初めて味わう本物の眠りに落ちた。少年の母親も彼の横で身体を広げ、同じく眠りにつく。老婆だけが、疲れも知らずに子どもに向かって鶏のような声を浴びせ続けており、皿から一口食べるよう促し、時おりひとりで笑い声を上げ、一度か二度など私にまで声をかけたが、歯の抜け落ちた彼女の言うことは私には理解のしようもない。

危険は過ぎ去った。私たちは乗り越えたのだ。突然、自分の疲れを思い出した。巨大な波が押し寄せ、私は一メートルも離れていないイグサの寝床まで這ってゆくこともなく、窓から入り込む光を浴びながら体を横たえて眠りに落ちた。

既に最悪の状況は脱した。冬至が来て、そして去ってからしばらく経ち、一年で一番深い闇は既に過ぎ去り、そしてその頂点にふれたあとで地球は今や再び光の方向へと向かい始め、日が長くなり始めるにつれて私自身の気分も軽くなってゆくのを感じる。今では穏やかで明るい天候が視界を遠くの風景まで広げてくれる時間が増え、海が輝き、今年初となる鳥たちが舞い戻り、静かな夜には暗闇の中で凍った川が砕けてゆくの音が聞こえる。

遂に家の中を動きまわられるようにさえなった。私はあの子を連れて牛舎に下りて動物たちと共に座り、暗がりの中で鼻を鳴らしたり匂いを嗅いだりするのには耳を傾けていると、彼らは身じろぎをして、餌を食み、鼻につくような臭いを放つ生温かい糞を落としたが、それすらも上の部屋の淀んだ空気のとでは快適とさえ思え、仕切りの中で寄り添う彼らの温もりを感じていた。彼らの落ち着きがなくなっているのは、春の匂いを感じているからだ。二、三週間もすれば、氷は完全になくなり、彼らは再び自由を得るだろう。男たちは毎日仕事に出て、氷を切り開いて道をつくり、あばら屋の間を走る細い通りを塞いでいる雪の塊を掘り進み、庭を片付けて再び小屋に入れるようにしている。私の慎ましい小屋までもが雪から頭を出しつつある。すぐに戻れるようになるだろう。そうすればあの子と私で以前の生活を再開するのだ。それから一ヶ月もすれば、沼地にある私たちの小島に、鳥たち、蛾、春に生まれたばかりの芋虫のもとに、最後に練習してからしばらく経ってあの子が忘れかけている母音や子音のもとに戻るのだ。ようやく彼が言葉を発したとはいえ、それらはまだ彼の心の奥底で眠っているのがわかる。彼という存在の隠された部分、眠りよりも深いどこかで、彼は自分に向かって話しかけたのだ、いずれ私に向かって話しかけてくれる。

私たちが毎日牛舎まで下りてゆくのは、部屋そのものが耐えがたい空間になったからだ。私たちがそこにいられるのは単に情けをかけられているからに過ぎない。ライザックが私の庇護者だからに過ぎない。

この家庭における彼の力はここ数週間の出来事で大きく揺らいでしまった。支配者は老婆だ。少年の命を救ったのは彼女の魔術だ、彼女はそうライザックに話しており、彼の愚かな信頼と嫁の同情心が彼ら全員を崩壊へと導いているのだと言った。その少年は結局のところ、彼にとって唯一の孫息子なのだ。今やライザックが彼を見る目には、死に対してその少年が、そして彼自身がどれだけ非力な存在なのかという急な悟りが映り、危機に瀕した際に彼の腕力がどれほど役に立たないか、実際にどれほど役に立たなかったかということへの気付きが映る。それはまるで老婆がようやく彼の精神を毒で冒す手段を見つけ、一度は彼に与え、長年の間彼女を超える力の根拠となっていた男性性という権力を奪い去る手段を見つけたかのような。時として彼は彼女の前ではまるで子どものようだった。老婆の表情には、かつては完全に彼女の支配下にある乳児であったが、いつしか長い間彼女の主となったこの六十歳の男に対する正真正銘の敵意を見て取ることができる。そしてその敵意と混在する、勝利の喜びという新たな感覚。家は彼女の魔術が放つ光と、彼女のハーブのにおいと、彼女の霊薬と、低い声で延々と続く彼女の祈りの言葉で満たされている。

次の満月の日には、老婆は集落の外にある女たちの集まる木立で、少年が生き延びたことへの感謝として生け贄を捧げるだろう。ライザックがひとりで出かけて獲物を、野生の子犬を連れ帰ってくれば、臍物は泥炭の塊でつくられた祭壇の上で燃やされ、三つの顔を持つヘカテーに捧げられるだろう。少年は一緒に行きたいとせがんだが断られた。子犬は野犬の群れから捕まえてくるが、その中には雑多な犬と狼が混ざっていて、集落の向こうにある下生えの辺りをうろついている彼らは神聖な存在でもあるため、時には外壁の下の通路から残

り物を与えたりもする。痩せ細った、濃い灰色の生き物たちは、肋骨が浮かんだ身体で争い、ちっぽけな肉片や腐敗臭のする脂を巡って転げ回り、そして茂みの中へと消えてゆく。

ライザックが籐細工^{とうざいく}のかごに子犬を入れて戻り、月が満ちるまで十日間、その犬は部屋の隅で哀れな鳴き声を上げていたが、あの子にとってはそれが苦痛で仕方がなかった。暗闇の中で小さな鳴き声に目を覚ますと、あの子の声だと思った。実際に暗闇の中でかごに覆いかぶさるようにして彼自身の高い鳴き声で動物の声に応じているのを見つけると、彼を寝床まで引き戻すのにかなり苦勞した。そして私はその間も隅で背筋を伸ばし切って座ってこちらを見張っている老婆に気付いており、その見えない微笑みを想像した。

あの子は何が行われようとしているのかわかっているのだろうか。彼女はこの小さな生き物をわざとここへ、そして早く連れてきて、犠牲となる動物とあの子の間に交流を持たせようとしたのだろうか。彼女が執り行おうとしているのは、少年の命に対する感謝ではなく、あの子に対する祓魔^{はつま}の行為なのではないか。

その時が近付くにつれてあの子は段々と取り乱し始め、私は熱病が再発してしまうのではないかと恐れた。今や子犬が何か音を発しただけで震えが止まらなくなり、かごに近付かないように彼を押さえても遠くからその生き物に向かって返事をし、声の高さを完璧に真似してみせ、老婆は残忍で烏に似た声で隠すこともなく笑っている。あの動物は何が起きようとしているかを察しているのだろうか。そしてそれをあの子に伝えているのか。それとも、彼が落ち着きを失っているのは単純に人間以外の存在、血族であるものの存在がようやく部屋に現れたことが原因なのだろうか。いや、動物の苦痛を通して、自身の自由の喪失に対して何か新たな気付きがあったのか。はたまた、夜ごとに輝きを増している月のせいだろうか。ここ一週間近く空が晴れ渡っているので、私たちは窓を開けたまま月の光を浴びて眠っていて、その光は部屋の中の見慣れたものを青白い幽霊のように際立たせ、雪から反射した光を浴びた物体は、さわることができそうなほど濃い影を落とす。

遂に問題の夜が来た。二人の女は月が昇るとすぐさま少年を連れて出かけ、ライザックは庭の門ぎりぎりまでかごを運んでから梯子を上って戻り、盤とピンを使った例のゲームに誘ってきた。

私は窓から、老婆が率いる一団が勢力を増しながら細い道を進んでゆくのを見ている。木立に辿り着く頃には集落の女たち全員が集まっているだろう。男がその儀式を目撃することは決して許されない。そこには月の力が働いており、それが属する女の権力や女の信仰の世界は男の世界よりも古く、神秘的なのだ。ライザックはゲームの最中も不思議なほど落ち着きがなく、なんと私が勝利を収めたほどだ。戻ってきた時も女たちは黙り込んでいて、依然として月が持つ得体の知れない力に包まれたままで、その力は毎月の肉体の満ち引き同様に彼女たちに影響を与え、膨れ上がっては萎んでゆき、柔らかく曖昧な光で闇を覆うことで、日光の中では見慣れたもの全てをつくり変えてしまう。一瞬ののち、ライザックは言葉を発することもなく自分の寝床に消えていった。彼女たちの沈黙が彼を追いやったのだ。あの子はといえば、子犬が部屋から連れ去られて以来微動だにせず、いつもの隅で身体を丸め

て座って例の催眠状態に深く閉じこもって、眠ろうともしない。私たちを取り囲む違和感が、変化が一晩中気になっていたが、それは単に満月の夜だからというより、むしろ覚醒しているながらも夢うつつなあの子の状態が原因のように思えた。もしくは一晩中目を見開いているにも関わらず空虚な眼差しで座ったまま、満月の光を全身に浴びて体内にその力を取り込みながら、時には強大な生き物が彼女の中から呼吸をしているかのように大きなため息をつく老婆の姿が原因だったかもしれない。

朝になるとより奇妙で荒々しい息遣いが部屋に響いた。

ライザックが夜のうちに何かの病に襲われ、それは子どもたちが患っていたものとは違うものだった。彼の身体は激しい発作に見舞われてねじれては持ち上がり、歪み、消耗し、滝のように汗を流した。そして老婆が彼の身体を調べると彼女が予期していた通りの痕跡が見つかった。彼の手首には半円形の小さな歯型があり、ほとんど消えかけていたが、それこそ獣が入り込んだ傷跡である。突き刺すような甲高い叫び声が口から出てきて、彼女は早くも両手を上げて死者を悼み始めた。

これこそ彼女が昨晚の儀式で防ごうとしていたことだった。彼女たちは失敗したのだ。結局のところ危険にさらされていたのは少年ではなく老人の方だったのだ。少年の病はおとりだった。今や完全に、彼女はあの子が彼らに対して悪事を働いたと信じるだろう。動物の霊は彼を捨て去って遂に老人の中へ入り、彼の口には激しく駆り立てられた馬が出す泡に似た白い斑点が浮かんでいる。彼から飛び出る動物に似た野蛮な唸り声や咆哮が私の全身の毛を逆なでし、その間も彼は何時間ももがき苦しみ、喉から湧き出る低い音はこれまでに聞いたこともないようなもので、人間の言葉とは何百年もの隔たりがあるように思えた。彼はそうやって錯乱した言葉を発しながら身体を強張らせ、それがどんな獣であろうと、彼の中で生まれようとしている何か飛び出そうとするのに抗って手足を全て広げ、毛だらけの四肢や牙の生えた長い口、生き物の生肉を食いちぎるあごが現れるのに抵抗していた。結末は変えようがなく、それはこの悪霊が初めて現れた瞬間から決まっていたことだ。私にさえそれがわかる。これはさながら悪夢であり、私たちはみな彼の肉体が経験している劇的状況に巻き込まれ、その恐ろしい過程を、人体の活力が動物のそれへと変換される様子を目撃させられている。悪夢は独特の推進力を持ち、まるで私たち全員がその当事者であるかのようにいきなり同じ夢の中に引きずり込み、夢の中で同時に目覚めた私たちは部屋が檻になっていることに気付いたが、私たちが息をすることで共有していた空気そのものが動物の力を秘めており、その悪臭は私たちから発せられ、その唸り声は私たちが大声を上げて目覚めようと喉を詰まらせながらもがいている声だった。

シャーマンが送られてきた。だが彼ですら負けを認めざるをえなかった。灰色の、狼を思わせる老人の顔を一目見るなり、彼は恐怖に後退り、頭を振って、自分の魔力までもが汚染される前に逃げていった。

あまりにも唐突で圧倒的であったため、私たちは茫然として、現実に戻ることができなかった。五日間、騒音がやむことはなかった。老人の精神は抗い、もがき続け、彼の体力は無

尽蔵に思われた。嫁が彼の唇を水で潤してやろうとすると窒息したような悲惨な声が出てきて、彼の口から新たなかたちの言葉が飛び出そうとしているかのようなようだった。彼の喉の筋肉が未知の音を発しようとしたが、何も出てきはしなかった。あの動物が己の名を口にしようとしているのだと老婆が叫んだ。あの子を養ってきた謎の怪物が彼を離れ、老人の中で再び生を得ようとしているのだと。

五日目にして彼はようやく静かになったが、何時間も狂乱が続いたあとの突然の静寂は恐ろしかった。私たちは固唾^{かたず}を呑んだ。

彼は死んではいなかった。それは彼の肋骨が上下しているのを見ればわかったが、獣は次なる獲物に狙いを定めていた。老婆が目を光らせて私たちの周りにその存在を示すような息遣いがないか探したが、それは四つ足で部屋の中を逃げまわり、私たちにもそれが通り過ぎる時に毛がふれるのを感じられて鳥肌が立った。だが、音はなく、動きもなかった。私たちの呼気が入り出るだけだ。私にしがみついたあの子は、今にも発作を起こしそうだ。老婆の目は部屋を探索し続け、大きく広げた両手を宙にかかげている。数分が経つ。数時間。私たちは凍り付いたままだ。恐れあまり動くことができない。

その後のことも夢の中の出来事のように進んだ。部屋からの脱出、ライザックの魂を外に誘導するためにやってきた男たち、私とあの子が人目を避けて屋根から入った、雪に覆われた暗い私の小屋。私はそこから庭で起こっていることに耳を傾けていた。

集落の女たち全員、もしくは柵の中に詰め込める限りの女たちがそこに集まり、老人の魂が漂ってきたら掠め取ってやろうと家の敷地のすぐ外で待ち伏せしているよそ者の霊たちを追い払おうとしている。幾重にも衣服やかぶりものをまとって目と手以外は見えない真っ黒な姿で雪の上に座り込んで、彼女たちは身体を前後に揺らしながら呼吸を合わせて神聖な石を打ち合わせて、耳を裂くような音を立てている。この儀式のためだけに用いられるその石は、白さとなめらかさを求めて河床から運ばれたものだ。こうすることで彼女たちは悪霊の耳に老人の叫び声が聞こえないようにし、死の叫びを悟られずに、彼の魂が夜の闇の中で奴らの間をすり抜けてゆけるようにしているのだ。

石の立てる音は一連の短く鋭い破裂するような音で始まり、彼女たちのいる空間は甲高い悲しげな声と鷹を思わせる三つの金切り声で満たされた。リズムが早まるにつれ、石を打つ音は不規則になってきた。だがその法則がよそ者の耳にとってはどれだけ不可解であっても、ひとつひとつの石は同時に振り下ろされており、リズムが展開してどこまでも早まり続けるにつれ、女たちの声は「オム、オム、オム」という脱力したものへと落ち着いてゆき、その単調な音節が延々と繰り返されて、まるで大地そのものが割れ目からいくつもの口を通して話しているかのようなようだった。

庭を取り囲む小さな粘土製の器の数々に入ったハーブがくすぶっているが、それは嗅いだこともないにおいだった。ハーブの煙が鼻孔に入るとめまいを引き起こした。壁の白さ、足の踏み場もないほどの人影の黒さ、同時に動く百もの手、単調に響く声、小石のぶつかり

合う音。それら全てが頭の中に振動を生み、その振動は五感を和らげ、やがて麻痺させる。広がってはまとまってゆく光や音の中に自分が巻き込まれるのを感じたが、私の耳に響くその音はまるで私の呼吸や心拍を強制的にそのリズムに合わせてくるかのようで、自分が徐々に引き裂かれてばらばらになり、私自身や個人の感覚から切り離されてゆくかのようだった。

あばら屋の二階では私たちが目にすることを許されていない最後の儀式が執り行われており、このいくつもの声による雑音はその儀式を覆い隠すためなのだ。何が起きているかは知っている。集落の長老たちは彼の年老いた頑強な身体を殴り、揺り動かして最後の息を絞り出し、ライザックの命を無理に奪うことで、彼が闘いながら死ねるようにしているのだ。彼が子どものような弱い状態へと衰退してしまうことは、彼の魂を掠め取ろうと闇闇を漂う悪霊たちに対して最終的に無防備な状態にしてしまうことを意味するからだ。彼は猛烈な攻撃を受けて死んでゆくのだ。こうすることでのみ、彼の死にかけた魂は闇のものをも怯えさせるこの上ない激しさをまとい、彼は外へ出てから苦しむことなく昇ってゆける。

一時間ほど続いたのだろうか。そしてようやく老人の一人が窓辺に現れて両腕を上げた。すぐさま辺りは静寂に包まれた。無数の手は途中で動きを止め、単調な声は唐突にやんだ。老婆、ライザックの母親だけが長い金切り声を上げ、息が切れるまでひたすらひとつの音を出し続けると、今度は若い方の女に引き継がれ、そのようにして他の者へと続き、同じ音を出し、保ち、引き継ぎ、その間に屋内では男たちが踊り始め、ブーツのかかとで木の床板を踏みつけていた。これが通夜なのだ。長老たちは踊り続け、発酵した酒を飲み続け、最後の一人が死者と同じように意識を失うまで続ける。まるで誰も死ななかつたかのように笑い合っては冗談を飛ばし合い、壁に向かって小便をするためによるめきながら雪の中へ出てくるが、中には酔い潰れてまともに立つこともできず、ズボンを下そうと必死で手探りしながらも片手で支えていなければならない者がいるほどだ。だがこれも全て、空中の悪霊たちのことを考えてやっているのだ。老人たちは、彼らの仲間が遠くの高地にある墓地までの道を辿っている間、悪霊たちの意識を逸らそうとしているのだ。彼の魂はおそらく既に到着しており、闇の中で馬に乗って巨大な円の周りを駆けまわっているだろう。二日後には彼らは遺体を運んで合流する。その間女たちは雪の中で身を寄せ合って待つ。最後の踊り手が倒れると、彼女たちは忍び込んで死んだ男を連れ出し、彼の身体を洗って棒に括りつける準備をする。

そういったことの最^{きなか}中に、私は自分がやるべきことをはっきりと悟った。ライザックが死んだ今、しかもこんなかたちであった以上、私とあの子を守ってくれるものは何もない。今この瞬間は、彼らの念頭には私たちのことはない。死の儀式や、待ち伏せする悪霊たちのことで彼らの頭がいっぱいだったおかげで、私たちは密かに姿を消すことができた。儀式が完全に終わった頃になってようやく誰か、というよりおそらく老婆が復讐心を抱き、この悲劇をもたらしたのがあの子であったことを思い出し、全てを知っていようがそうでなかろうが彼のそばにいた私を思い出さるう。

夜明けの直前にあの子を起こした。ほとんどの女たちは居眠りしていて、黒い衣装で包んだ身体を丸めて顔を隠しており、忍び足で彼女たちの間を抜けて道まで出るのは簡単だった。

あの子はまだ寝ぼけていたが、沼地の端に、アシに囲まれた私たちの小島へ続く橋に辿り着くと、私の手を握る力が急に強くなり、笑い、小さく飛び跳ね、私を引っ張ってゆこうとした。四ヵ月近くも経ってようやく以前の生活へと戻るのだと彼は思っている。沼地での毎日の練習へ、鳥の鳴き真似へ、そして長い間彼の中に隠されていた母音や子音を、私の助けを借りながら喉から引き出そうと躍起になる彼の挑戦へと。立ち止まるわけにはいかないことを理解させると、彼は落ち込んだ。

ふてくされた様子で下唇を突き出し、握ったこぶしで私の胸を叩いた。強くはなかったが、私に対する不満の表現としては十分だった。彼は背を向けて悲しげに唸り始めた。くすんだ光を一面に浴びた沼地は、濁った水たまりとところどころに青みがかかった氷が映す月明りでできている。アシが高い音を立てる。月が雲の切れ間から見え隠れする。あの子が背後の安定した地面に当たる月明りに向かって惜しむような様子を見せるので、私は彼の外套を引っ張らねばならなかったが、そのうちようやく彼の手を取って連れてゆくことができた。おそらく私の醸し出している雰囲気、これは遊びではないこと、かつての生活へと戻ろうとしないのは必ずしも私の意思ではないことを納得させたのだろう。彼は重たい足取りながらもついてきて、私たちは川に向かって沼地を越え始めたが、その川は北方のどこかに流れているはずで、二、三日は旅を続けることになる。厳しい道のを徒歩で行くことになるが、私たちが歩いた痕跡がそこに残ることもない。

私の計画はまだ川が凍っているうちに渡り切って大草原へと逃げ込むというものだ。何ら望みのない計画だが、他には何も思い付かない。心の奥深いところにある何か、これこそ成すべきことであり、始めからずっとそうであったと伝えている。

かつて見た夢を思い浮かべる。夢の中で外へ出て、自分の墓を探して地面を掘り返していた無数の夜を。馬の身体をした神々しい男たちの夢を。今私は未知の世界へと、それに比べればトミスなど見捨てられたローマの植民地に過ぎない、正真正銘の未知の世界へと踏み込もうとしており、そしてこの道は間違いなく私の宿命なのだといえる。常に押し進んでゆくためには、自分が知らない領域が限界であっては決してならない。これが人生と言わずして何が人生だろうか。特にこの老人は明らかな幸運に恵まれて、年老いた人々を欲望や感情や意志に対して盲目で、聾で、無力にしてしまう心地よい安全から無理やり追い出されたのだ。私たちの人生とは延々と続く始まりの連続以外の何物でもなく、苦痛を伴う未知への旅立ちの連続であり、意識の外側に存在するまだ見ぬ自分という神秘へ進み続けるが、例外は夢で、私たちの散策でも未だ目にしていない数々の小島の香りを孕んだ夢が流れ込んでくる。航海中は次に上陸する大地が実際に姿を現す何日も前から、その地で花を咲かせつつある木々の枝が流されて、暗闇の中でも船体にぶつかってくるように。

この歳になって私は勇敢さを増し、我々が経験しなくてはならない変化の全てによろや

く準備ができ、苦痛を伴いながら手足が新たなかたちへと勢いよく変わってゆくのを受け入れることで、かさぶたが裂けて木が生えるか、蛾か鳥かが古い身体を捨て、上空めがけて飛び出すのだ。死とは、これ以上の成長と変化を拒否することに他ならない。

私は弱くて愚かかもしれないが、それでも生き延びた。私はこの時代最後の詩人であり、まだ存在しており、まだ活動しており、それは私たちの言葉が話されないこの地でも、静寂の中でも変わらない。そして他の年老いた者たちが最期になって自分の死期を追いやって未知の領域へ冒険に出たいと思うのであれば、自分の庭で穏やかに暮らしている時でさえ毎日が冒険の連続であった人生を過ごしてきたその者は、どれほどやる気に満ちているのだろうか。つまり、その詩人はということだが。

そしてあの子と私がよろめきながら向かう、あの神秘的な弧を描く水の流れは、私が生まれてこのかたずっとローマの世界の境界として認識してきたものであり、「イス・ター」¹³という音節は、そういった考えが非現実的な空想でしかなかった日々でさえ私の最も深い部分にあったはずの存在を震わせて、その存在は今ようやく現実となろうとしている。イス、ター。イス、ター。それは今までずっとそこにあって、私を待ち受けていた。私が地図上でそれを目にした時も、私の人生の最後の境界線は、私が越えるのを、私が辿り着くのを何年も何年も辛抱強く待ち続けていたのだ。私が現実と頭の中の両方でどれだけ遠回りをしていてもそれはそこに留まり、波が変わり、毎年凍り付き、ひび割れ、再び流れながら、私に囁きかけていた。「お前が本当の人生を見つけないのなら、最後に本当の死を見つけないのなら、私こそお前が越えるべき境界だ。」

スルモの小さなベッドの中で心地よく眠る、甘やかされた裕福な地主の次男。そんな私がどうやってこの展開を予想できただろう。この開拓された世界の最果てにある川と私の間にどんな関係があるというのだ。大都市の庭で異国情緒あふれる恋愛ものをいたずらに書き留め、余るほどの食べ物を得て、ワインと会話で心地よく酔って、凝りに凝った寓話を未知の世界を舞台に描いていた私が、頭の片隅奥深くで湧き上がり、その上にできた氷原を砕き、軋み、痛々しくもひび割れて海へと千メートル以上も流れてゆく川に耳をすます必要などあるだろうか。今になってようやく、冬の暮れの朝日を浴びながら、春を目前にして、私は輝きを放つ沼の中を進み、人生の終わりにおいて再び出会えるなど予想もしていなかったあの子を引き連れて、広大な沼地の泥の中でも立ち止まってその音に耳をすまし、地平線の向こうのどこか、海鳥たちが旋回する場所で川が立てる轟音に耳をすます。

遂に時は来た。遙か北の彼方、果てまで広がる草原の奥深くこそ、追放されてから何年もの間私が夢に見続け、眠りの中で月明りに照らされて高く浮かぶ雲の下を歩いた場所なのだ。私が踏み入れようとしている地は決して全く知らない土地ではないのだ。

そしてそこに、いくつもの季節を越えてきた末に、あの川がある。イス、ター。神秘の二音節。冷たく凍った私の吐息から生まれ、再びひび割れて流れ出すのを目前に、私が渡るのを待ち続けている。あの子と私が月明りを浴びながらその上に足を踏み出すと、その騒音に

¹³ 「イス・ター」(*Is-ter*): イスター川。ラテン語で現在のドナウ川を指す名称。

耳が聞こえなくなるほどで、その白さは私たちの足元で唸り、ひび割れ、崩れる。半分ほど進むと、遠くまで輝くその荒地には何も見えず、私たちがあとにした岸も前方にあるはずの岸も見えなかった。だがそのうちようやく、輝きに目を細めていた私にもはっきりした黒い地平線が見え、再び安定した大地が存在を主張している。

渡っている途中のどこかで、私は反対側の岸など存在しないのではないかという背筋の凍るような恐怖に襲われ、イスターはこの先どこまでも続く、大地と空の境界に存在する凍っては流れる川なのでないかと思われ、草原の物語も、巨大な馬乗りたちも、私たちの想像力が生み出した単なる作り物で、氷の橋を越えて雷のように降り注ぐ彼らから雪に覆われた要塞を守り抜いたことも事実ではなかったのではないかと思われた。

だが大地はどこまでも続く。イスターの向こう側までも。そこにはまた別の世界がある。私たちは岸に辿り着き、踏み入れる準備をする。

V

これはもう夢ではない。私たちは夢の先にある最後の現実へと辿り着いたのだ。

春の訪れを感じさせる草原は海のように揺らめいてさざ波立ち、その中をかき分け、時に胸の高さまである草の中を泳いで進む感覚は歩いているというよりも漂っているようで、視界には目印となるものはひとつもない。頭上には、どこまでも広がる青空と、ほんの小さな雲が天井のように遥か遠くに見える。

川を渡る前、背後の低木に覆われた地では目に留まる物体の欠如は氣力を削ぐだけに思われ、地平線を歪めてくれるものを一日中待ち望んで、故郷の細く黒いシダレスギの一本、いや日の光を浴びて大きな葉の一枚一枚が透け、緑色に輝くクリの木でもよいと求めている。ここでは無限の広がりや存在の欠如は氣力を養ってくれて、さらなる広がりやさらなる光に対する渴望のみを与える。それはまるで自分の魂の大きさとその空虚さを突然目撃し、それを受け入れて最後にはその自由な広がりを称えるようになったかのようなのだ。

ここではそうやって異なる感覚を抱いて移動する。まるで空気そのものが変わったかのように、山頂にいる時のように頭に回ってくる空気が少なくなったかのようなのだ。自分の骨さえも軽く感じる。そして空と大地がつながる北方へと向かって何日間も身体を酷使し続けたせいで疲労という言葉を通り越すほど疲れ切っているにも関わらず、身体はほとんど痛みを感じず、なんとなく肉体を離れているような感覚だけがある。時には自分が異なる二つの平原を同時に歩いているのではないかと感じる。私は遥か高い位置から自分たちを見下ろしていて、二つの小さな人影が動くにしたがってかすかな切れ目を入れて草原を二分する様子は、まるで水中を泳いでいるようだ。そしてその高さから見ればと肉体の疲労など無に等しい。肉体的な痛みは確かに存在するものの、これだけの距離があると感ずることもなく、たとえるなら遥か遠くの叫び声が聞き取れないのと同じだ。精神は肉体と同じ経験をしているが、それは異なるかたちを通してである。精神の進路は、光を浴びて輝く稲を二分しながら北上する肉体のそれとは一致しない。精神は広がってゆき、まるで空間そのものであるかのように、全風景へと変わってゆく。一方の地平線から反対側までの大地と、弧を描く空を全て埋め尽くし、今やまじりけのない空気と同じに、無数の光の粒子と同じになり、微細な中心となったそのひとつひとつからは一目で全てを理解できるようになり、そして上空から見ることができ、そこからは地面を這い進んでいる小さな人影が、あの子と自分自身が見える。私は自分たちが近付いてくるのを遥か前方から見ている。丸一日前に自分たちがいた後方からは、自分たちが遠ざかってゆくのが見える。

夕方には巨大な影が丘の上を移動して、窪地に潜り込んだり坂道を黒く染めたりするが、私たちは辿り着いた時には十分穏やかな天候だった。静かな日にも羽音だけは、私たちを取り囲む虫の出す音だけは聞こえてくるのは、彼らが草の根元に群がり空中を飛びまわっているからだ。北風が吹き込むと空気は凍り付き、辺り一面がざわつく。そんな時は私たちは虫たちのように草の根元に這い込んで荒波をやり過ごす。だが南風が吹き込んだ時は初春の吐息で辺りは暖かくなる。そして既に、私たちの周りでは至るところに春の兆しが見えて

いる。草に埋もれている小さな野生の花。あの子が集めてくる、そして私たちが食べている幼虫。熟しつつある稲穂を目当てに戻ってきた鳥たちの群れに、私たちはその幼虫を与える。鳥の群れは雲のように上空で膨らんで、高地にかかる低く垂れ込めた雲のように降下して、私たちが彼らの世界へ踏み込んで食事の邪魔をしてしまうと漏斗状になって私たちの目の前を流れ去ってゆく。

遂にあの子の世界に辿り着いたのだ。彼は喜びに満ちた様子で飛び込み、私を連れまわし、そして二度と見つからないと思っていた忘れ物を見つけたかのように、至るところに小さな発見をして飛び跳ねている。彼は丸めた手でそっと鳥の卵を持ってきて、斑点を指差してなんという鳥の卵なのかを嬉しそうに伝えてくれる。そして時には巣にある六、七個の中からひとつ差し出して、卵に茎を通せば中の栄養分を吸い出せることを教えてくれる。種をくれては食べるように示し、糞をくれては噛むように示す。つめで地面を掘って甘い根や球根を見つけ、私が噛んで飲み込めるように親指でこすってくれて、どうやって皮をむいて叩けば筋を取り除いて実の部分を食べられるのかを自分の鋭い歯を使って見せてくれる。彼は花卉の根元に蜜が少し入ったゼニアオイの一種を見つけると、あごを上げたまま舌を伸ばして粘り気のある蜜をひと塊口に入れ、私が同じことをしようとすると笑った。歩いている間も彼の目は至るところに注がれていて、口にできるもの、私たちの命をつなぐものをくまなく探している。

日々が過ぎ去ってゆき、私は数えるのをやめた。川は遙か後方にあった。

時おり、遙か向こうの丘の上に馬乗りたちが見え、奴らが丘を下ってゆく時に草が踏み分けられて影になるのに気付いた。だが、奴らはどこへ向かっているのだろうか。知りようもない。より近くで出会うことになるかどうか。

一度か二度、夜中に目が覚めると隣であの子が背筋を真っ直ぐに伸ばし、耳をすませていることがあった。私には何も聞こえないが、何を聞いているのかはわかった。近くに狼がいるのだ。そのうちの一匹が近付いてきたので彼はゆっくりと起き上がって闇の中で堂々と立ち、喉の奥で小さく唸った。すると狼が走り去ってゆく時に、その目が緑色に光ったのが見えた。

どこへ向かっているのかと自問することはやめた。目的地という概念がもはや必要のないものに思えた。この無限に広がる風景に飲み込まれてしまったのだ。今や人生とは区切られた時間という領域に縛られずに伸びるものであり、その感覚に日々が飲み込まれてしまったかのように。これこそシャーマンが自ら描いた円の中に座ったままの肉体を置いて旅立つ時に感じるものなのか。物理的な要素を持たない空間へ、我々人間の概念で言う数分であると同時に永遠である時間へと繰り出してゆくこの感覚なのだろうか。ここは北の果てへ向かう時に彼の精神が通り抜けてゆく地なのだろうか。それがこの草に覆われた平原の向こうにあるものなのだろうか。北の果て、それがあなのだろうか。それが私たちが、あの子と私が向かっている場所なのだろうか。どれほどの時間がかかるのだろうか。誰の催眠の中で私は今この旅をしているのだろうか。この私の連れは誰なのだろう。

私はそういったことを考えながら、数メートル先で光を浴びて進んでいる彼を、ここ数日ずっとそうであったように裸で、それがなんであれこの先の草の中にいる何かに全神経を注いで、中腰のまま片足だけで身体を支えている彼を見ていた。この子は誰だ。私が出発したかつての安全な場所、父の農園の緑地からは遠く離れ、この世界のうち人間が住む最も辺境の地からも遠く離れ、言語からさえも遠く離れ、草原がため息のような音を立てる静寂の地へ、地上の奥深くへと私を導くこの子は誰だ。彼はどこからやってきたのだ。どんな世界から。どんな時代から。私は本当に彼をマツの木々の中から見つけ出したのだろうか。それとも彼がどうにかして、人間の世界から孤立していた私を見つけた、いや再び探し出したのだろうか。彼は私が幼い頃にスルモのオリーブの木の下で会っていたあの子なのだろうか。同じあの子なのだろうか。つまり、この世にはあの子はひとりしかいないのだろうか。そして今や彼こそが私を導いているのだと、今まで一瞬たりとも理解できたことのない世界の神秘に誘^{いざな}っているのだとわかったが、彼は私をどこへ導いているのだろうか。共にさまよい、横に並んで背の高い草をかき分けることは、言語を必要としないある種の会話であり、知覚、気分、疑問、答えの究極的なやり取りであり、天候を知るようにたやすく、事実単に大地や水たまりの表面を横切る雲の影の変化のようであり、一人の考えが雲や影のように溶け出してもう一人へと流れ込み、かたちを持った言語を介することは全くない。自分に語りかけているかのような。頭の片隅から反対側へ考えを伝えているようで、届く前にその考えの輝きがつくる影を既に受け取っているために、それがなんであるかをひらめきとして知っているかのような。

私は肉体を失いつつある。私は風景になりつつある。自らが揺らめいてさざ波立っているのを感じる。自分があの空の青い弧に向かって上向きに広がってゆくのを感じる。あれが私たちの向かう先なのだろうか。

去ろうとする今になって、大地をこんなにも近く感じる。目を開くと私の眼球にはあまりにも巨大に物事が映り、見知らぬ森に生える木々を見つめているのではないかと思っただが、それは草の根であり、そしてひげ根の間にはそれらを支え、育む無数の土の粒子があり、それらがあまりにも仔細に、あまりにもはっきりと見えたので、私は瞬時にして栄養の流れがその黄金色の茎を伝ってゆく過程を理解した。それらの長くて繊細な根はほとんど透けて見えるようだ。その中で泡を含んだ液体が上昇してゆくのが見える。光を湛えた柱であり、大地が空に栄養を与えるための通路なのだ。そしてその頂、手の届かないほど高くに見える頂では、羽根のような稲穂が丸みを帯びて風に踊り、その甘い種に大地の恵みが全て注がれる。

それらの根元の周辺で森の中のように隠れ家を探し求め、食事をしているのは、とても小さな生き物たちだ。団子虫、蟻、^{はきむし} 鋏虫、^{みみず} 蚯蚓、甲虫など、別の世界で別の規律を生きる生命が群がり、永遠に繰り広げられる創造と生存と滅亡の過程を慌ただしくこなしている。私たちはこの輪に入りに来たのだ。夜に身体を広げると自分の下に感じる大地の温もりは、驚

くべきものだ。まるで昼の間中日の光を吸収して、溜め込んだその熱を放っている誰かの身体のようなのだ。それは信じられないほど柔らかくて黒く、片手いっぱいにくい上げてその不思議な香りを嗅いだ途端に、私は自分を構成するものが何かを悟り、まるでこのひと握りの黒い土が稲との間にあるような通路を私との間にも突然開き、その中を私たちを構成する物質が行き来しているようだった。もはや恐れることはない。私は横になり、眠りという緩やかな状態の中では自分の身体の下に沿って生える草を押し潰さずに済むのではないかと思ったが、夢が訪れるとそれが実際に起きているのが感じられるほどで、自分の毛穴のひとつひとつが地中の粒子ひとつひとつに対して口を開き、やり取りが始まったのを感じた。目が覚めると完全にその過程に適応していた。私は大地に深く根付き、それは眠っていた時よりも深く、離れることはないだろう。我々は物理的な肉体が有する粒子全てで大地とつながっており、呼吸で大空とつながっている。我々の肉体と世界の間には調和と交流がある。

おそらくはそれこそが、この時期に自分たちの周りで地面がひび割れて新たな春がやってくるのが、自分自身の神経の末端で起こっているかのように感じる理由なのだ。時おり茂みの中で見かける垂れ下がった小さく丸い花穂のたくさんの毛も、光沢のある先端部分から突然開いて小さなぎざぎざのハート形の姿を現す新葉の粘り気も、これだけ近くから見ると全てが奇跡のように思え、たくさんの翼が空へと弾けるように飛んでゆくのも同じく奇跡のようだ。膜は伸びに伸び、透き通ってゆき、最後にはその中で目覚めようと身動きしている生き物が隅々まで見えるようになり、その生き物は自分を包む膜を力いっぱい押し伸ばし、しまい込んだ翼が飛び方や空気の流れを知って安心して自由に羽ばたいてゆけるようになるまで続ける。この地球全体が暗闇の中で声を上げて引き伸ばされてゆく。その音は小さいが、耳を大地に当ててみれば十分聞き取ることができる。私は時おり思うのだが、もし懸命に耳をすませば自分自身の肉体がそうやって何かを突き破ろうとしているのが聞こえるのではないか、今の肉体を包む薄く透明な膜、^{さなぎ}蛹から生まれた蛾が別物であるように、自分が生まれ変わることを夢見た新たな別のかたちになるのを阻んでいる膜を押し伸ばしているのが聞こえるのではないか。

あの子もまたここで新たな存在を獲得したかのように見え、私は自分が彼にどんな危害を加えてしまったのかと自問することをやめた。彼も人間に囲まれた季節を生き延びたのだ。彼の中には何か新たな活力を感じる。彼はより身軽になった。より速く地を駆けまわる。明日や明後日の天候を感じさせる風や空の様子の変化の全てに、百もの植物やハーブの香り、目に見えない粒子を私たちの周りに振りまく小さな丸いつぼみの香り全てに敏感である。私たちはこの植物や、蚯蚓や幼虫や小さな羽の生えた^{ほった}飛蝗といったそこに群がる生き物から栄養を得ている。それらはあの子が集めてくる場所に群がっていて、この地球の連鎖に基づいて食事をし、ひとつの生き物が草を食んで栄養を摂取して、別の生き物の口の中へと移ってゆく。私たちはその連鎖の端にいたのだ。毎朝早くにあの子は狩りに出て、かつて私が我々の世界のもので彼を養ったように彼の世界のもので私を養ってくれる。

彼が夕暮れ時、どこであろうと私たちが眠るために見つけた場所の端に立って、草原が無

限に広がる北方を見つめているのを見かける。

向こうに何が待っているのか彼は知っているのだろうか。彼は自分の慣れ親しんだ土地に帰る途中で、私をそこに連れていっているのだろうか。今の私は日に日に衰え、私たちの向かうまだ見ぬ目的地へと突き進むことができなくなっている。どこかも知らされず、草の中を何メートルも進む。彼は自分が私をどこに導いているのか知っているのだろうか。彼が夕暮れ時に立っている時でさえ私は早く動き出したいという彼の衝動を感じるが、彼は赤く染まってゆく空を前に完全に静止して、遠くの高台の頂上を、明日のこの時間に私たちがいるであろう辺りに視線を向けている。私は彼を観察しながら、この旅が彼にとって持つ意義は何なのかと疑問を抱く。彼の全身が、私が横たわっている日陰からは測れないほど遠くに向かって伸びている。彼は目に映る中で最も遠くの地に対する情熱で満ちており、抑え込んであるものの、私たちの食べ物を見つけてかがみ込んだ時や、私のために辛抱強く種をより分けている時、水辺の巻貝をどうやって捕まえるか見せてくれている時、布切れを絞って私の口を潤してくれている時、それが彼の内側で輝いているのがわかる。今や私が思っていた以上に彼を近く感じることができる。こうした私に対する気配りのひとつひとつに見える彼と人間との親密さを引き出すなど、当初は想像することもできなかった。

しかしこの親近感とは反対に、彼が私の理解を優に超えた世界、私の人間としての想像を超えた世界に属していることを時を追うごとに感じる。

それはまるで彼が二つの異なる世界を同時に移動しているかのようだ。私に食べ物を与えたりこの老人の散らかしたものを片付けたりと、彼がしゃがみ込んで些細な仕事に取り組んでいるのを見ている。そして同時に、私が顔を上げると彼は数メートル先に立っており、マツ林の中で初めて彼を見た時のように、細くて光を放つ影が夕暮れを背に裸で立っていて、心の中では彼は既に私から遠く離れており、私たちが共に過ごした東の間の時の先に広がる私の知らない人生に向かって既に進んでいて、私が考えたこともない生活、二人の旅が終わりを迎えばようやく彼が入ることを許される生活に向かっているのだ。私は彼の中の野性から、自分が人間であるという感覚を引き出そうとしてきた。今の私には彼は既により高次の生命を見出していたのではないかと思える。実際のところ、彼は集落の者たちが思っていた通り神の落とし子なのだろうか。彼らの考えは常に私よりも単純で、おそらくはだからこそ真実を言い当てていたのだ。通常の子どもであれば大人として急速に成長して人間としての領域に完全に入ってゆく年頃であるが、彼の肉体が向かっているのは神としての特異な性質なのだろうか。彼が視界から消える。漂い、輪郭を失って光を放ち、私の視覚は何を捉えているのか認識できなくなる。そして同時に、背中を曲げて座り込み、つめがひび割れて欠けている汚れた手で私の食事を準備しているが、今や私は飲み込むので精いっぱいだ。彼は食事の準備に計り知れないほど力を尽くしてくれるのだが、筋の多い球根を噛んで食べやすくした実の部分のみに私に与えてくれるのは、動物が子どもたちにそうしているのを見かけたからに違いない。

そして私たちは辿り着いた。その地に。私は最後の一步を踏みしめたが、いつものように

夕食の材料を探し求めている彼はまだ気付いていない。私はこれから上ってゆく。もしくは下りてゆくのだ。粒子のひとつひとつが神々の手のもとへ。これこそ、私がトミスであるにも頻りに夢に見ながらも、眠りの中の散策では見つけることができなかつた場所だ。地球の表面、まさにここから私は消えてゆくのだ。

私が想像していたものとは全く違った。狼はいない。そこにあるのは、私たちが今日までここで過ごしてきたのとはよく似た一日の終わりに差す透き通った日光と、空には雲雀が舞い足元では虫が鳴く暖かく素晴らしい春の日だけだ。あの子がここにいる。彼が遠くの小川のほとりで動きまわっていて、身をかがめたり、膝立ちになったり、足をばねにして走りながら草につく巻貝を集めているのが見える。

何週間もかけて苦勞して越えてきたこの広大な風景を振り返ると、海を越え、ローマでの生活を越え、幼少期を越えてきて、足跡が他にもないこの地へと迷うことなく続いていることを考えると、不思議な感じがした。それらの足跡は、私の中で輝いた。私は心の中でそれらを辿って戻ることができ、一步ごとに自分が復元され、取り消されて、かつての記憶の中にある地まで再び戻ると、私は我が家の農園の一番端でオリーブの木から漏れる光を浴びて立っていて、低い石垣の向こうではたくさんの翼が羽ばたいていて、オリーブの木にもたれて山羊飼いがうたた寝しており、髪の毛の乱れた頭が後ろに垂れて喉元があらわになっている様子は、まるで私が最後に彼を見かけてから六十年近くもそのままうたた寝を続けているかのようだ。山羊の一匹が、黒い山羊がちょうど後ろ足で立ち上がってブドウの新芽を食べようとしていた。今は春だ。今は夏だ。私は三歳だ。六十歳だ。

あの子はそこにいる。

彼が肩ごしに振り返って一瞬だけ私を見ると、その肩には日光が優しく当たり、彼は再び身を低くして川辺の巻貝を集め始めた。彼は起き上がって進む。小川が反射する光を足首の辺りに浴びながら、彼はより奥へと進み、太陽の下でなめらかな石の上に乗って身体を支え、飛び跳ね、また飛び跳ね、対岸を上流に向かって進むと、そこは砂利敷きで、白、黒、灰色の砂利のひとつひとつが午後の光の中で浮かび上がってモザイク模様のように輝き、彼は立ち止まって一匹ずつ、四匹の巻貝を捕まえ、波を立てながら彼は小川を出たり入ったりして歩き続け、つま先で砂利を蹴飛ばして自由になったことに対する子どもらしい喜びに浸っている。

呼びかけようか。まだ声は出る。だがやめておこう。彼を呼び戻すことは、今明らかになるろうとしているこの豊かさに満ちた瞬間を失うことになるかもしれないし、私はこの最期の瞬間に私の目の前に広がっている全てを受け入れたい気持ちでいっぱいだった。

豊かさは去ってゆくあの子の動きに、あんなにも身軽に、喜びに満ちあふれて、一糸まともわず飛び跳ねる様子に宿り、水面から反射する光の中に消えたり浮かび上がったりしながら彼はようやく自分の居場所を見つけ、何かを集めようと身をかがめている。何をだろうか。小石だろうか。白でも黒でもなくまさに灰色で、最も繊細な模様の入った小石に目を引かれているのだろうか。それとも彼は既に目的など忘れ、ただ動く喜びのために動き、光の奥へ

と分け入っては手の隙間から光をこぼしているのであって、私の命のために生きた巻貝を食べさせる必要はもうないので彼らを自由にしてやってもよくなり、価値をなくした小石が落とされると水面は急に蝶々のように飛び上がり、その光を放つ羽が小川に虹をかける。

彼は水面の光を受けて歩く。そして私の見ている目の前でそこから抜け出す一步を踏み出し、かつてないほど遠くへゆっくりと去ってゆき、大地から離れ、水面から離れ、宙に向かっていった。

今は夏だ。今は春だ。計り知れないほどの喜びを、抑え切れないほどの喜びを感じている。私は三歳だ。六十歳だ。六歳だ。

私はそこにいる。

あとがき：物語の構想について

オウィディウスの生涯についてはほとんどわかっていないが、この記録の乏しきこそが彼をこの物語の主演としてふさわしい人物にして、私に自由な構想を練る権利を与えてくれた。私が描きたかったのは歴史小説でも伝記でもなく、実際にあったかもしれない出来事を元にしたフィクションだったからだ。

明らかになっている史実は、詩人自身が語っている。彼が生まれた場所や日付、ひとつ年上の兄が若いうちに亡くなったこと、そしてかの有名な追放のことなどである。だが、この追放についての理由は明らかになっていない。オウィディウスは役者のような人間で、効果的な誇張にこだわった彼の語りにはほとんど信憑性がない。私は追放中に書かれた『悲しみの歌』(*Trista*)を頼りにトミスの情景を描き、ローマの主な祭事の研究である『祭暦』(*Fasti*)の第三巻をパリリアの詳細を描く時の参考にした。スキタイ人の墓については歴史家ヘロドトスからヒントを得た。

この作品の主要部分である「あの子」との出会いに歴史的根拠は一切ないが、この描写についてはこの手の事例の中で最も有名な逸話と照らし合わせながら進めた。J・M・G・イタルのアヴェロン野生児ヴィクトールについての入念な考察であり、このテーマで書く以上は避けて通れない資料だ。教師のようなかたちで関わったイタルの主な関心は、十八世紀から生じていた疑問である、生得的な知識と学習した経験の問題であった。より多くの可能性を広げることができるようにするためにも、私はこの物語の場所をほとんど何も解明されていない辺境にして、時代をキリスト教の始まりという神秘的な力が働いているように感じられ、思考が未だ論理的になり切っていない年代にした。

千年近くもの時を経て古代ローマの歴史が解明困難な謎に包まれてから、オウィディウスは神話研究における格好の対象となり、彼の墓の搜索は伝説で語り継がれつつも本物とは思えない数々の史跡に対する崇拝を生み出し、いくつかは現在の中央ハンガリーといった彼の追放の地からあまりにも離れた場所にも存在している。彼が死亡した正確な日付や原因は謎のままである。

ルネサンス期の読者にとってオウィディウスはラテン語の詩人の中で最も現代的であり、最も世俗的で理解しやすく、最も人間味にあふれ、彼の懐疑主義的な要素は神話的な存在や非現実的な存在への愛によってバランスがとれていた。この現代的な性質こそ私が再現しようとしたものだったのだが、トミスへの一般的追放という単なる事実を飛び越えて私が彼に課した運命は、本物のオウィディウスにとっては信じられないものだっただろう。なぜなら私は、彼自身の作品からは決して読み取ることはできない、信仰という才能を彼に持たせたのだから。だがそれこそが狙いだった。私の目的は「変化」の物語を描くこの口の達者な語り部に、かつての彼の人生という現実では単なる文学的な描写でしかなかったその概念を実体験させることだったのだ。

Chikashi Nakazawa

Dr. Eijun Senaha

10 January 2018

An Annotated Bibliography:
David Malouf's *An Imaginary Life*

Introduction

David George Joseph Malouf (1934-) is an Australian writer of more than 30 works. Although he has won several awards such as Neustadt International Prize, International IMPAC Dublin Literary Award, Commonwealth Writers Prize, and Australian Literature Society Gold Medal, initially his works didn't attract much interest in (international) literary criticism. Moreover, his name is not yet familiar to people from other countries although there are now a decent number of criticisms written outside Australia.

An Imaginary Life (1978), the main subject of this project, is one of the major works by Malouf. This project is composed of two parts: a Japanese translation and annotated bibliography of *An Imaginary Life*. As an appendix to the Japanese translation, this bibliography is designed to help the researchers of the novella by illustrating its critical history, but at the same time it will hopefully draw more academic attention to

Malouf and his works.

All the refereed criticisms and books written in English from 1978 to 2018, from the publication year of *IL* to the present, are included. Exceptions are interviews, commercial reviews, and articles which mention but do not mainly deal with *IL* or which have little significance (e.g. papers that only summarize the plot). The following keywords are searched to complete this bibliography through online databases such as *Academic Search Premier*, *AustLit*, *Book Review Digest*, *Humanities Abstracts*, *Library, Information Science & Technology Abstracts*, *JSTOR*, *MLA International Bibliography*, *Project MUSE* and *ProQuest*: “*An Imaginary Life*,” “David Malouf,” and “postcolonial(ism).” In order to secure the reliability of this bibliography, it is decided to include only refereed academic articles and books with credibility. In the process of this project, papers written by anonymous writers and articles unpublished on non-academic websites were found, but these materials are not included for the same reason.

The following are the summary of *IL* and a brief outline of the studies. Malouf’s second work *An Imaginary Life*, published in 1978, is about a possible story of Roman poet Ovid’s last days. The narrative begins with Ovid’s recollection of the childhood and “the Child,” an imaginary friend he used to communicate. This prologue is quite idyllic. In present, however, Ovid is exiled by Augustus, the first Roman emperor, to an outpost called Tomis and shows self-pity for being relegated to this unknown world due to some reason untold to the readers. However, his mind gradually starts to find beauty in this land which he

knows no Latin word to describe. When he accompanies the tribesmen for a deer hunting, he finds a wild boy in a forest, who he believes is the Child, and starts to think that he must find the boy again and bring back to the village in Tomis. After a few years, he succeeds to take him into human society, and he tries to educate him to make him speak a human language. At the end, however, this teacher-student relationship is reversed, and Ovid feels more and more connections to nature. Meanwhile, the Child has been an unwelcome guest to the village women, and the headman Ryzak's support was the only reason he can stay there. One day, however, Ryzak suddenly dies and Ovid and the Child lose the only protection from the women's hostility, so they escape from the village. They venture northward where Ovid believes is his destination. When he arrives there, he eventually loses his self and finds the harmony with nature, with the Child to lead him.

Although the story is about a Roman poet in exile, *IL* has been strongly considered as an allegory of Australia since its publication. Malouf has been described as a postcolonialist author throughout his career, and many critics consider *IL* tells about Australia's colonial experience and the (attempted) reconciliation between white Australians and the continent, with the Child very close to nature and an outsider Ovid who at first tries to teach him his own language and conventions. This tendency becomes dominative especially after Gareth Griffiths and Harry Heseltine's works in 1989. On the other hand, there are also several criticisms which adopt psychological theories to the plot – names such as “Heidegger” and “Lacan” can be seen quite often.

After the publication of *Remembering Babylon* in 1993, the view that *IL* shows a failed attempt to communicate with Australian nature is established, with *RB* as the completion of it. *RB* is another major work by Malouf and short-listed for the Booker Prize. This novel depicts a white settlement in Queensland, Australia in the mid-nineteenth century to which a white man Gemmy “returns” after spending half his life with Aborigines. His arrival brings turmoil to the settlers and causes rifts among them. Gemmy slowly learns to live with the settlers, but they never truly accept him. He eventually returns to the wild nature, leaving the main characters with a lingering memory of him and a question what he has given to them.

This obvious reference to Australia’s colonial past strengthens Malouf’s image as a postcolonial author and leads to such readings on *IL* as well. As the first critic to review the two works together, Bill Ashcroft, also using Lacanian concept, argues the Child in *IL* returns as Gemmy in *RB*. However, there are a small number of criticisms which focus on the failure of Malouf or the two works. Peter Otto argues Malouf for revising the colonial history. Several other critics regard Malouf as a revisionist and *RB* as a convenient story for white.

Other than Ashcroft, Don Randall and Lamia Tayeb are the well-known critics in this field. Randall publishes an overall work on Malouf, and Tayeb mainly focuses on the white people’s attempt to make Australia home and themselves Australians. One can say the peak of the study of *IL* (and *RB*) is late 2000s. This bibliography contains materials published in several countries other than Australia: India, Italy,

Netherland, Spain, Sweden, South Africa, United Kingdom, and United States. It seems Malouf's works are receiving more attention worldwide, but the number of materials published in 2010s is only 13 and Malouf study looks stagnant for now.

There are 59 materials in this annotated bibliography: 51 articles and 7 books including a collection of reviews exclusively on Malouf's works. However, 6 of them are unavailable so not annotated. Years in which no (significant) material is published is indicated as "No data." Items are listed chronologically without separating books and articles so that readers can follow the history of Malouf studies. Although the subject of this bibliography is *IL*, some of the annotations refer to *RB* as well since it plays an important role for the understanding of it. This annotated bibliography of *IL* will guide the researcher of it and contribute to the development of Malouf studies.

List of Abbreviation

ARIEL: A Review of International English Literature

IL: An Imaginary Life

RB: Remembering Babylon

Bibliography

-1978-

No data

-1979-

No data

-1980-

- [1] Brady, Veronica. "Making Connections: Art, Life, and Some Recent Novels." *Westerly: A Quarterly Review*, vol. 25, no. 2, 1980, pp. 61-75. *Westerly Magazine*, westerlymag.com.au/. Accessed 28 July 2016.

Argues that *IL* denies the possibility of an autonomous culture entirely free from nature, and that the union between nature and the Ovid is a defeat rather than a victory for human since he is silenced when he surrenders to nature. Brady defines the environment in *IL* as an antagonist of human which works to destroy civilization.

-1981-

No data

-1982-

- [2] Bishop, Peter. "David Malouf and the Language of Exile." *Australian Literary Studies*, vol. 10, no. 4, 1982, pp. 419-28.

Divides *IL*, with a psychological reading, into four phases through which Ovid searches for his new roots: awakening of his depth imagination, release from the domination by his family, acceptance of the land of exile, and further journey with the Child. The journey of Ovid from Father law into Mother land indicates the process of discovering new roots for Australians.

-1983-

No data

-1984-

- [3] Hergenhan, Laurie. "Discoveries and Transformations: Aspects of David Malouf's Work." *Australian Literary Studies*, vol. 11, no. 3, 1984, pp. 328-41.

Analyzes the interplay and reconciliation between Ovid's childhood and deprived present which are realized through transcending the uncongenial place and time (and Ovid himself). In this sense, imagination that initiates his change is the real hero, and Ovid and his world are merely its vehicle. Hergenhan argues IL depicts the possibility of human imagination for transforming the perceiver's world.

-1985-

- [4] Craven, Peter. "Crooked Version of Art: The Novels of David Malouf." *Scripta*, vol. 3, 1985, pp. 99-126.

Not available as of 10 Jan. 2018

-1986-

- [5] Buckridge, Patrick. "Colonial Strategies in the Writing of David Malouf." *Kunapipi*, vol. 8, 1986, pp. 48-58.

Not available as of 10 Jan. 2018

- [6] Jolly, Roslyn. "Transformations of Caliban and Ariel: Imagination

and Language in David Malouf, Margaret Atwood and Seamus Heaney.” *World Literature Written in English*, vol. 26, no. 2, 1986, pp. 295-330.

Analyzes Malouf’s transposition between exile and colonialism comparing Ovid’s transformation to Caliban and Ariel in Shakespeare’s *The Tempest*, from the exiled and dispossessed to the liberated. Jolly claims a timeless world and a northern setting conversely provides the novella a universal perspective on Australia’s colonial experience free from cultural cliché.

-1987-

- [7] Dommergues, André. “Traditions and Dream in David Malouf’s *An Imaginary Life*.” *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 10, no. 1, 1987, pp. 61-67.

Points out that *IL*’s anthropological plot follows J. M. Itard’s survey on Victor of Aveyron (although at first it seems to side with the opposite views like P. Pinel’s) However, the reversed teacher-student relationship of Ovid and the Child denies the limit of human that Itard suggests and illustrates human imagination that guides us to the ultimate freedom.

-1988-

- [8] Attar, Samar. "A Lost Dimension: The Immigrant's Experience in the Work of David Malouf." *Australian Literary Studies*, vol. 13, no. 3, 1988, pp. 308–21.

Not available as of 10 Jan. 2018

- [9] McDonald, Avis G. "Beyond Language: David Malouf's 'An Imaginary Life.'" *ARIEL*, vol. 19, no. 1, 1988, pp. 45-54. *ARIEL*, ariel.ucalgary.ca/ariel/index.php/ariel/index. Accessed 26 July 2016.

Examines the previous studies which read *IL* as a reconciliation to the relegation and past, then gives a further reading that Ovid's true exile from unity with the natural world began when he parted with his childhood innocence and family. McDonald shows Ovid's reconciliation to the true exile manifests an ideal relationship between humanity and nature.

-1989-

- [10] Griffiths, Gareth. "Being there, being There: Kosinsky and Malouf." *ARIEL*, vol. 20, no. 4, 1989, pp. 132-48.

Associates the final scene of *IL* with the Australian landscape and regards the novella as a postcolonial work in which the protagonist abandons Eurocentric thoughts. Griffiths insists that the main themes of this work such as the linguistic displacement and the cross-culturality give it a postcolonial nature, although it's not overtly about colonial place or experience.

- [11] Heseltine, Harry. "An Imaginary Life – The Dimensions of Self." *Australian Literary Studies*, vol. 14, no. 1, 1989, pp. 26-40.

Shows *IL*'s links to both the contemporary circumstance and traditions of Australian literature and its reaction against modern Australian matrix from the vantage point of the late 1980s – looking at it from the present, some features of *IL* seem to be adversary reactions to then Australia. Heseltine argues that the setting denies nationalism which believes a culture is composed exclusively of what happens within the nation.

-1990-

- [12] Delrez, Marc. "Antipodean Dialogue: R. Stow and D. Malouf." *Crisis and Creativity in the New Literatures in English*, edited by Geoffrey V. Davis and Hena Maes-Jelinek, Amsterdam, Rodopi, 1990, pp. 291-307.

Maintains that *IL* draws the struggles of a man to assimilate to himself the spirits of an alien land and culture, so his journey acquires an overtone of conquest. The journey is indeed one towards unity and, but it can still be interpreted as an attempt to absorb the Other. Delrez argues Malouf's succeeding novels liberate *IL* from this confining structure.

- [13] Neilsen, Philip. *Imagined Lives: A Study of David Malouf*. St. Lucia, Australia, U of Queensland P, 1990.

Compares *IL* with Malouf's previous and first novel *Johnno* and argues that it develops some polarities introduced in *Johnno*: wholeness/incompleteness, nature/culture, and change/stasis. Moreover, as Malouf himself has mentioned the link between *IL* and Australia, Ovid's reconciliation can be one to Australian landscape as well. Thus, in Neilsen's view, *IL* represents the growth of self-confidence of Australians as Australians.

- [14] Stephens, John. "‘Beyond the Limits of Our Speech ...’: David Malouf's *An Imaginary Life*." *Commonwealth Novel in English*, vol. 3, no. 2, 1990, pp. 160-69.

Suspects the unification that Ovid achieves is merely self-deception by mentioning two bases of the narrative's unreliability: the inherent limitation of a first-person narration and the gap between signifier and signified. Stephens doubts the narration even more since it is supposed to be a translation by "you" of Ovid's Latin writing which is in fact written in English by Malouf.

-1991-

- [15] Hansson, Karin. *Sheer Edge: Aspects of Identity in David Malouf's Writing*. Lund, Sweden, Lund UP, 1991.

Defines *IL* as a story of finding the true identity with examples of the interrelation with the animal/natural world, the dissolve of the temporal and spatial borders, and the loss and renunciation of the language. Hansson argues Ovid's true identity comes from the metamorphosis into a part of wholeness which he achieves through the understanding of himself within the eternal continuity of creation.

-1992-

- [16] Taylor, Andrew. "Postmodern Romantic: The Imaginary in David Malouf's *An Imaginary Life*." *Imagining Romanticism: Essays on English and Australian Romanticisms*, edited by Deirdre Coleman

and Peter Otto. Cornwall, UK, Locust Hill Publishing, 1992, pp. 275-90.

Defines Ovid's exile as a return to the beginning, "the Imaginary" by Lacan. Taylor observes that Ovid's journey from the Imaginary to the Symbolic began with the use of Latin, a synecdoche of all languages, which divide things to recognize, and when his journey back to the Imaginary is accomplished, his subjectivity (and imagination as well) ceases to exist.

-1993-

[17] Ashcroft, Bill. "The Return of the Native: *An Imaginary Life* and *Remembering Babylon*." *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 16, no. 2, 1993, pp. 51-60.

Proposes a notion that the Child in *IL* returns as Gemmy in *RB* but whose purposes are different: one questions the primacy of language in our understanding of the world and the other authentic indigeneity. Ashcroft uses Lacanian concept of the Symbolic to describe the cultural norms offered by the two works. *IL* illustrates the Imaginary with the Child, and it breaks into our Symbolic world in *RB* with Gemmy to show the possibility of human adaptation to Australia, of a transformation into a postcolonial life.

- [18] Colakis, Marianthe. "David Malouf's and Derek Mahon's Visions of Ovid in Exile." *Classical and Modern Literature: A Quarterly*, vol. 13, no. 3, 1993, pp. 229-39.

Examines the similarities and differences between the real Ovid in the last works like *Trista* and Malouf's Ovid. Colakis insists that if one regards *IL* as a *Metamorphoses* without frivolity, the descriptions in exile poems by Ovid are untrue and Malouf's Ovid would be his true nature.

- [19] Griffiths, Gareth. "An Imaginary Life: The Post-Colonial Text as Transformative Representation." *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 16, no. 2, 1993, pp. 61-69.

Argues that by avoiding any overt settings, *IL* refuses to incorporate the perception of postcolonialism into "exotica" and successfully indicates the possibility of a text open to the complexity of postcolonial societies. Griffiths insists *IL* is a new stage of Australian writing which appropriates classic texts of the dominant society, Ovid's works, to illuminate postcolonial perspective.

- [20] Indyk, Ivor. *Australian Writers: David Malouf*. Melbourne, Oxford UP, 1993.

Illustrates the homosexual desire and masculine relationship which *Johnno* suggests but neglects, and argues they can be seen in *IL* as well. Indyk points out that while *IL* admits women's privilege over the primitive world, the novella shows the relationship between father and child that is purer and more creative than that of mother and child.

- [21] Laigle, Geneviève. "'Entering the Dimensions of my Self': Malouf's *An Imaginary Life*." *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 16, no. 2, 1993, pp. 70-78.

Follows the spiritual journey in which Ovid finds the message that life and death, like past and present, are the same thing. Through the encounter with the Child, Ovid finds the way back to his childhood and also to human divinity.

-1994-

- [22] Attar, Samar. "Exile and the Loss of Language." *Provisional Maps: Critical Essays on David Malouf*, edited by Amanda Nettelbeck. Perth, The Centre for Studies in Australian Literature,

1994, pp. 51-69.

Demonstrates that Ovid's dual response to otherness, his rejection and acceptance of the alien place, eventually bridges two different worlds, languages and cultures. Attar remarks Ovid overcomes his exile through the journey from a language to something beyond language, and this is reconciliation that Malouf shows.

- [23] Kavanagh, Paul. "Elegies of Presence: Malouf, Heidegger and Language." *Provisional Maps: Critical Essays on David Malouf*, edited by Amanda Nettelbeck. Perth, The Centre for Studies in Australian Literature, 1994, pp. 149-62.

Contends that some of the metaphors, terms, and ideas in Malouf's writing are similar to Heidegger's. However, Kavanagh argues that at the same time *IL*, along with Malouf's poems, implies an understanding of the world through its own network of interrelations which is independent of human word.

- [24] Pati, Madhusudan. "'Banabhattaki Atmakatha'" and 'An Imaginary Life': A Comparison in Sensibility." *Literary Criterion*, vol. 29, no. 2, 1994, Bombay, India, Popular Prakashan, pp. 1-17.

Compares *IL* with an Indian novel *Banabhattaki Atmakatha* by Hazari Dwivedi and points out the urge to escape the strong masculinity of Latin culture and to surrender his human self to a larger unity. Pati argues that Malouf uses Ovid's story to project a postromantic transcendence of Western materialism and reductionism.

-1995-

No data

-1996-

- [25] Doty, Kathleen, and Risto Hiltunen. "The Power of Communicating without Words – David Malouf's *An Imaginary Life* and *Remembering Babylon*." *Antipodes: A North American Journal of Australian Literature*, vol. 10, no. 2, 1996, pp. 99-105. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/41956750. Accessed 26 Aug. 2016.

Focuses on the role of the four forms of non-verbal communication in accomplishing wholeness and unity in *IL* and *RB*: gestures, silence, sensory communication, and animal communication systems. Malouf utilizes verbal communication to describe non-verbal communication, and these two are intertwined

and interdependent in this process of unification rather than opposite.

-1997-

- [26] Egerer, Claudia. *Fictions of (In)Betweenness*. Göteborg, Sweden, Acta Universitatis Gothoburgensis, 1997.

Argues that memory constitutes a double ground of potential hindrance and incentive for new perceptions of home. Egerer points out the unhomeliness of home and the homefulness of exile in *IL*, which lead to the conclusion that the concept of home/exile is linked to a state of mind rather than a place, and argues that the main characters perpetually undo the dichotomy by never being fully at home or in exile.

-1998-

- [27] Concilio, Carmen. "Topology vs Geometry: The Relational Geography of Self and Other in David Malouf's *An Imaginary Life* and *Remembering Babylon*." *Routes of the Roots: Geography and Literature in the English-Speaking Countries*, edited by Isabella Maria Zoppi. Rome, Bulzoni, 1998, pp. 737-49.

Considers a shift from the relation of a self with the place of its

own to that with the place of the Other as a translation from topology to geometry. Concilio argues that the recognition of the Other represents a way out of the logocentric topography of the self. Ovid, like Gemmy in *RB*, was translated into a new landscape, and acknowledges his own otherness and escapes from the history of his native place into a geography of otherness.

-1999-

- [28] Concilio, Carmen. "The Magic of Language in the Novels of Patrick White and David Malouf." *Coterminous Worlds: Magical Realism and Contemporary Post-Colonial Literature in English*, edited by Elsa Linguanti. Amsterdam, Rodopi, 1999, pp. 29-45.

Examines the magic realism aspect of Malouf's writing. Ovid experiences many forms of translation, and he abandons the idea of totality represented by the Empire's borders and accepts the infinity of space, an endless exile. Concilio also makes comments on *RB* from the same perspective.

- [29] Morton, Peter. "Problems of Historicity in David Malouf's *An Imaginary Life*." *Classical and Modern Literature: A Quarterly*, vol. 20, no. 1, 1999, pp. 1-17.

Tackles an unsolved question by Heseltine ([11]): how much is Malouf's Ovid the representation of the historical figure? With many details, Morton shows that *IL* does not simply follow the real history of Ovid or simply ignore it. Malouf remains *IL* half fictional and half historical, and he opens up an imaginative space to fill with the oppositions of what can be known and what must be imagined.

- [30] Taylor, Andrew. "Origin, Identity and the Body in David Malouf's Fiction." *Australian Literary Studies*, vol. 19, no. 1, 1999, pp. 3-14. *MLA International Bibliography*, www.mla.org/Publications/MLA-International-Bibliography. Accessed 11 Sept. 2016.

Challenges the tendency to categorize Malouf as a historical novelist and see his works as a series of representations of Australian history. Rather than fictional revisiting of historical moments, Taylor focuses on the urge to explore and challenge the notions of boundary and of language in *IL* and *RB* along with other six works.

-2000-

- [31] Anghel, Corina Ana. "Malouf's and Michel Tournier's Sub-

Versions of Exile.” *Revista De Studii Britanice Şi Americane* [*B.A.S.: British and American Studies*], vol. 6, 2000, pp. 9-13.

Illustrates Ovid’s adventure as “returning,” not “wandering.” Anghel explains that through the Child’s understanding of the world, Ovid finally starts to exist without being in relationship to the society, and that this shift from “being” to “existence” subverts the meaning of home and exile and the topos of exile itself.

- [32] Bliss, Carolyn. “Reimagining the Remembered: David Malouf and the Moral Implications of Myth.” *World Literature Today*, vol. 74, no. 4, 2000, pp. 724-32. *MLA International Bibliography*, www.mla.org/Publications/MLA-International-Bibliography. Accessed 20 July. 2016.

Argues Malouf uses myths to explore and explode the limit of human nature, defining myths as human creations to exercise their capacities. Adopting Cassirer’s concept of myth, Bliss reads *IL* as a myth about (paradoxically) demystifying myths with Ovid’s act of mythmaking which eventually leads him to a world without human language, and *RB* as a myth which leads readers to the reconciliation in postcolonial Australia.

-2001-

- [33] Ashcroft, Bill. *On Post-Colonial Futures: Transformations of a Colonial Culture*. London, A&C Black, 2001.

Not available as of 10 Jan. 2018

-2002-

- [34] Herrero, M. Dolores. "David Malouf's *An Imaginary Life*: A Return to the Very Edge of Memory, History and the Multicultural Self." *Narrativa i història*, edited by Assumpta Bernal, et al. Valencia, Facultat de Filologia, Universitat de València, 2002, pp. 37-59.

Explores the relationship among history, (auto)biography and fiction in *IL*. The oscillation between historical/temporal and personal/timeless suggests the need to defy all the conventional binaries and the very concept of fringe/center, difference, and boundary. Herrero concludes one's identity should be based on questioning of hegemonic systems, and by doing so, *IL* emphasizes the richness of postcolonial societies.

- [35] Shaw, Narelle. "Experiencing a Wilderness and Cultivating a Garden: The Literary Environmentalism of David Foster and

David Malouf.” *Antipodes: A North American Journal of Australian Literature*, vol. 16, no. 1, 2002, pp. 46-52. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/41957168. Accessed 11 Sept. 2016.

Points out that Malouf introduces the idea that landscapes are human constructs through Ovid’s garden in the wilderness. Shaw argues the interconnected worlds of culture and nature in *IL* show, from environmentalist perspective, the importance of the imagination in resolving the tension between consciousness and environment.

-2003-

- [36] Ramsey-Kurz, Helga. “Lives without Letters: The Illiterate Other in *An Imaginary Life*, *Remembering Babylon* and *The Conversations at Curlow Creek* by David Malouf.” *ARIEL*, vol. 34, no. 2-3, 2003, pp. 115-33. *ARIEL*, ariel.ucalgary.ca/ariel/index.php/ariel/article/view/3849/3786. Accessed 18 Sept. 2016.

Compares three works by Malouf and concludes that his fiction is founded on a unique philosophy about literacy: the notion is used to explore differences between cultures and to negotiate them. Unlike previous papers, this study focuses on the written discourse, and argues that Malouf uses literary language to show what lies

outside the domain of literacy and confront its limit.

-2004-

- [37] Boldrini, Lucia. “‘Allowing it to Speak out of Him’: The Heterobiographies of David Malouf, Antonio Tabucchi and Marguerite Yourcenar.” *Comparative Critical Studies*, vol. 1, no. 3, 2004, pp. 243-63. *Research Online*, research.gold.ac.uk/4270/. Accessed 20 Sept. 2016.

Argues autobiography is caught between present/past and self/other, and that while its subject desires to transcend this division, he/she simultaneously desires to experience it consciously. Thus, Malouf’s Ovid can only realize the transcendence through his death, and *IL* shows the desire of an “autography” written by another to bypass “writing I” and “written I” and to let the subject live through death.

- [38] Pons, Xavier. “Reconciling Words and Things: Language Allegories in David Malouf’s *Remembering Babylon*.” *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 27, no. 1, 2004, pp. 99-110.

Explores Malouf’s preoccupation, in *RB* and *IL*, to find a perfect

language in harmony with the reality, which removes the gap between signifier and signified. Although Malouf denies the possibility that they can be completely reconciled, the artificial nature of language gives itself flexibility and adaptability to the world. The main subject of this paper is *RB*, but it shows Malouf's motivation is clearer in *IL*.

- [39] Rodda, Brendan. "David Malouf's Language of Reconciliation: Stylistic Patterns in *An Imaginary Life*." *Literature & Aesthetics*, vol. 14, no. 1, 2004, pp. 49-66. *Literature & Aesthetics*, openjournals.library.usyd.edu.au/index.php/LA/article/view/5106. Accessed 7 Oct. 2016.

Adds the aspect of linguistics, consideration on language for reconciliation, to the preceding studies of *IL* and claims that Ovid's use of language reflects the transition of his attitude to nature. Citing two different narrations by Ovid of the same scene –his childhood– Rodda examines the lexico-grammar in *IL* which displays Ovid's integration with nature and with himself.

-2005-

- [40] Smith, Yvonne. "In the Beginning: David Malouf's *An Imaginary Life*." *Australian Literary Studies*, vol. 22, no. 2, 2005,

pp. 160-74. *MLA International Bibliography*,
www.mla.org/Publications/MLA-International-Bibliography.
Accessed 23 Sept. 2016.

Compares different versions of the significant scene of the scarlet poppy in the published typescript and several drafts of *IL*, following Malouf's actual process of writing them. Citing author's own comments, Smith concludes that throughout the novella Malouf expresses Ovid's interior perceptions and consciousness as external realities, namely objects and experiences, which allow his narration to assume natural tone.

-2006-

[41] Columbus, Claudette Kemper. "Many-Sided Analogies in Arguedas, Asturias, and Malouf." *Metaphor and Symbol*, vol. 21, no. 2, 2006, pp. 105-20. *MLA International Bibliography*, www.mla.org/Publications/MLA-International-Bibliography.
Accessed 26 Sept. 2016.

Focuses on transient analogies in *IL*, which let Ovid access to a reality beyond the customary definition by realism and help him recover mental health. Columbus points out that these analogies are nonliterate, pagan, and foreign to Western thought, thus invokes imagistic fluidity (of time), not cultural stability.

- [42] Nikro, Saadi. "David Malouf: Exploring Imperial Textuality." *Postcolonial Text*, vol. 2, no. 2, 2006. *Postcolonial Text*, www.postcolonial.org/index.php/pct/article/view/371/811. Accessed 20 Sept. 2016.

Suggests that although *IL* tries to create the other free from the binary of self/other, it shows a subversion of Rousseauistic concept of nature in which human beings find spiritual redemption, and a conventional notion of frontier which justifies narratives of conquest and exploration. In doing so, *IL* demonstrates the language and figurative power of imperial textuality.

Nikro also argues that *RB* is a rewriting of *IL* which succeeds in an escape from this imperial narrative terrain by negotiating the fracturing force of self- and other-understanding, which *IL* only implies.

- [43] Randall, Don. "'Some Further Being': Engaging with the Other in David Malouf's *An Imaginary Life*." *Journal of Commonwealth Literature*, vol. 41, no. 1, 2006, pp. 17-32.

Argues Malouf's writing style orients itself toward transformation and his characters are hybrid or syncretic, thus his

texts are the process to communicate with the other. Another process illustrated in *IL* is identification through imagination and dreams. Randall remarks that Malouf explores a full apprehension of the other, although the critic denies its possibility, by his grammar and figurative patterns.

- [44] Tayeb, Lamia. *The Transformation of Political Identity from Commonwealth through Postcolonial Literature: The Cases of Nadine Gordimer, David Malouf and Michael Ondaatje*. Lewiston, US, Edwin Mellen Press, 2006.

Examines the way Malouf connects postcolonial themes with postmodern aesthetics and deals with politics. Tayeb analyzes the formation of individual identity in relation to the idea of home and the other and communal resistance to imperial hegemony. These arguments are developed under three categories: “man-in-time,” “man-in-consciousness,” and “man-in-language.”

-2007-

- [45] Bortoluzzi, Maria. “Language and Partnership in David Malouf’s *An Imaginary Life*.” *The Goddess Awakened: Partnership Studies in Literatures, Language and Education*. Udine, Italy, Forum, 2007, pp. 83-97.

Studies the metamorphosis of language from of culture to of nature, from one to divide to one to share. This paper's focus is on the meta-linguistic aspect of the novel, the language refers to itself, and the metamorphosis the narrative undergoes towards a holistic communication. Bortoluzzi argues that the difference between the narrator, narration, and addressee eventually disappears through the metamorphosis.

- [46] Loughlin, Gerard. "Found in Translation: Ovid, David Malouf and the Werewolf." *Literature & Theology: An International Journal of Religion, Theory, and Culture*, vol. 21, no. 2, 2007, pp. 113-30.

Explores the nature of human identity in *IL* which one finds his/her self through the process of becoming other existence and arriving alien place. Loughlin argues that Malouf shows this by connecting Ovid's last days with a tale of a werewolf and illustrating Ovid's and the Child's transformation.

- [47] Randall, Don. *Contemporary World Writers: David Malouf*. Manchester, Manchester UP, 2007.

Focuses on the idea of “otherness” and argues the other is the indispensable agent of our changes, linking *IL* to *Johnno*, the preceding novel by Malouf. Although Ovid opposed imperial culture before, he experiences himself as a displaced piece of empire during his exile.

- [48] Stanchits, Zoya. “In Search of Spiritual Freedom in a Modern World: Crossing Borders in Fyodor Dostoyevsky’s *The Idiot*, Shen Congwen’s *The Border Town* and David Malouf’s *An Imaginary World*.” *Western Humanities Review*, vol. 61, no. 3, 2007, pp. 58-66.

Argues the purpose of crossing borders in *IL* is, as the same as many people do in real life, to escape from modern life of the sophisticated civilization and to find a peaceful and pure existence on the peripheral. The tension between opposing worlds makes the protagonist’s move through the boundary, and this act reveals the isolation and loneliness common in modern life.

- [49] Tayeb, Lamia. “‘The Final Frontier’: Exploring Language and Consciousness in David Malouf’s *An Imaginary Life*.” *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 29, no. 2, 2007, pp. 43-54.

Studies Ovid's psychic and linguistic evolution in relation to Lacanian conception of ego, and reads *IL* as Malouf's critique of imperial legacies in Australia and suggestion of an alternative vision. Tayeb argues *IL* suggests a postcolonial rediscovery of individual and national selfhood through reconciliation with Australian landscape and its indigenous people.

-2008-

- [50] Abblitt, Stephen. "Journeys and Outings: A Case Study in David Malouf's Closet." *Australian Geographer*, vol. 39, no. 3, 2008, pp. 293-302. *Academic Search Premier*, www.ebscohost.com/academic/academic-search-premier. Accessed 27 Sept. 2016.

Insists *IL* is an autobiographical work of Malouf in which he deconstructs both the metaphoric and real spaces of the heteronormative/homophobic closet he has lived in as a homosexual. Abblitt examines the journey of Ovid and the Child as one from the restricted space to the freedom and Ovid's death as the death of that old world.

- [51] Byron, Mark. "Crossing Borders of the Self in the Fiction of David Malouf." *Sydney Studies in English*, vol. 31, 2008, pp. 76-

93. *Sydney Studies in English*,

openjournals.library.usyd.edu.au/index.php/SSE/article/view/587.

Accessed 29 Sept. 2016.

Considers self-other relation in *IL* and *RB* under three categories: “the animal and the human,” “an I and a You,” and “the human and divinity.” Byron argues that, through the self-other relation which these two works explore, readers can get out of Ovid’s consciousness and associate the story with their own world or gain an insight of indigenous people which is only glimpsed in the novella.

-2009-

No data

-2010-

[52] Brady, Veronica. “All That is Solid Melts into Air : Australia’s Future?” *Le Simplegadi*, vol. 8, no. 8, 2010, pp. 16-23. *Le Simplegadi*, all.uniud.it/simplegadi/?page_id=649. Accessed 9 Feb. 2017.

Explores two attempts in settling non-indigenous Australians into the land in Furphy’s *Such Is Life* and *IL*. Brady sees the

former novel as a tension between the self and nature and the latter as dreams which enables the settlers to live in tune with the universe. According to Brady, *IL* shows the way how to “dwell” in the land, not “build” on it.

- [53] Sestigiani, Sabina. “Silence, the ‘Virtue of Speaking’: David Malouf’s *An Imaginary Life* and Walter Benjamin’s *Philosophy of Language*.” *Orbis Litterarum: International Review of Literary Studies*, vol. 65, no. 6, 2010, pp. 481-96. *MLA International Bibliography*, www.mla.org/Publications/MLA-International-Bibliography. Accessed 4 Oct. 2016.

Argues Ovid’s attempt to acquire an ultimate language of silence in *IL*, an attempt to fill the gap between word and world, is an example of Walter Benjamin’s idea of *Ursprache*, primeval language. Sestigiani remarks that *IL* depicts a state of grace only to deny it with a wild boy.

-2011-

- [54] Otto, Peter. “‘Are We the Future of the Past?’ Gothic Pasts, Gothic Futures, and Imaginary Lives.” *Australian Literary Studies*, vol. 26, no. 3/4, 2011, pp. 86-101. *Academic Search Premier*, www.ebscohost.com/academic/academic-search-premier.

Accessed 7 Oct. 2016.

Suggests that the political reading of *IL* to connect the story with Australia's predicament and the mythical reading to imagine Ovid's last days are not contradictory but complementary to each other, and that this gap between two perspectives enables the third reading about a universal human potential for transformation of the self and other, about a foundation undisturbed by history.

- [55] Ziogas, Ioannis. "The Myth is Out There: Reality and Fiction at Tomis (David Malouf's *An Imaginary Life*)." *Two Thousand Years of Solitude: Exile After Ovid*, Oxford, Oxford UP, 2011, pp. 289-305. *Academia.edu*, www.academia.edu/1930633. Accessed 9 Feb. 2017.

Focusing on the deadness and silence that Ovid feels in *IL*, Zoigas argues that Malouf likens *IL* to Ovid's *Metamorphoses* and transforms a Roman poet into a narrator of postcolonial discourse by writing him as a poet and a character in his own poem at the same time.

-2012-

- [56] Grasa, Royo, and Miria Pilar. "(Un-)settling Reconciliation in

David Malouf's 'An Imaginary Life.'" *Commonwealth Essays and Studies*, vol. 35, no. 1, 2012, pp. 83-92.

Not available as of 10 Jan. 2018

-2013-

[57] Bronwyn, Lay. "Imaginary Exile." *Life Writing*, vol. 10, no. 4, 2013, pp. 441-58.

Not available as of 10 Jan. 2018

-2014-

[58] Ashcroft, Bill. "David Malouf and the Poetics of Possibility." *Journal of the Association for the Study of Australian Literature*, vol. 14, no. 2, 2014. *Journal of the Association for the Study of Australian Literature*, openjournals.library.sydney.edu.au/index.php/JASAL/article/view/9889/9778. Accessed 11 Dec. 2017.

Examines several works by Malouf and regards youth, which can be seen especially in the Child in *IL* and Gemmy in *RB*, as an agency for coming into being in a different world. Through this agency Ovid acquires a different perspective, and this other life is what

Malouf constantly tries to express in his works.

- [59] Grogan, Bridget. "Homo Ferus: The Unification of the Human and the Environmental in David Malouf's *An imaginary life*." *Scrutiny2: Issues in English Studies in Southern Africa*, vol. 14, no. 2, 2014, pp. 18-29. *Taylor & Francis Online*, www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/18125441.2014.946531. Accessed 13 Dec. 2017.

Argues *IL* criticizes Enlightenment values that lead to the racial classification and disregard of the environment through its interest in a feral child. For Malouf, unlike traditional thoughts, the feral child eludes the categorization of racial other: he blurs "human" and "nature" and undermines the classification between them and between races.

-2015-

No data

-2016-

No data

-2017-

No data

-2018-

No data

Critics Index

[A]

Abblitt, Stephen: [50]

Craven, Peter: [4]

Anghel, Corina Ana: [31]

[D]

Delrez, Marc: [12]

Attar, Samar: [8], [22]

Dommergues, André: [7]

Ashcroft, Bill: [17], [33], [58]

Doty, Kathleen: [25]

[B]

Bishop, Peter: [2]

[E]

Egerer, Claudia: [26]

Bliss, Carolyn: [32]

[G]

Boldrini, Lucia: [37]

Grasa, Royo: [56]

Bortoluzzi, Maria: [45]

Griffiths, Gareth: [10], [19]

Brady, Veronica: [1], [52]

Grogan, Bridget: [59]

Bronwyn, Lay: [57]

[H]

Hansson, Karin: [15]

Buckride, Patrick: [5]

Heseltine, Harry: [11]

Byron, Mark: [51]

Hergenhan, Laurie: [3]

[C]

Colakis, Marianthe: [18]

Herrero, M. Dolores: [34]

Columbus, Claudette Kemper: [41]

Hiltunen, Risto: [25]

Concilio, Carmen: [27], [28]

[I]

Indyk, Ivor: [20]

[J]

Jolly, Roslyn: [6]

[K]

Kavanagh, Paul: [23]

[L]

Laigle, Geneviève: [21]

Loughlin, Gerard: [46]

[M]

McDonald, Avis G: [9]

Morton, Peter: [29]

[N]

Neilsen, Philip: [13]

Nikro, Saadi: [42]

[O]

Otto, Peter: [54]

[P]

Pati, Madhusudan: [24]

Pons, Xavier: [38]

[R]

Ramsey-Kurz, Helga: [36]

Randall, Don: [43], [47]

Rodda, Brendan: [39]

[S]

Sestigiani, Sabina: [53]

Shaw, Narelle: [35]

Smith, Yvonne: [40]

Stanchits, Zoya: [48]

Stephens, John: [14]

[T]

Tayeb, Lamia: [44], [49]

Taylor, Andrew: [16], [30]

[Z]

Ziogas, Ioannis: [55]